

IT3D23

324
292



永井心齋

心齋

東京

明治
45. 5. 8
丙亥

要旨三則

- 一、本書は明治四十三年七月に氣樂會主催の夏期參禪會上にて講述せられたる者の筆録なれば完全を期し難きも老師は東奔西馳の巡教中に勤めて嚴密なる添削の勞を採られたれば其價值を喋々するの要なからん
- 二、本書の編纂校正等の責は擧げて編者になり若し烏焉の限りあらば再版の際に訂正をなすべし
- 三、本書は始め荒井淡光君の力を借り更に山本十鈴君を頼せり記して其の勞を謝す

信心銘



至道無難 唯嫌揀擇 但莫憎愛 洞然明白
毫釐有差 天地懸隔 欲得現前 莫存順逆
違順相爭 是爲心病 不識玄旨 徒勞念靜
圓同大虛 無欠無餘 良由取捨 所以不如
莫逐有緣 勿住空忍 一種平懷 泯然自盡
止動歸止 止愛彌動 唯滯兩邊 寧知一種
一種不通 兩處失功 遺有沒有 從空背空
多言多慮 轉不相應 絕言絕慮 無處不通

大唐 勅賜 鑑智大師僧璨撰

歸根得旨	隨照失宗	須臾返照	勝却前空
前空轉變	皆由妄見	不用求真	惟須息見
二見不住	慎勿追尋	纔有是非	紛然失心
二由一有	一亦莫守	一心不生	萬法無咎
無咎無法	不生不心	能隨境滅	境逐能沉
境由能境	能由境能	欲知兩段	元是一空
一空同兩	齊含萬象	不見精麤	寧有偏黨
大道體寬	無易無難	小見狐疑	轉急轉遲
執之失度	必入邪路	放之自然	體無去住
任性合道	逍遙絕惱	繫念乖真	昏沉不好
不好勞神	何用踈親	欲趣一乘	勿惡六塵

六塵不惡	還同正覺	智者無爲	愚人自縛
法無異法	妄自愛著	將心用心	豈非大錯
迷生寂亂	悟無好惡	一切二邊	妄自斟酌
夢幻空華	何勞把捉	得失是非	一時放却
眼若不睡	諸夢自除	心若不異	萬法一如
一如體玄	兀爾忘緣	萬法齊觀	歸復自然
泯其所以	不可方比	止動無動	動止無止
兩既不成	一何有爾	究竟窮極	不存軌則
契心平等	所作俱息	狐疑淨盡	正信調直
一切不留	無可記憶	虛明自照	不勞心力
非思量處	識情難測	眞如法界	無他無自

要急相應	唯言不二	不二皆同	無不包容
十方智者	皆入此宗	宗非促延	一念萬年
無在不在	十方目前	極小同大	忘絕境界
極大同小	不見邊表	有即是無	無即是無
若不如是	必不須守	一即一切	一切即一
但能如是	何慮不畢	信心不二	不二信心
言語道斷	非去來今		

信心銘終

通俗信心銘講話

新井石禪著

さて拙稿は之から信心銘の講話を致すのであるが固より紙數に一定の制限のあることであるから、とても充分に御話を盡すことは六ヶしからうと思ひます。が、兎に角一通り大體の意味の御解りになるやうに至極平易に説明することに致しませう。ソコデ此信心銘は御承知の通り四言一百四十六句で字數から云へば五百八十四字で六百字に満たぬ一種の韻文である。勿論句の數、文字の數の上から見れば至つて簡短なものであります。が、サテ其意味はと申しますれば實に甚深微妙にして、如來一代の説法、五千有餘の經卷も祖師の一千七百則の公案も皆な、この一百四十六句の中に攝められて餘す處なしと云ふも決して過賞てはありません。されば「通俗」には昔は宗師家が學徒に對して頻りに此銘を唱導し且つ盛んに之を毎朝誦誦せしめたと云ふことを述べてある。又古より佛道の妙

旨を述べた者も随分澤山にあるが、中にも佛法の根源を窮め宗乘の正法を盡したものは、此信心銘の右に出づるものはない、其言は實に簡約にして、然も義は豊富に旨深くして、詞雅ありと云ふてあります、之等に依つて考ふるも、又以て宗門唯一無二の寶典たることは推知さるゝてありませう。

斯も貴き聖典は全體如何なる御方の御撰述であるかと云へば、之云ふ迄もなく、釋尊より嫡々相承三十代の孫、達磨大師より三代目の祖師、僧璨大師の撰述であります、此三祖僧璨大師は其出世の地は不明であるが、二祖慧可大師即ち彼の有名なる雪中に斷臂して達磨の髓を得たるお方に就て學道を成就せられたのであるが、僧璨大師は初め二祖大師に相見せられた時、私は常に業病に障えられて困ります、が思ふに此難病は必らずや前世の惡業に依つて受くる所の結果でありませうから、願くは爲めに罪を懺悔して下さいと、願ふたすると、慧可大師はア、夫れはサゾ困難のことであらう、然らば汝の爲めに罪を懺してやるから、今我が目前に其罪なるものを持ち來つて見よと、仰せられた時に三祖大師は罪障不可得の理を諦らめて、罪を求むるに途に不可得、即ち如何に罪を探し求めても

何うしても其の罪の性種を把握することは出来ませぬ畢竟不可能でありますと答へた、是に於て二祖大師は、我れ汝が爲めに罪を懺し了る罪性の徹底不可得なることを覺悟せば、これぞ眞箇の大懺悔なるぞと仰せられたとある、僧璨大師は此一語を聞いて忽然として悟る所あり、遂に二祖の弟子となられて、衣鉢を相續し、達磨より第三代目の祖師の位に列せられ、得道傳法の後、舒州の皖公山と云ふ處へ隠れられたのである、其時代は恰も後宋の武帝の頃、此武帝と云ふのは支那佛教史の中に於て忘る可らざる排佛家で、御承知の通り支那佛教史中には三武一宋の難と云ふて、四度の法難があります、今此後宋の武帝が即ち三武の一である、一時は非常に佛教を嚴禁して、佛像經論等は悉く之を焼き捨て、僧侶には強いて還俗を命ずと云ふ始末、實に目も當てられぬ大法難であつた、依て三祖も處々を偏歴すること十五年餘でありましたが、其頃は三祖大師を知るものは多くなかつたであらうが、唯一人、道信と云ふ人があつて、佛祖單傳の大法并に相承の袈裟を傳受せられました、僧璨大師は此道信禪師を得て、大法相續の後、隋の煬帝の大業二年に衆人の爲めに心要の法門を説き、大樹の下に於て合掌し

屹立しながら涅槃に入らせられ、後唐の玄宗皇帝其徳を稱して、鑑智大師と諡號を賜はつたと云ふ、これが信心銘の著者僧璨大師の一應の畧傳であります。而して此三祖大師がこれを作られたのは何う云ふ動機に依つてかと云ふに當時早や達磨大師より既に相當の年代も経過し直指單傳教外別傳の大道漸く廢れて多々益々誤解する輩さへ生ずると云ふ有様なので此儘では後世に至つては明眼を具へざる士は徒に別傳教外の法門を誤認し勝手に不立文字などを振廻はして思ひ思ひの邪解妄見を逞うするであらう、而して之を則ち達磨門下の直指禪である、如來出世の本懷も之れであると云ふやうに思ひ誤まり或は種々雜多の觀念等を修めて悟を求むる二乗の習禪と混淆して是を正傳の佛祖禪と稱し或は王三昧の正傳は此外に非ず等と稱して微妙の法門も地を拂ひ、甚深の正禪も遂に衰滅するに至らんかとの大慈大悲の懸念より、嫡傳の宗綱をかへげ、後世辨道修業の標準となし、之に依て佛祖の大道を辿り行けば決して邪路に陥らず、蓋直に嫡傳相承の大法を相續することを得せしめんとて此長篇を撰述遊されたのであらうと思ひます。

此一篇は前に申すごとく、四言一百四十六句の韻文であるが、支那禪門に於て單獨なる著述としては實に是が嚆矢である、勿論韻文に於て佛祖單傳の微妙の法門を説き現はせるものは既に達磨大師の時代に有つたので、世人の知つて居らるゝ達磨大師の傳法偈即ち「吾本來此土、傳法救迷情、一華開五葉、結果自然成」と云ふのがありますけれども、これは短篇でありまして長篇としての韻文は實に此信心銘が其最初であります、後に至つては永嘉元覺大師の「證道歌」、石頭無際大師の「參同契」、洞山悟本大師の「寶鏡三昧」、同安の「十玄談」等が出て、宋朝に至りて雪竇禪師や宏智禪師の「頌古」乃ち彼の有名なる碧巖集、從容錄等が世に現はれて頗る光彩を放つに至つたのであります、殊に禪宗では從容錄、碧巖集、信心銘の三部を最も珍重するのであります、蓋し思ふに其當時は士君子の間に詩と云ふものが、非常に行はれて誰も彼も之を好まぬものはなかつたのである、従つて世外の道人までも大法を弘通するには韻文を以てするのが流通に便利であると云ふやうな次第であつたらしいのである、且つ短句の間に無限の趣味を有して餘韻裊々たるは韻文の特色であるから、言外に宗を究めしむるには最も適

當てあつたのである。故に三祖大師も如來嫡傳の大法を後世に弘傳せんが爲めに此の適當なる韻文を用て宗乘を詮顯せられたのであると思はれる。ソコデ此一篇は前に説ける如く僅か五百八十四字に過ぎざる簡短なるものではあるが其意味の甚深微妙なることは、幾多の禪書中此右に出づるもの無いといふても宜い程でありますから、昔から幾多の宗師家に於て、この銘を注釋し、敷衍した處の書物も多くあるのであります。宋の眞歇禪師の「拈古元の中峯禪師の「關義解明の道霈和尚の「着語」又日本では太祖弘徳圓明國師常濟大師の「拈提」等があります。併し此等の撰述は皆な此一篇の的意を發揮し、併せて時勢の惡弊を救濟し、亂禪盲悟の徒を教誡し、縱橫無礙に宗乘を拈弄せられたのである。即ち直截根源と云つて唯だ偏へに宗乘の玄旨を啓發し、以て自己の大識見を發揮せられたのでありますから、一言一句に就て解釋的説明を試みられたものでは無いから初學者者にありては容易に其眞意を辨肯するに苦しむが故に、天明年間に書龍和尚と云ふ智識があつて、實に博學の宗匠であつたが、此信心銘の初學者に解し難きを憂ひ、諸種の本を參考し、參酌して同異を訂正し、章句の註解を施して之に眞歇禪

師の拈古と常濟大師の拈提とを添加して「信心銘夜塘水」と云ふ書を著はし、最も親切に初學者の爲めに提撕せられまして至極の好著述ではあります。然も尙ほ漢文なるが爲め、往々難解の個處があるやうに思はれます。又近くは現に曹洞宗大學の教頭なる山田孝道師の「信心銘講義」と云ふのがありまして、夜塘水や關義解などに依つて彼此參酌して其大要を解釋せられたものである。先づ此位の處が通俗的のもので、其他は餘り初心の人に解し易いやうな著書のあるを開きませぬ。依つて拙稿は茲に何人にも解し易きやう至極通俗平易に之を一字一句に就て説明して見ようと思ふのであります。固より不才短識の拙稿のことでありませれば、とても充分と云ふ譯には參りかねませうが、成るべく邪解に陥らぬやう出來得る限り古來の末書を參酌して寧ろ宗門の見識一點張りて無く、何人にも解し易かるやうに之れより漸次本文の順を追ふて解釋を下して見ることに致しませう。少しく前置きが長くなつたやうであります。これよりいよいよ本文に就て一句々々の下に於て詳しく御話致すことにする。

信心銘

先づ此書の題號に就て一應の説明して、それより本文の解釋に移ることゝしやう、勿論此題號を詳しく説明すれば自ら本文の全體をも了解するに足るのである、何となれば本文の五百八十有餘字は、たゞこれ信心不二の妙旨を縦横に説き示されたに過ぎぬからである、併しそれではたゞ根源を極めて枝葉を無視するの謗を免れぬであらう、勿論百千の枝葉は一根源より分離せるものであるから信心の二字を究むれば、他は之を見聞するに及ばずといふ道理もあるやうなものの、矢張り根源は根源として其根源より分立離出せる枝葉の如何を審細に極むるは滿更無用のことではないと思ふ、併し又根源を極めずして、たゞ其枝葉のみ摘むのも決して其當を得た研究と見做す譯には行かぬ、依つて先づ一應題號の解釋をしてそれより本文の一句々々に就て説明することに致しますが、本文の一句々々が盡く信心の二字の活動であるといふことを忘れてはならぬ、信心銘の三字は云ふまでもなく此一篇の標題であります、銘と云ふは字書

には志なりとも名なりとも註し、物に名を付けて其功を述べて以て警戒の辭と爲すことである、湯の盤の銘に「日々に新たに又日に新たなり」とあるの類です、今は佛法の一大事たる信心の妙旨を述べて長く吾人修養上の警戒とせられたものである、されば要するに信心の二字が最も肝要なので一篇の大要は實に此の信心の二字にあるのであります、換言すれば信心の二字は實に一篇の大精神にして、佛教祖道の皮肉骨髓である、然らば其信心とは如何、信とはマコトと訓じ、即ち不疑の義である、唯識論には「心淨を性となすとありて淨は清淨と熟字するのて淨らかにして一點の汚濁なきを云ふのである、此淨らかなる一點の染汚を存せざる心を以て外觀的若くは内觀的に眞理の淵源、佛陀の大威徳を信じて穢塵の疑を抉まざるのが、信であります、所謂進んでは一點の疑念なく退いては清淨無垢なるが信の字の意味である、次に心とは即ちコ、ロであります、併し其の心とは果して如何なるものであらう、精神とか良心とか稱して居るが其本體は如何深く究め審かに論ずれば實に是れ千古の大問題である、さりながら、兎に角心といふものゝ必要なるべきは誰しも疑ふの餘地が無い、而して吾等の心と稱

するものは中々油断の出来ぬものであります。一日の中、一時の間、千變萬化して息む時なし、苦樂善惡得失是非は盡く心の産物ならざるは無い。古歌にも

心こそこゝろまよはず心なれ

こゝろに心こゝろゆるすな

とある通りです。併しかやうな難物を以て吾々の本心本性といふのでは無い。佛敎には四種の心を説てある、一は肉團心、是は今日の所謂脳髓ともいふべきもの。二には縁慮心、これは心理學者等の論究して居る精神作用、三には精用心、これは宇宙萬象の原動力となるべきもの、四には堅實心、これは不生不滅、絶對、平等の本性である。迷悟善惡の沙汰は縁慮心の範圍に屬するもので、平等本性の上には凡夫だの佛だの我だの人だのといふ差別は無い。だが縁慮心とても本性以外に存するのではない。解り易く申せば縁慮心は精神現象の一部分にして堅實心は萬法歸一の根本靈體であるのである。此根本靈體を悟られたのが佛の大知見。天地無限の徳を得られたのが佛の清淨身である。而して此大知見と清淨身とは吾の方寸の中に具有して毫末の缺くる所が無い。故に客觀的に佛陀を信するの

は自己をして佛たらしむるので、主觀的に自己を信するのは佛をして自己たらしむるので、主客異なりと雖も唯だ一の信心に歸するのである。

承陽大師は心外に佛を求むれば佛變じて魔となると仰せられてあるが、ツマリ佛と我れと一體不二なることを示されたのであります。斯う云ふと聊か前の古歌と矛盾するやうの感しもありませうが、決して左うてはありませぬ。大凡我吾お互の心と云ふものは、もとく佛にありても増さず、衆生にありても減せず。古に亘り今に亘りて不増不減なのであります。が、悲しい哉、凡夫の心は心こそ心迷はす心でありまして、煩惱妄想の雲に深く閉されて佛を隔たること、天地懸隔なのであります。けれども一朝此の迷ひの村雲を拂ひ除けば、

雲はれてのちの光と思ふなよ

もとより空にありあけの月

てありまして、別に佛と衆生と變る處はないのであります。是に於て心の外に向て佛を求め祖を尋ぬるやうな事があつては尋ね得た所の佛が却て一種の魔障となる。如何とならば無中に有を認め、空裡に華を捉ふるの妄見を免れぬから

あります、さればこそ此信心として自己が自己を信じて疑はぬ所に到達すること
 が何より肝要である、鬻龍和尚は信とは能信心とは所信心自ら信を起して還て
 實の如く信心を知るといはれてある、信心現はれれば佛法も亦た現はれぬ、是
 故に華嚴經には佛法の大海は信を以て能入とすと云ひ、心地觀經には佛法の海
 に入るには信を根本となすとあり、又華嚴經中に信はこれ道の元功德の母なり
 一切諸の善法を増進し、一切諸の疑念を除滅し、無上の道を示現開發すと云うて
 あります、而して我が曹洞宗の高祖承陽大師は正法眼藏菩提分法の卷に佛果位
 に非ざれば信現成せず、おほよそ信現成のところは佛祖現成のところなりとも
 仰せられてある、然れば信心即ち佛といはれる意味もあるのである、然らば自心
 が自心を信ずるとは如何といふに前にも云ふ如く人々個々に具足圓成して佛
 にありても衆生にありても不増不減なる本來妙有の清淨心を確信して不疑の
 地に到るのであるから畢竟自心他心の區別を超へ迷悟凡聖の塵垢を受けぬ況
 や修證功勳を假るを要せず、本來佛陀と自己と寸分の相違なきことを徹底自心
 に決定し確信し、その信力に依て自己と佛陀と融合和同したのが即ち正信心て

ある故に楞嚴經には常住の理を信ずるを名けて信心となすとあり、涅槃經には
 大信心は即ちこれ佛性なり、佛性は即ちこれ大信心なりとあります、要するに善
 提と云ふも悟道と云ふも、又見性と云ふも成佛と云ふも、ツマル所は此信心を發
 得して究竟せる境界に名けたのであります、故に此信心を發得すと云ふことが
 佛道修行最大の要件であつて、信心確立せば佛道は任運に自己と圓融するもの
 である、若し此信心が現はれなかつたならば、何れほどに持戒するとも苦行する
 とも如何に聰明であり、博解であつても、決して佛知見を開いたお方と云ふこと
 は出來ぬであるから、お互は早く一念發揮して直に此の大信心を確立すること
 に勉めねばならぬのである、梵網經には一切の行ひは信を以て始めとなす、衆徳
 の根本なりとあり、又大莊嚴經には一切諸の功德は信を以て使命となす諸の寶
 の中に於て信を最も第一となすとあるに依つて見るも、いかに信と云ふことが
 大切であるか、お解りになることとてありませう、而して禪門に於ける坐禪は何
 かといふに自己本來の面目を現前せしむるの法門であるから、ツマリ禪即信心
 ともいふべきものである、十三宗四十餘派の信條も妙行も亦た唯だ信心の二字

に攝し盡して餘す所は無、佛祖正傳嫡々相承の法門とても信心を離れて外には無い、別傳教外の宗旨とか不立文字の王三昧とかいふのも、信心の究竟を指したものだといふことを、反覆叮嚀に説き示されたのが、即ち此の信心銘でありまして、此一篇が直に釋尊御一代の説法であり、五千餘卷の經文八萬四千の法門であるといふことを忘れてはなりません。

至道は難なし唯だ揀擇を嫌ふ

至道とは至は至極と熟字して、勝義無上の義である。道とは通達遊履の義にて所謂天地人の齊しく遼由する所である。乃ち縦には過現未の三世に通じ横には十方に周遍して、凡聖貴賤共に之に依て通行し往來する處のものである。一言て云へば世間出世間諸道の根源にして至極最上の大道である。既に至極最上であるから一部分の道でないことは勿論であります。然るに我々お互が今日平生に遇つて居る處の道は何うでありませうか、之の真直くなる大道を遇ふことを忘れて自ら岐路に陥り邪徑に迷ふて居る果敢なき縦しや普通の人道を實踐すると

するも其期する所は現在一世を出てす、其志す所は人と人との關係に過すとせば之を決して大道の全體を盡したものと云ふことは出来ぬ、是の如きは道は道なれども只だ其一部分に止まつて居る、故に吾々は宜しく參禪學道して道の全體を認め得るやうに精進するが肝要である、斯く申しましたなら人或は道を遠方に求めるかも知れませぬが、求むれば愈々遠さかる道理で、終日鐘や太鼓で探したからとて之を求め得らるゝものではない、至道とは決して此處彼處の片隅に隠れて居るのではなく、天地の間に徧滿して居る所の大眞理が即ち至極の大道であるから、此至道は吾々各自の方寸の中にも豊かに備はりて居る、且つ夫れ自他一如の大道なるを以て我を離れて以外に別は存在すべきものではない、至道は人々の脚跟下に横はつて居る、吾人の精神も肉體も、其儘至道の全體である、故に天地間に有ゆる森羅萬象は皆なこれ至道の露現にして、吾人は日々至道の間にあつて運作轉動して居るのである、されば承陽大師は佛道を信するものは先づ自己を信せよと示されてあるが、佛道とは即ち此處で云ふ至道であつて、吾人は常に道の中にあつて道を行ふて居るのであるから、一旦自己を信する時に

於て即ち自己の全體なる道を認めることを得るのであるから吾人が徹底心の真底から自己を信する時に於て厭ても應ても達着するのが至道である而して此至道を認め此至道に向て日々夜々足實地を踏み身實際を行なひもて行くのが直に佛であり神であるので神佛と云ふも畢竟自己の方寸を離れてあるべき等のものではない茲に於て即ち佛祖の往昔は我等なり我等が當來は佛祖ならんと修證義にもある如く佛祖と我等と我等と佛祖と些の異りを見ることとが出来ぬこととなる故に華嚴經に心と佛と衆生と此の三差別なしと云ふてあるのも誠に道理を盡したることと思ふ眞理は法爾として全く此の如くでありまして敢て禪宗一派に於て猥りに駄法螺を吹きたてる譯の者ではない佛は此至道を證悟したる者衆生も將に證悟せねばならぬ位地に在る者である併し至道其もの上から見れば無論佛に有つても衆生に有つても不増不減古に亘り今に亘りて不垢不淨なるものである夫故に至道の本體より眺むれば所謂無難であつて少しも六つかしきものには無い明歷々露堂々花の露に笑ふ月の波に浮ぶ皆是れ至道の活潑々地である難易といふて比較すべき言の葉もないので

あります龍樹菩薩も難行易行と云ふことを申されてあります吾々求道者の上から名けたので至道それ自身にありては實に難易の沙汰は無い即ち非難易の端的を無難といふたのである然れども吾人がいざ之を實現しようといふ時になると實に至難にして容易ではない何となれば佛教とか祖道とかいふ範圍外に就て申して見ても世間の所謂仁義忠孝などは何れも至道が一面の上實現せられたものである古來幾億萬の人類中忠孝仁義の實を完全に擧げ得たるもの果して幾人かある之れ至道實行の容易ならざる證據ではありませんかされば至道は萬人の共に履踐せねばならぬ處であり乍ら之を實行する人の少きは要するに六ヶしいからであるが併し之れは人の方からいふので道は決して人の實踐を障えはせぬのである昔南泉は趙州の道を問ひしに對して平常心是道と答へ承陽大師は自己本と道中に在りと申されたが言葉こそ違へ皆なこれ至道を脱白に開示せられたのである而して其至道たるや從晝至夜瞬間も我が身心を離れては居らぬ更に一步を進めて論ずれば

染め出だす人はなけれど自づから

やなぎはみどり花は紅

て春の花秋の紅葉も皆なこれ至道の露現宇宙真理の發露である眼は自づから
 眉毛の下に横はり鼻は顔面の中央に直立して居るのも敢て兎角の手段を煩は
 したのでではない而し是れ皆な至道の妙相ですさればこれが無難に非ずして他
 に無難なるものがドコニありませうか然るに悲しい哉吾人はかゝる無難の至
 道を知らず比無價の珍寶を知らずして徒に心外に向つて法を求めて居るとは
 何たる嗚呼の業ぞこれではたゞに心身を勞するのみで畢竟何等の功德も利益
 もなきことである朝に五欲の巷に迷ひ夕に六塵の境に惑ふて永く菩提の花を
 手折る事の出来ぬお互の現在であるから此處一番ウツと精神力を鼓してかゝ
 らぬ時には流石無難の至道も容易に徹見することは出来ぬ唯嫌揀擇とは揀擇
 の二字は共にエラブと讀む字で即ちエリキヲヒをするとである前に云ふ處の
 至極の大道は元來無難のものなれども兎角吾人は此大道を忘失して徒らに外
 境に迷ふて是非善惡の揀擇心を起し遂に自ら煩悶苦惱の淵に沈む事となる故
 に唯揀擇を嫌ふと云はれたのであります前來述べ去り述べ來る如く至道は平

坦砥の如くにして更に六ヶしきことはない之を六ヶしいと見るのは吾人の妄
 見妄情に依つていあるから之に驅られて揀擇するは最も嫌ふところである人
 々具足箇々圓成の大道は即すこれ吾人各自の靈性にして此靈性は本來清淨無
 垢なるもの迷悟凡聖の沙汰ではない故に本來の儘にして少しも造作に涉らね
 ばそこに至道は實現して居るのである飢ゑては飯を喫し渴しては湯茶を呑む
 明くれば起き暮るれば寝ね此處に何等か六ヶしい面倒はないのであるが忽然
 念起と云ふてふとしたことから彼此の見解を起しみだりに妄想し分別してヤ
 い迷てあるとか悟てあるとか煩惱を捨てぬから菩提が得られぬとか生死を離
 れねば涅槃に到達されぬとかなど、揀擇をするこれ皆な自己の我見よりして
 生ずるのであつて本來其實體はないのであるが一度揀擇するより忽ちにして
 善惡生ず善惡生ずるに依て厭求の心が起ると云ふやうな次第で夫れから夫れ
 へと迷から迷に沈淪して永く苦海を脱することが出来ぬのである聞かずや花
 は愛惜に依つて落ち草は忌嫌を逐ふて生ずといふ古句もあることをされば常
 に無我相に住して自ら一切の萬物に對し一切の時に處して揀擇の念を起し

へしなければ、一年三百六十五日、一日として吾人を惱ます時なく、一物として吾人を苦しむる物はない、胸中自ら和氣満ちて、心裏平安無事の境界になるのである。已に此境界に達すれば佛も要せず法も要せず我と佛と不二一體と云ふ時節が到來する。至道無難唯嫌揀擇と云ふは此時節のことである。

往昔演若達多と云ふ女がありまして、朝夕鏡に向つては自分の美貌を誇り髪を結つて自ら楽しんで居た。然るに一日何を慌てたか、鏡を裏返しにして見た。すると何時も能く美しき姿の寫つた鏡に何物も見えず、只だ一面の眞黒々である。それも其裏返しの際に何物の寫らう筈はない、然るに演若達多はこれが裏返しであるとは気がつかず、サア大變だ自分の首が何處へか飛んで了つたと吃驚仰天、周章して驅け出だし、首が何處へか行つて了つた見えなくなつたと云ふて、住地なる尸羅婆の城下を走り廻はつて居た。すると其時一人の知識が之を見て氣の毒に思ひて、何を周章して驅けあるくのか、汝の頭は此處に依然としてあるてはないかと云ふて拳を擧げて、ゴッンとその頭を打つてやると、演若達多は其痛さに手を以て頭を摩て、初めて我に返り、ア、此處に有つたくと頭を抱へて

喜び勇むて自宅へ歸つたと云ふ話があるが、恐らく斯くの如きは獨り演若達多のみではあるまい、人々お互も常に至道無難の頭を有し乍らそれを忘れて徒らに捷擇の巷に走り狂ふて至難を捜し廻つて居るのではないか、ソコで精神を氣海丹田に据え付け、ドツシリと坐り込んで工夫一番返照回光して見るが宜しい。其時こそ忽然として至道本より圓通自在なることが知れるのであらう、併し茲に一つ注意して置かねばならぬことがある、三祖大師が至道は無難であると申されたからとて、決して之を鶴呑み丸呑みにして、ソレ左様かと早合點して、それでは修行も修養も要はないと思ふては大なる誤解である、勿論至道は無難無易にして意作造作に亘るべきものではないが、世人の多くは之を矢鱈に六ヶしい者、到ても常人では爲し能はぬ者と邪思惟して居るから、先づ第一に其妄見を破せんとして至道の本面目を提出して無難と示されたのであるが、古聖も言はれてある如く、修せざるには現はれず、證せざるには得ることなしと云ふことを忘れてはならぬ、又唯だ揀擇を嫌ふと云ふても何の辨別をも付けず、木石の如く無心無念でなければならぬと思ふては是れ亦た大なる錯誤である、揀擇は凡情を

指したのであるから、凡情解脱と云ふことが入道の第一義ぢや、併し此情想とて
 も怨敵の如く思ふて無暗矢鏢に除かふと思ふ念慮を起してそれに屈托すれば
 これも亦揀擇の見に落ちたのである。されば無難と云ひ、揀擇と云ふたからとて、
 我佗彼此の見を起してこれに捕はれぬやう、夫等の分別は奇麗サツパリと放擲
 してかゝらねば、到底至道無難の端的を了解することは出来ぬ、而してそれには
 實地の修行と云ふことが肝要でありますから、仇や恩かに考えて宜しく貴重
 の光陰を費して後に悔ゆることのなきやう、心掛ければならぬ、少しく長くなつ
 た様ではあるが、由來此二句が信心銘全篇の大綱であるから成べく丁寧に説く
 心算であつたのである。併しマダハ、中々説明を盡し得たと申す事は出事ぬ、尙
 ほ此上は各自に於て充分に研究して頂きたいのである。

但だ憎愛莫れば洞然として明白なり

憎とは憎悪と熟字して、ニクムこと、愛とは愛着愛執などと熟字して、ネガフイツ
 シム、ヲシム、等と訓す、乃ち可愛など惜い杯と云ふ語である、次の洞然とはホガ

ラカにして、疑りなきこと、明白は讀むて字の如く明かにして、少しも藏す所なき
 をいふ、さて無難の至道たるや、本來洞然として明白なりであつて、十方三世に通
 達無碍、從劫至劫會て暫くも覆憎すること無し、其明白なること例へば天邊の望
 月の如く、少しの曇りもなく、一切障一切時照破せざるはない、然るに吾人凡夫の
 妄情は華なき空に華を認めて、あたられなき真如の月かげも、これを認めること
 が出来ぬとは嘆きてと尙ほ餘りある次第ではありませんか。

雲よりも高き處に出て見よ

なにとて月にへたやはある

と、夢窓國師の詠み玉ひし如く、至道の月には寸毫の隔てはなければ、吾人は自
 己胸中に湧き出づる煩惱の雲に眼が閉されて居り乍ら自らこれを知らずに居
 る、そこで妄りに自他の相を執し、可愛い憎いと云ふやうな心が起り、世間の法相
 に沈溺する偶々佛陀の教を聞くことを得ても、猶ほ煩惱を憎み、菩提を愛し、妄想
 を憎んで之を捨てんと欲し、眞智を愛して之を尋ねんとし、ト、迄も妄想執着に
 役せられ七轉八倒して居るのである、故に之を感みて、迷妄の根源を滅められた

のが此二句である見來り見去れば諸法本來平等である何をか憎み何をか愛せん至道は實に洞然として明白ではないか此處に憎愛と並べあげてあるも吾々の修行地の上から此二つの中で何れが重くして且つ離れ難いかと云へば即ち愛の方である故に偈にも三界の中に流轉して恩愛斷すること能はずといふてあるツマリ憎むと云ふ事は一方に愛即ち愛着の心があるからその反動として生起するのです愛着さへなければ憎惡の情と云ふものは自然になくなつて行く而して其愛着は何から起るかと云へばこれは我即ち我見から生ずる大凡一切煩惱の根本は皆な此我見にあるので我見を滅じて所謂無我相になれば大小の煩惱は亡くさうと思はずとも亡くなつて行くものであるが併し一口に斯う云ふて了へば何でもないやうな者の我見は容易に滅し難いものであつて一寸した事にも直に頭を擡げて其勢漸次に逞しくなつて己れを愛し他を憎み彼を厭ひ此を欣こび一波生すれば萬波競ひ起るが如く遂には金錢情慾の奴隸とまでなり下るのが衆生の常情である故に一切の罪惡は實に愛着を以て本と爲すとは云ふべきものでありますされば一朝洞然明白の理を發見して大活眼を

開き智慧の光を以て照し見れば元來愛すべきなく従つて憎むべきものもない、こゝに至れば釋迦何人ぞ達磨何物ぞ我と佛祖との間に於て竟に些の隔りもないのであります。

來て見れば聞くより低き富士の山

釋迦も孔子もかくやあるらん

と古人の詠んだのは此意味を現はしたに外ならぬ然りと雖憎愛することなかれと云ふたからとて又一概にウン左うかと云ふ調子になつて善惡是非を混同して一樣に取扱はねばならぬかと云ふに決して左うてはない若し玉石混交を以て不憎愛とせば則ち惡平等の邪見となる三祖大師はたゞ世間の凡夫が憎愛の念に驅られて眞理界中に妄見を逞ふして居るからそれを誡める爲めにかく仰せられたのであつて文字の上のみ取り着きますと意外の謬見に陥ること免かれぬから注意に注意を重ねて大師の甚大の慈悲の心底を了解せねば折角有り難き教を受けて何にもならぬ事になるされば愛すべきは之を愛するに道を以てし憎むべきは之を憎むの道を以てし唯だ道に順かひ道を行ふて一點

の利心を挾まざるが即ち愛憎なき當體であつて、要はたゞ第二念に涉りて正見を失却せぬやうにすることが第一である。

心から心にもものを思はせて

身を苦しむる心なりけり

て、兎角油斷のならぬのは、吾人お互の私心の妄見である。何にかに付けて直ぐと第二念に涉り、憎愛する我と憎愛せらるゝ彼れとの相對を認め、その状態に纏縛せらるゝから、不可ぬのである。相對の二念を離却して畢竟其間に毫髪の妄想分別を存せざるに至つて始めて憎愛のまゝが眞理の光明となりて當下に憎愛を離るゝのである。若しかくの如くならざる時は、憎愛せぬと云ふのも、既に之れせぬといふ一種の憎愛に落ちて居る。こゝが最も注意を要する點でありまして、心佛衆生是三無差別といふも、又是三各別といふも、若し其の人ならば兩頭共に是である。要は眞理の一行三昧に存するのであるから、苟くも禪に志し、禪に參するの士は文字以外の文字に着眼して眞意の存する處を誤らぬやうにせられたきものである。

悟る道迷ふ衢と別れても

おのか心の外にやはある

て、迷ふて凡夫となり、悟りて佛となるも、たゞこれ自己の一念の轉處如何に依つて別れるのであるから、一隻眼を具して能く宇宙の實相を達觀すれば、迷悟凡聖必竟一如にして、洞然明白の靈光は

晴れくもる人の心の内までも

そらに照らしてすめる月かな

て、九重の雲の奥深く、竹の圍生を照らす月影も、賤か伏屋を照らす月影も、光に變のなき如く、自他の差別を離れて彼此平等に照らしてあるのであります。全く執れを惜み執れを愛すると云ふが如き定相は全然ないのであります。

毫釐も差あれば天地懸かに隔たる

毫釐とは十絲を毫といひて、十毫を釐と云ふとあるから、何れも極々ツツカなることを形容した詞である。差とは差異の義にして、差別差違など、熟字しかガフ

と訓するのである。夜塘水には差は差違の義なりとありますが、差異と云ひ差違と云ふも畢竟さしたる別はありませぬ、而して天地懸隔とは讀むて字の如く懸かに隔たる、その隔たりの甚しきことを形容して天地の二字を冠ぶせたに外ならぬのである。さて此二句は前の四句を結んで下の句を起すのでありますが、前に云ふ處の無難の至道乃ち洞然明白の至道の上に於て僅か計りも差別の妄念を起す時は即ち至道と相距ること天地もたいならざる程の隔てを見るに至る。凡夫と佛、迷と悟、其間の距離は實に天地懸隔でありませぬ、向上より觀來れば元來萬里一條鐵であるから天地の全體即ちこれ至道の露現である、さればこゝに何等の工夫修行をも要せざるべきは當然であつて衆生本來成佛である、然るに一念念起して迷想起る時は直下に至道の本心を失ふて、從本以來自らウンとふみ占めてあらねばならぬ、至極の大道を忘却して、我と自ら迷ひの路に踏み込て遂には千里萬里の隔をなすのである、之を稱して對面千里と申すのぢや、前の演若達多の話の如く、迷ふが故に頭を失なひ悟るが故に頭を得る、得失の二つは己れにあるのである、故に經中に極樂は西方十萬億土を隔つとも説き、又此處を距る

こと遠からずとも説いてある、一見此二句は自己の矛盾を明かしたのである、所在道場と申して吾人の到る處道場ならざるはなく、當所皆なこれ極樂淨土の露現でありませぬけれども、一念迷惑せる凡情より之れを求めんとすれば愈々益々遠かつて實に十萬億の隔りを見るに至る、故に歌に

極樂は西にもあればひがしにも

きたみらさがせみんなみにある

とある如く、極樂は西にのみあり佛の光明は西方に限るものと心得ては大なる誤りである、東西南北共に佛淨土ならざるはないのである、故にきた道さがせて從來行履し來りたる自己の脚跟下に注意するが第一の肝要である、さればとて指方立相の法門を否認するのでは無いが、不信の人よりいへば西方に極樂なしぢや、信現成の時は自己の脚跟下が實に西方の淨土である、淨土をふみつゝ淨土を探して居るとは何たる淺果敢なることをぞ、遂に淨土を見る能はざるは當然である、謬にも背負ふた子三年と云ふ事になりませぬが、子供は自分で背負ふて居り乍ら我が子は何處ぞくと舌切雀のやうに探し廻はつても、それは見付かる氣

つかひはない終いに背中でオギアトと泣かれて初めて気がつき何んだこゝに居つたのかそんなら左うと早くに云へば斯んなに骨折つて探し歩きはせぬものぞと云ふて見た處でもとく罪は何處にもない自ら招いた苦勞であり骨折である然らば全體何故に斯ふなるかと申せば根境の交渉と申しまして眼耳鼻舌身意の六根が色聲香味觸法の六境に對する上に於て彼の色は美なり醜なりあの聲は愛らし聞苦しいイヤ甘いの不味の云ふて或は愛し或は憎みて其根源を返照することを忘れて徒に葉を摘み枝を尋ねて此處に揀擇の見起り取捨の念然じ對待の二見に亘りて忽ち百千の妄想競ひ現はれ遂に本來清淨無垢の至道は之れか爲めにかき亂され明皎々たる真如の月は固く妄想の暗雲に閉ざされて長へに之を見る能はざるに至る之れ畢竟天地萬物と我と一體平等にして本より別物に非らざるを自ら之を別物として根本に復することを知らず妄りに我の外に天地を認め自己の外に萬物ありと思惟するに依つて天地萬物は盡く我身を束縛するの因縁となる所なり自ら苦境に落ち入るのである而して苦より苦に沈み冥より冥に入り長く天地の妙徳と相應し至道の本面目に體

達することが出来ぬのである大集經に若し人ありて我異に佛異なりと云はゞ當さに知る可し是等は即ち魔の弟子なりと云ひ黄葉禪師も盡十方空界同一心體心もと異なるなく法も亦異ならず祇だ汝が見解同じからざるが爲めの所以に異なるのみと言はれてある又蓮上人の歌に

心からよこしまにふる雨はあらし

風こそよるのまどはうつらめ

とあり鴨長明は

かはらしな濁るもすむものりの水

一つながれとくみて知りなば

と詠まれてある如く實に其通りて源の流れは一つにして變らねど或は凡夫と濁り衆生と擾れて清くすみわたりたる佛と天地懸隔するに至るのである而して之れ實に一念毫釐の差より生ずるのでありますから最初に踏み出す第一歩即ち初一念が最も修養薫練を要す處である昔ある武士がある知識に向つて佛敎では地獄極樂など云ふことを説いてあるが私には何うしてもそんな物が

あらうとは信じられぬが、實際ありとすれば何卒目前に其證據を擧げて教へて戴きたいと云ふと彼の知識はいと丁寧ていねいに教へてくれるかと思ひの外ほか其方かたは見れば武士ぶしで候まうふなど、威いらさらな風ふうをして、それ位くらいのことが分わからぬとは笑わら止し千萬まんそんな奴やつには教しへたからとて知れるものではないと怒鳴どなりつけると、件の武士ぶしは勃然はつぜんとして怒どり武士ぶしに對たいして無禮むれい極ごくまる今の一言いっご如何いかて其儘まま打ち捨て置おくべきか武士ぶしたるものが解わからねばこそ頭かぶを下くだげて問とふものを傲慢ごうまんにも程ほどこそあれとスラリ長刀ちやうとうを引き抜ひいてサア此上こゝは知識ちしきも糞くそもあるものか覺悟かくごを召めされ貴殿きでんの一命いちめいを申受まをけると云いふて向むかふた知識ちしきはコイツは堪たまらぬ、コンナ奴やつには相手あてが出来できぬ三十六計じ逃にぐるに如ごとかずと本堂ほんだう見みかけて飛とんでゆく武士ぶしは満面まんめんに朱しゆを注つぎ、此坊こゝ主逃しゆがしてなるものか、助すけけて置おくものかと云いふので後追ごおひかける、頓とんて八尺間はつしゃくまの處ところに到いたり柱はしらをグル々々廻まはつて逃にげる武士ぶしは益々ますます忿怒ふんごの相ま恐おそろしく、牙はを露さらはし眼まなこを睨にららし口中くちうより泡あを吹ふき刀かたなを振りかふつたる様よう子は二々目ににめと見みられぬ程ほどの相貌さうぼうとなつた、すると知識ちしきは逃にげながらさても恐おそろしの鬼おにの姿すがたや、サア、一同いどうの衆しゆ此世このよの地獄ぢごくを御覽ごらんせよと手拍子てびやくし打うつて笑わらはれた、是

に於おて武士ぶしは忽然とつぜんとして悟さとる處ところありア、これはしたり、地獄ぢごくを尋たづねて居ゐる中に自分じぶんが鬼おにになつてしまつたわいと氣きか付つたから刀かたなを鞘さやに收たまめ顔色かおいろを和なげイセ禪師ぜんじの御化導ごけだうに依より目前まへの地獄ぢごくしかと了解りかい致いたしましたといふて頭あたまを下くだげた、すると知識ちしきは、やれ、やさしうなられた、其氣そのき嫌いや克くきしづ心こゝろこそそのまゝ佛ほとけなるぞと云いはれたので、流石りやうじきは之これを問とふ程ほどの武士ぶし成程なりほどと言い下に唯心うゑしん所造しよざうの理りを悟さとつたと云いふ話はなしがある、地獄ぢごくも極樂ごくらくも全く一念いっぴん毫釐ごうりんの差さによりて而しかも心外しんがいにあるに非あらず皆みなな自ら招まき自ら生なずるのである、又また唐たうの韓文公かんぶんこうの高弟かうてい李翱りかくが藥山やくさん禪師ぜんじに向むかつて觀音經くわんおんきやうの中に、黑風くわくふう其船そのふね舳しゆうを吹ふいて羅刹鬼國らさつゑいこくに墮お墮たせんにも、其中そのちゆうに若ごとし乃至乃至一人ひとりも觀世音菩薩くわんせいおんぼさつの御名ごなを稱しょうするものあらば、是こゝの諸しよの人等ひとら皆みなな羅刹らさつの難なんを解げ脱だつすることを得えむとあり、又また羅刹鬼國らさつゑいこくとは、そも何なにれにかあると問とふと藥山やくさん禪師ぜんじは、李翱りかく小子こしと呼ばれた、我が俗語ぞくごていへば、李翱りかく野郎やらうといふ程ほどの語ごである、李翱りかくは之これを聞いて呼よび捨てにするとは、以もつての外ほかであると、忽然とつぜんとして憤いきなりを發はし忿怒ふんごの色面しよくめんに形かたちはる、時に禪師ぜんじは、此こゝの瞋しん恚いの心こゝろを起おこすのが、即すなはち羅刹らさつであつて、汝なんは今正いまただに羅刹鬼國らさつゑいこくに墮おして居ゐるのぢや、故ゆゑに自己じこ心性しんじやうの觀世音菩薩くわんせいおんぼさつを念ねんずれば、

早く其難を免れることが出来るので、觀世音菩薩も羅刹も畢竟自己の心内に
あることを知れと教へられたとある之等を一場の茶話として聞き逃さずによ
く味ふて見るがよいさてこれまでは洞然明白の至道には之より差異差別
のあるべき筈はない只だこれ一箇心念の作用に依りて佛とも衆生とも書き出
すのであると申しましたが、さりとて蕪も味増も一緒にせよと云ふのではあり
ません山は依然として高く聳え川は依然として深く流るゝ是れ皆な眞如法性
の妙用妙徳である承陽大師も高處は高平低處は低平と仰せられし如く高は
高いまゝ低は低いまゝに平等眞如の一實相である昔も今も草と木は其相自
から異なり月と花とは其相自ら差別してある又同じ花でも向島の花は芳野の
花と異なり同じ山でも富士と筑波とは同一でない鴨川は鴨川隅田川は隅田川
と各差別して居る男は男女は女夫は夫妻は妻法法位に住して味ますべからず
兄を姉と呼び妹を弟と呼んだのでは通用は致しませぬ同じ月にもありても去年
の月今年の月昨日の月今日の月とは決して同じではありませぬ自分の上に
就て見ても昨日の我と今日の我午前午後との我とは決して同一ては無い

天地萬象は箇々差別して、一として同一なる物はない是れ皆な平等眞如の本體
が活動して止まざる變化の妙用であるそれ位のことは小學校の生徒と雖も了
解の出来る事である斯くの如く差別して居る當相が悉く眞如一實の妙體より
顯現するなるが故に差別即平等である然るに凡夫は此理を了せず謂ゆる自己
に迷ひて妄りに境界を攀縁するによりて山は山川は川と差別して居るまゝが
即ち平等にして洞然明白の至道なることが信じられぬのである平等眞如の一
實體には彼もなく此れも無い天地萬象は總に此一實體の妙用たることを知ら
ば森羅萬象は事々物々みな各々其本色を持つて獨立無伴であるが其當相が直
に是れ無難の至道でありますから箇々壁立萬仞物々眞如一實體の光明聚にし
て更に高下の差別はないのであるこれが所謂平等即差別差別即平等の妙理で
す今日の哲學上の語で申しますれば現象即實在とか現象即本體と申すことと
ある此高下差別のなき處に向つて吾人の一念心が動着して毫釐の分別相を生
ずれば忽ち天地懸隔せる迷境を現出するされど又萬法は一如なり一切差別な
しと云へばとてその一如無差別と云ふ處へ腰を下して理體の一方に偏せば又

之れ第二第三で依然として天地懸隔することを免かれぬ要するに差別と云ひ無差別と云ふも其一方に偏すれば矢張至道に辜負すること天地懸隔にして永く迷苦の境域を脱することが出来ぬ。

現前を得んと欲せば順逆を存すること莫れ

現前とは目前に露現するをいふ順逆とは順はシタガフ乃ち己れの情に適すること逆はサカコフ即ち己れの情に反することである故に順逆と云ふは前に述べた處の揀擇憎愛と同一義である唯だ文字を異にするのみであるから其意に至りては少しも變はりはない故に此等の二見對待の語を互換して見るが宜い併しこう云ふて了へばそれで大凡の意味が知れますから別段細釋するの必要もないことになりませんが斯く文字上に現はれて居るもの、其中に深き、玄旨の存することを味ふて行かねばならぬさて現前を得んと欲すとは何の現前であるかこれ云ふ迄もなく至道の現前てあります今日吾々が佛法を信ずるのは要するに至道の現前を得んとするに外ならぬので八宗九宗と別れ三十

四十の分派ありと雖歸する處は至道の現前を求むるに在りて佛道修行の目的は決して此外にはないのである或は看經し或は禮拜し又は坐禪辨道の法參師問法の道偏へに至道の現前を期するが爲めである然らば其至道は如何にせば現前するかと云ふに他なし唯だ順逆を存する莫れて順だの逆だのといふ揀擇の妄見を放下せば當處現前である我々の迷と云ふものは皆これ順逆の境に束縛せらるゝのであるから天地唯一至道なることを信じて順逆の妄分別を存すること莫れと誡められたのである元來無難の至道洞然明白の至道無差別の至道は過去は久遠の昔より未來は永劫の後に至るまで十方三世を盡して各自の面前に現前して寸毫も藏すこと無く相離るゝことは無い天は高くして萬物を蓋ひ地は厚くして萬物を載す山の高き海の濶き柳の縁花の紅なる皆な是れ至道の現前に非ざるは無い吾人が眼横鼻直手の舞ひ足の踏む所悉く是れ至道の活潑々々て徧界曾て藏さず露堂々ど現はれて居る然るに此現はれに至道なりとすれば現前を得んと欲せばと云ふは少し矛盾の様に聞ゆるが決して然らず至道は亘古亘今更に藏さずと雖も我等凡夫の悲さには自ら迷ふて目前の事物

に貪着して、彼に使はれ、此に使はれ、益々妄想分別を逞ふし、美を好み醜を嫌ひ、揀擇を起し、取捨を生じ、遂に現前の至道中に在り乍ら自ら之を味却し去るのである。之を順逆を存すると云ふのである。此順逆を存するに依つて自己の本心が埋没して、蓋天蓋地光明赫々たる大道を照見すること能はず、三祖大師は深く之を憫みて、若し親しく至道の現前を自知自得せんと思はば、先づ以て自己と物との隔執を拂ひ除き、一切の萬法は皆なこれ因縁に依つて生起せる幻影である。

引きよせてむすべば柴の庵なり

とくればもとの野原なりけり

元來其の實性實體の認むべき無きことを徹證して、順境逆境の上にて於て妄りに其影に迷ひ其迹を執して、揀擇に勞せざれとの垂訓である。順逆の幻影なくなれば、目前の境には元來順逆の定相のあらふ筈がないのである。本來順逆苦樂など云ふものは、自ら書き出す處のものにて、眼見耳聞の當相が洞然明白の至道なることを識得せば、順逆ともに自己本心の大明明です。斯く云へば、至道現前とは容易な者であると思ふてはならぬ。尤も到得歸來無別事、廬山烟雨浙江潮、天悟の智

眼を運せば依然たる柳綠花紅、喫茶喫飯困眠覺起、其儘の佛心法身にして、此外更らに別事なしと雖、無始以來の薰習力は容易に順逆の束縛を解脱すること難し。修行の肝心を要言すれば、順逆二境そのまゝに之を打ち忘れるの工夫を積むがよい。乃ち順境に對する時は、順境の當體に平等一實の至道を徹見するのちや逆境のときも亦た是の如くの工夫を下すのである。されば順の時には徹底順逆の時には絶對に逆なれば、それ其儘順逆相亡て、即ち道の現前を得るのである。勿論世間の當相は順もあり逆もあり、而して交々順逆をなして居る。彼れに順なる者は此れに逆、此に順なりと見れば、彼れに逆であるから絶對に順なる者も無ければ、絶對に逆なる物もない。能々順の順たる所以、逆の逆たる所以を究めれば、順逆本來無一物にして、何れを順とし何れを逆と固執すべきものではない。故に此本體を返照して、順の順たるを忘れ、逆の逆たるを忘れて、善をも思はず、惡をも思はざる底の妙處に達するのが、此一段の大主眼である。大凡順逆なるものは、處により時に従ふて千變萬化するもの順も永久に順ならず、逆も亦永久に逆ならず。春の吉野に花を賞するの時人は、風を憎むて花を散らさん事を恐る、これ風は

花の爲めには逆なれども、而も風は萬物活動の大元たる役目であれば、花の爲めに逆であるからとて吹かすには置かれぬ、否寧ろ花の開くのも風力の賜である。縦しや花を賞する時は風を以て逆なりとするも、炎帝威を弄するの夏日三伏の暑氣酷しき時に當つては、納涼の庭に吹き来る風を戀ひ、團扇を以て招き寄せ、またこれを喜び愛するのではないか、此時風は己れの爲めに大順である。風に變りはなけれども、或時は順となり、又或時は逆となる、姨捨山や更科や、愛宕の山に月を賞する時人は村雲を逆なりとして惡むと雖、雲自身には順情もなく逆意もなし、三五の夜半でも遠慮なく村雲は出る場合には出る、今宵は人間の月見の夜であるから、邪魔をしてはなるまいなど、遠慮しては居らぬ例、月を賞する時は雲を以て逆なりとするも、永久逆とは定められぬ、若し大旱魃の折柄に忽ち一簇の雲影が山の端に其面ざしを現はす時には、實に皇天の加祐を得たる心地して喜ぶのが常情である、之れ畢竟月見の時には逆なりとせし雲も、早魃の時には忽ち順となる故に順も順ならず、逆も逆ならず、何れの處に於てか順逆の定想を確執すべきものあらんや、日は晝を順として夜を逆とし、月は夜を順として晝

を逆とす、けれども日月に於ては一徹塵も順逆の念想はないのである、順と云ひ逆と稱するも唯だ人間が其名を付けたので、至道の妙用は超かに順逆を超越して居るのである。

往昔伯益と云ふ者、井戸を鑿つて民に水を與へ、燧人氏は石を鑽つて火を益すべき方法を教へた、之に依つて渴を愈やし、物を濕ほし、飯を焼き、湯を沸かすなど、水火の利用ほど大なる物は無い、これまことに吾れに大順なるものであるが、知伯は水を以て趙の城を浸し、董卓は火を以て漢室を焼き捨てた、これ實に彼れに取りての大逆である、かくの如く水は伯益の手にありて順であつたが、知伯の手にありては逆となり、同じ火にしても燧人氏の手に在りては順となり、董卓の手に入りては逆となる、然れどもこれ順逆は水火にあるにあらずして人の心と其業力より造り出したる處のものである、と云ふことが、浮世莊子の中に書いてあります、が、全く然りぢや、故に本來之れが順之れが逆と定むべき事物は、一物もないが自ら迷ひ自ら求めて順に貪ほり、逆に瞋り、此順逆に擒へられ、三界六道の生死輪を轉回して居るのである、然らば如何にして順逆を解脱すべきやといふに、

是ぞ禪の禪たる必要の存する所である。

違順相ひ争ふ是れを心病と爲す

違とは心に逆なること順とは情にシタガフ事であるから違順と云ふも順逆と云ふも皆な憎愛の語より來れるものツマリ互換して見ればよい前にも述べたる如く一切萬事の是非苦樂は總に我が心を本として起る心に違へば則ち憎み情に順へば則ち愛する而して違順憎愛の念一たび發すれば苦樂昇沈の相紛然として幻出し從違至夜互に相争ふて我見と我見と衝突し妄想と妄想と觸犯し丸て戰爭の巷に彷徨して居るの狀態であるが是れ皆な心地の妄病である元來一點の塵垢なき無難の至道は其體明淨にして清白なること月を含める瑠璃にも勝れり相争ふべき違もなければ順もない盡十方法界一團の佛光明である此方の迷心より徒に妄想分別して平等界中には非凡聖迷悟の幻翳を生じ生死に涅槃に煩惱よ菩提よと揀擇して相に迷ひ影を執して妄りに相争ふて居る而して此争と云ふのは自己の心上にて生ずるのであるが其心と云ふのが亦た我執

雜染の塊で決して本來の眞實ではない眞實の本心は元來至道と一枚にして凡聖不二である吾々が心と思ふて居るものは所謂惜い欲しい憎い可愛いと云ふ根境相對する上に發する分別心であるからツマリ我見の結晶物たるに過ぎぬこの「オレ」が「我」がと云ふ我見我慢が本なり我れ以外に他を認めて自他平等の一實相に違背し妄りに我を順なりとし他を違なりとし精神界には常に煩惱の戦を演じて居る而して此戰爭が斷へず胸中に開かれてそれが種々の罪惡を醸し無量の苦患を招くのであるソコで吾人は一念發起して信力を現はし日々夜々に修行の功を積み以て至道の本源に達すれば此時始めて此争が離れることが出来る是を無淨三昧と云ふ吾人の精神は元來坦々蕩々として常恒の極樂界であるから本より争ふべき敵はないのであるが一念念起の時忽然として風なきに波を起す恰も國に戰爭ある如く國家と國家とは双方正當にさへして居れば決して戦争などの起るべき筈のものではないが然るに相互の間に於て何か意志の疏通せぬ處があるとか感情を害する處があるか又は我見我慢を逞ふすとか致すと茲に端なく戦争を開始することゝもなり双方火花を散らして勝

負を争ふに至るものである吾人心地上の争も矢張りそれであつて常には平和にして法界一佛乘萬象一實相て争ふべきものはないのであるが、見聞覺知の上にて少かに貪名愛利と云ふ様な一念が起りますると一波動いて萬波競ひ來るが如く違順憎愛の争が益々烈しくなりて來るのである之れ即ち心の病である、三祖大師の此銘は心を離れての御示しにあらすして全篇皆な心を説いたものであるから、こゝにも心病の根源を示して本心の健全に復せしめんとする慈訓である、此心病たるや、たゞに凡聖迷悟の相に迷ふ凡夫事上の迷相のみではなくて同じ佛教の中にも此れは頓教彼れは漸教密教であるの、顯教であるの權教とか實教とか大乘とか小乗とか種々様々の區別を設け名相を劃して徒らに相争ふて居るのは皆な之れ心病たる事を免かれませぬ、全體佛と云ひ法と云ふ一物に執着するも已にこれ心病である、如何となれば、我見を以て佛法を判すれば佛法も亦妄想の具となるからである、況や其佛見法見の上に更に人我の見を逞ふし、自讃毀他して相争ふに至つては、實に病膏肓に入つたもので、耆婆扁鵲の如き名醫と雖も、尙ほ且つ治し難き程の重患である、と古徳も嘆せられてあり

ます、此心病たるや、違順の争から生じたるものではあるが、只違順の見を離れて無心無想になりきりさへすればよいかと云ふに決して左うてはない、何故かと云ふに、それは次の句を見れば自ら明かなることである。

玄旨を識らざれば徒に念靜を勞す

玄旨とは玄は玄妙又は幽玄などと熟字する、老子には玄の又玄衆妙の門と云ふ語もある、即ち幽玄微妙にして文字言句の上に説き盡す能はざるを云ふ旨は、ムネ乃ち道理と云ふに同じ故に玄旨とは微妙の道理で、所謂至道の妙義を云ふたものです、抑も至道は法界に圓通して佛にありても増さず、衆生にありても減せず、千古萬古不生不滅である、次に念靜とは念は心念々慮をいふ、靜は、シヅカ即ち靜止の義であるから、念靜と云ふは心念を靜止して散亂せしめざるをいふのである、さて上に違順相争ふは是れ心病と爲すと云ひ、又憎愛すること莫ければ洞然明白なりと云ふてあるが、然らば違順を立せず、憎愛に涉らず、自己の心念を打ち靜めて枯木死灰の如くにし去れば宜いかと云ふに、否、決してさうてはない、全

體無難の至道玄妙の大道は、其全體大用を自證自得するに非ざれば、只だ心念を
 静止し得るも何の役に立たぬ所以は如何とならば、至道即ち玄旨は各自固有
 の本性なれば其本性の露現を期するが佛法の大目的である、而して至道の妙旨
 は宇宙に徧在し、萬事に流溢して居る、若し唯に念想を泯絶せんとせば、遂には至
 道の妙用を失却するに至る、且つ夫れ諸法は本來至道の妙用なりとせば、吾人の
 念想も亦至道に外れたる者では無いのである、故に玄旨に達せんと欲せば、心念
 の本源を活捉して如何と見るが宜い、強て之を静めんとなれば、益々紛擾を招く
 の基となるものである、例へば濁水が一寸風波の止むた際、一時は澄むた様に見
 へても風が起れば忽ちに濁つて了ふ、吾人の心念も矢張りそれと同じく、動き狂
 ふ念想を厭ふて念想を拂ひ除かんとし、一時は無理に抑へつけて動念に涉らぬ
 様にしても、其静まつて居る間は、ホンの僅かの間でも、とく動かうと心して居る
 のを抑へつけた迄のことであるから、一寸でも抑へた處の手がゆるめば、直ぐに
 復た狂ひ出す、恰もゴム袋のやうなもので之を抑へ付けて重しをして置けば、縮
 まつて居るけれども、一寸でも之を放せば、其反動で却つてピンと跳ね返る様な

ものである、これ眞の不動地に住したのではないから、時に觸れては忽ちに動揺
 するのである、若し之れが眞實解脱の境界に達して、堅固不動の三昧に安住し、底
 の底まで澄み亘つて居る處のものであつたならば、如何に動揺せしめんとして
 も、又如何程風波が起つて之をかき亂しても、本より内外光潔たる清水であるか
 ら、動揺するまゝが、ソツクリすみ渡つて會て濁亂の相はない、吾人の心念も亦是
 の如く動をやめての静ではなく、動そのまゝ、大静であれば、如何に慮知念度し、分
 別思惟しても、其念度思惟のまゝが、寂靜不動である、所謂動中の静、又は眞静とは
 コゝのことぢや、何となれば眞實に身心脱落し、至道に一如し去る時は、已に是れ
 動静の二相を超絶して居るのである、動静の二相を超絶したる眞静なるを以て
 いかにかに動揺しても決して動揺に墮ちぬ、已に動揺のまゝに動揺に墮ちぬのであ
 れば、此動揺は静に對しての動でなく、動のまゝの静靜のまゝの動であるから、超
 然として二見の對待を離れて居る、こゝが佛陀と衆生と一致する妙處にして、我
 他彼此の妄見妄想は影をも止めず、そのまゝ、脱體露現の至道である、古人はこれ
 を心萬境に隨つて轉ず、轉ずる處轉た幽なりと云ふてある、大莊嚴經には、蓮は泥

中より生じて、然も淤泥に染ますとも示されてある而して金剛經には「應に住する處なくして其心を生ず」と説き承陽大師は此心を咏じて

水鳥の行くもかへるも跡たへて

されども道は忘れざりけり

と仰せられてある要するに心が萬境に随つて無礙自在に轉じ乍ら更に萬境に執着せず、動即靜となるのである。吾人が日用光中動搖の中に在り乍ら動搖に擒はれざる底の修養が最も肝要である。抑も至道とは如何、玄旨とは如何と云ふに恰も大火聚の如く、之に背けば凍死し、之に觸るれば全身を焼く、實に背觸共に非なるを以て實際の修行上動靜有無の對待を解脱するのが至道の至道たる妙旨に契當する所以である。佛教八萬の法門も畢竟此の至道を註脚せられたものである。法華經に開ゆる「唯有一乘法無二亦無三」であるから自力と云ひ、他力と云ひ念佛と云ひ、題目と云ひ、其他大小權實も皆なこれ一至道の説明にして二なく三なし、歸する處はたゞ一乘法のみ、之を證するを佛といひ、之を詮するを法といひ、之を習ふを僧といひ、故に至心に佛法僧の三寶に歸依するは正に是れ至道に歸

依するのである。

分けのぼる麓の路は多けれど

同じ高嶺の月を見るかな

雨あられ雪や氷とへだつれど

とくればおなじ谷川の水

唯に佛教の法門ばかりではない、天地間にありと有ゆる有象無象は悉くこれ唯二無二の至道にして、實に洞然明白なるものである。若し此玄旨を知らば茶裡飯裡別處に向はず、茶を飲み、飯を喫するの直に是れ至道の妙機妙用である。然るに此玄旨を知らずして、或は徒らに佛法の名相世法の幻相に惑溺し、又は頻りに心念を靜止せんとして、精神を勞するも、是は畢竟徒勞に終るのみで、決して至道に契當し去ることは出来ぬ。我々が病氣の時には、ヤレ胸が苦しいの腹が痛むのと云ふて、殊更に胸腹のあるを覺え、手や足の指の先に一寸疵が出来ても、特に其指が氣にかゝつて忘れられぬ、又眼中に塵でも入つた時には、殊に眼が氣になつて、ソツとして置かれず、時々刻々に手を附るが身體全部が健康の時にあり

ては手を動しながら手を忘れ、足を運びながら足を忘れ、物を見つゝも眼あるを忘れ、鼻は何時も顔の中央部に位してあるが、邪魔にもならず、氣にもとまらぬ實際鼻あるを忘れて居るけれども、若し一寸粟粒程の腫物でも鼻の頭へ出来るが最後、丸て彌生の風雨の如く、ハナがハナがと氣になつて仕様がなくなる。身心全體に於ても又其通りであつて、我々が至極健康にして樂々と蒲團の上に横つた時には、我身て我身あるを忘れるが、去りとして我身が實際なくなつたのではない、ありのまゝの脱落である。之と同じく玄旨を識らずして、念靜を求むるは病氣の時の心身の如く、忘れんとすればする程益々忘れる事が出来ぬ。煩惱を嫌ひ涅槃を求めんとするも、畢竟煩惱の犬は逐へども去らず、菩提の鹿は招けども來らずであつて、厭へば益々近づき、招けば愈々遠かる。されば承陽大師の語に「名利を捨てんと思ひ煩ふこと勿れ、又之を惡む勿れ、名利を憐むこと自己の子の如くせよ」と仰せられてあるが、吾人の身心は決して名利の念を滅絶し得るものでない。故に之を善用して以て至道に導けば、名利即至道である。此意を了せずして無暗に捨てやう／＼と思ふては、とても捨て得らるゝ者ではない。一休和尚がかつて住

吉の里に遊び、小野のわたりに逍遙して、

來て見ればこゝも火宅の宿ならめ

なに住よしと人の云ふらん

と、一首口ずさみしを、牀菜庵の老僧きゝて取り敢へず

來て見ればこゝも火宅の宿ならめ

心しづめてすめばすみよし

と詠んだと云ふことであるが、全く火宅の宿と見るも、極樂淨土と見るも、心をしづめて住むと否とによりて分かるゝのである。けれども無理に心を靜めんとし、ても容易に靜め得られぬことは前に述べた通りである。乃て

よしあしと思ふ心をふりすて、

たい何となく住めば住みよし

と云ふてなければならぬ。何となくとは無爲無作を云ひ、無爲無作とは私情と我見とを放下して、身心を至道の中に投入したる端的である。是を順逆超脱の好風流と云ふのである。

圓なるも大虚に同じく欠ると無く餘ると無し

いよく説明の歩を進めまして然らば從來述ぶる處の至道とは果して如何今此の二句は正しく至道の全面目を説き示されたのである至道の全面目は色空有無の論では無い所謂二祖も不可得達磨も不識と云はれた通り説示一物即不中であるから元より言詮に亘るべきものにあらず絶言絶慮の當體であるが三祖大師は暫く一線路を通じて圓同大虚無欠無餘と説明されたのである圓とは圓満にして圭角や邊際のないことをいふ其圓満なることを喩へば大虚の如くである大虚とは字の如く大空大虚のことである大空は御承知の通り空を漠々として邊際も無く方處も無い一定の相はないが處として遍からずといふこと無しそれが即ち大空の大空たる所以にして元より初めもなく終りもなく生も無く滅も無い普く萬象を包容して毫も痕跡を留めず廣く十方に満ちて大小の相を泯す而して大虚空は實に無欠無餘なるものである欠とはカケル餘とはアマム大虚空は無相にして且つ無際なるを以て欠くる處もなければ餘る處もない

之を大にしては天地にも充滿し之を小にしては茶碗の中にもコップの中にも一杯に盈ちて居る大にして大相なく又小にして小相がない物其物に應じて充滿漏れして少しも欠くる處がない欠くる處がないから従つて餘る處もない人間でもアノ人は圓満の人であるとか又アノ家庭は圓満であるとか云ふ時は全く此無欠無餘でなければならぬ圓満とは語を換へて云へば完全と云ふことである完全と云へば手が一本無くても指が半分欠けて居ても完全とは云はれまい又五本でよい指が六本あつたり二つて澤山の耳が三つも四つもあつては矢張完全と云ひ圓満と云ふことは出來ぬ否な身體の外形だけは何んなに美しくチヤンと揃ふて居ても若し精神に欠くる所があつたならば矢張完全圓満とは云へぬ乃ち眞に完全圓満の人ならば外形はいふに及ばず精神道徳の點に於ても無欠無餘でなければならぬ其外貌より見て圓満らしき人でも道徳的行爲の上からは全く零のものが多し之等を稱して何んて完全圓満なりと云ふことを得んや内外共に相應して無欠無餘の人でなければ圓満なる人物と云ふことは出來ぬ今此至道の全體は實に完全無缺にして恰も大虚の如く圓満無碍古今に通

じて形を改めず、凡聖に依つて其質を變せず、三世の諸佛にありても、歷代の祖師にありても、將た又三界流轉の衆生にありても、不増不減なるが至道の本體である。他語を以て云は、大智慧の靈體とも稱すべく、大光明の淨性とも稱すべく、父母未生以前より百千萬億劫の後までも、不變不易法界に徧滿して、曾て藏さる處のもの、これがこれ至道である。故に承陽大師は坐禪儀の初に、原ぬるに道本圓通爭てか修證を假らんと申されてある。圓通であるから、本より無碍無碍であるから、處として通せざるはない。故に洞山大師は其著寶鏡三昧に於て、細には無間に入り、大には方處を絶すと示されてある。眞に之れ大小の量を絶したるものなるが、故に無間に入るも必ずしも小ならず、方處を絶するも亦必ずしも大ならず、畢竟して模索不着である。故に心經には、諸法は空相にして生せず、滅せず、垢つかず、淨からず、増さず、減らずと仰せられたり、これ則ち至道の本體、人々具足箇々圓成の本心にして、實に圓なること大虛に同じく欠くことなく、餘ることなきものである。

良に取捨に由る所以に不如なり

取捨とは字の如く取は、トル、捨は、ス、ナル、こと、不如とは至道の徳を其徳の如く現前せしむると能はざるをいふ、一步を進めて註すれば、如は、如々不動などいへる。如の義にして、不變不動の意とも見らるゝから、不如とは其の反對で變動の義で、乃は、無欠無餘の大道に背反するをいふ、故に摩訶衍論にも、不如とは遠逆の義なりと云ふてある。さて此の至道の全體は、前段にて述べたる如く法界を通じて圓同大虛無欠無餘で、元來法相の見るべきなく執すべきはない。然れば何をか揀擇し何をか取捨すべきものならんや、然るに凡夫は自己迷妄の見よりして妄りに空中に華を認めて、自他の相を執して之を揀擇し取捨するから、佛と衆生と相隔り、凡夫と聖者と相距ること遠きに至るのである。これ即ち不如である。前にも天地懸隔と云ひ今は不如と云ふ何れも同じ意味である。無難の至道が何故に不如にし去るか、と云ふに皆なこれ取捨憎愛の致す處である。元來取るべきなきに向つて貪り取らんと欲し捨つべきなきに向つて憎み捨てんと欲し爲に三

毒煩惱の坎穽裏に墮在して遂には至道を認むること能はず、玄旨に達すること能はず、徒らに轉倒夢想の奴隸となりて、虚假不實の影法師を認めて、實體なりとし引きよせて、假りに結んだ庵に執着して、解けてはもとの野原となるを悲しむ。自らの好む處を取り嫌ふところを捨てんとして、際限も無く迷ひ狂ふて居るのぢや、活眼を開いて達觀せば、法界一實相果して何物もを取り何物もか捨つべき。故に此取捨の念をさへ離るれば、直に如々の全體に契ふて、本地の風光は當處に現前し、我と佛と無二無別なる大覺の境界に達することが出来るのである。

有縁を逐ふこと莫れ、空忍に住すこと勿れ

有とは有爲の諸縁にして、元來實性のなきもの、空忍とは忍は忍可決定の義といふて、知慧の異名である。乃ち諸法本來空なりと明めて、其空見に尻を据えたのが、空忍に住するのである。前句までは圓同大虛無欠無餘なる至道に向つて取捨増愛の妄見を起すに依つて、長しへに至道の妙徳妙用を失却することを述べられた。これ則ち迷悟の依つて来る所を示されたのである。此本文よりは正しく眞信仰

を得るの要術を論するのぢや、然らば正しき眞信仰を得るには如何なる心得を要するかと云ふに、先づ第一に有縁を逐ふことを休せねばならぬ。逐ふとは攀縁の義であるから、此一句は凡情を恣にして有爲の諸縁を逐ひ廻つて、それに束縛されること莫れと云ふことである。有爲の諸縁とは色聲香味觸法の六塵の外境界である。此外境界は本來唯心の所造にして、實體の執すべきはない。然るに凡夫衆生は此實體なき有爲の諸法を逐ふて、飽くまでも實體ありと執し、自ら求めて取捨憎愛の見を選ふし、而して其結果として地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六道を幻出し、又自ら其間に輪廻して、永劫免かることが出来ぬ。坑坎に陥るのである。嘗て支那の四祖大醫禪師が三祖大師に向つて願くは、和尚慈悲解脱の法門を與へ給へと乞はれた時、大師は誰が汝を縛するやと云はれた。ウ、解脱の道か束縛を解いてくれるのかと云ふのか、縛られたか、何時縛られたか、誰れが縛つた全體、何て縛られて居るのか、試に汝を縛はりしといふ者を仔細に點檢し來たれ、我れ直ちに汝が爲めに解脱の法門を打開してやらうとの反問ぢや、時に禪師は人の縛する無し外には、誰も我を縛する者はありませんと、いふたすると、大師は何ぞ更

に解脱を求むるや縛られぬ者なら解く必要もあるまじ、徹底無自性なるを識得せば本来解脱して居るては無いかといはれた時言下に於て大悟せられたとある、實際凡夫の悲しさは無縛自縛と申して縛り手も無く縛る繩もあらざるに自ら自らを縛つて苦しんで居る、自ら縛つたものは自ら解くの外は無、併し繩なき繩であるとするれば解くにも及ばぬ、唯だ徹底我は縛ばられては居らぬといふ、確信を起すが近道ぢや、然るに強て解かうと悶けば悶く程いよ／＼ます、縛り目が殿しくひ込んで来る、これ皆な有縁を逐ふが爲めてある、一切の諸法は盡く是れ四大五蘊の假和合の相にして、一もその實體はない、堅きは地大濕へるは水大暖きは火大、動くは風大、此四大の和合によりて萬物を成立する、吾の一身もまた此の四大の色受想行識の心と此の五蘊の集合物である、たとひ今は暫く雨霰雪や氷とへだてゝは居るものゝ溶けて流るればもとこれ同じ谷川の水であります、水を離れては波なきものを徒らには大浪小波に固執して水の實體元來大小の相なきことを知らざるが如し、是を迷妄の根元といふ、此迷根を離れざれば到底正しき信仰を發得することは出来ぬ、從つて至道に逢着するこ

とは六ヶしいのであります、故に有縁を逐ふこと勿れ、ゆめ／＼有爲の諸縁に貪着してそれに束縛されてはならぬぞと誡められたのであります、此束縛を解脱せしめんが爲めに釋尊は諸法空寂の理を説かれたのが般若である、此説法には實に廿餘年と云ふ長い年月を費された程である、心經に所謂五蘊皆空といふが般若の根本義である、大般若經六百卷は畢竟空理の説明であるのである、乃ち有爲の諸縁を逐ふ者の爲めに眞理の一面を説かれたのが眞空であるから、ツマリ病を療するが爲めの薬の如くである、ざるを空理を聞て單に空觀一偏に墮在したならば、恰も藥毒に中てられた様な者であります、欲色無色の三界は無常苦惱の世界であるが其根本原理を究めて見れば唯だ是れ衆縁所成の假相にして其實體は畢竟空なるものであると悟るは正しく諸法の理體を觀知したのであるが、唯だ其空理の一方にのみ安せば體を知つて用を忘れたる者である、空忍に住する者の稍や劣等なるは聲聞緣覺等の小乗の聖者で優等なるは權大乘の行人です、若し空忍に偏したならば何を以てか神通妙用を現はし慈悲應現の功徳を成就する事が出来ませう、故にこれまた眞實解脱の境界とは云ふ事が出来ぬ、

ソコデ上には有縁を逐ふと莫れど誠しめ下には空忍に住すること勿れと誠められたのである古今佛教家の蹟を見るに多少此空忍の病に罹り易い傾がある釋尊の説き給ひし諸法皆空の理は眞理の基礎ではあるが空理に住して一切世間を顧みること示されては無い眞理を悟りて名聞も利養も其他有爲の妄法に束縛せられず萬象森羅の中に在り乍ら八風吹けども動せずと云ふ境界に達するには安心の根柢を空觀の上に置かねばならぬが其所にのみ住着せば全く世間と没交渉になる兎角に世事を輕視し人生を蔑如して了ふやうになる佛教は厭世教であるなど云はれるのも實に此處に原因して居るのであるから大に注意を要せねばなりませぬ楞伽經の中に一人の外道ありて牛に角のあるのを見て有の見を起し一切の諸法は皆な有であるといひ又一人の外道ありて兎に角なきを見て無の見を生じて一切の諸法は皆な無であると云ふたとあるが誠に面白い譬喩であると思ふ牛には角の有るのが眞理で兎には無いのが實際である然るに一方のみを見て有ると極めたら無い者は何んと説明するか又無いと極めて了ふたなら一方の有るのを何とする何れも其一方に偏する爲めに誤

またれたる見解であります此有無兩邊を離れなければ眞實の正見も開けず正信も發起せられぬ太陽祖師は有無二俱離廓然天地空と云はれたが吾人は能く此玄旨に參徹せねばなりませぬ。

一種平懷ならば泯然として自ら盡く

一種とは一心の異名ぢや平懷とは虚心坦懷といふに同じく乃ち心地の平穩なることである有縁を逐はず空忍に住せず有無の兩途を離却し了れば心地上一點の繫累なる一切の塵境は泯然として自から盡くるのぢや泯然の泯はホロビルて物の泯滅すること愛もなく憎もなく取なく捨なし之を稱して自ら盡くと云ふたのである悲しい哉吾人は常に有縁を逐ふに非ざれば空忍に住し容易に此の二邊を透脱すること能はず故に胸中は何時でも平穩坦然と云ふ譯に行かずして從晝至夜不穩不平懷であるのである併し是れ自ら招く處です一旦豁然として二見を超越すれば承陽大師の謂ゆる

いつもたゞわが故郷の花なれば

て何れの時何れの處に在りと雖不變不易胸中自ら平々坦々として喫茶喫飯の
 其儘の王三昧觸處々々に中道實相の法門に遊戯することが出来る此時こそは
 世法もなく佛法もなく生死即涅槃煩惱即菩提迷もなければ悟もなくて凡聖一
 如得失喪亡實に氷の朝日に照されて融消するが如く村雲の風に吹き拂はれて
 晴天白日一點の幻翳を存せざるが如くなる然れども妄りに有縁を恐れて之
 を捨てんとしたり妄りに空忍を嫌ふて之を離れんとしたりして強て自ら煩悶
 して無理に二相を離れんとし其處にのみ心を勞しては却て此平懷なる境界に
 達することは出来ぬ故に坐禪の時に當りても強て妄念を離れやう／＼と思ふ
 まじきぞとは古徳も豫て戒められてあるところである捨てやう／＼と問けば
 悶く程尙ほ更ら妄念が付き纏ふて決して捨て得らるゝものではないそんな妄
 想袋を被つて愚圖々々して居るやうては、とても佛道修行の功を成じて佛果位
 に到達することは出来ぬ、ソんな處にのみ頭を附き込んで居ては唯だ光陰を徒
 消するばかりぢや世の中が日に月に進むにつけ吾人も亦益々進歩して行かぬ

ばならぬ此時節に於てそのやうな閑工夫を求めて愚圖ついで居て何うなるも
 のか參禪の正當時は常に煩惱を放下するのみならず菩提も亦脱落し去れ脱落
 すとは自己を忘るゝとぢや、是に於て忽然として一種平懷の端的に達着する山
 を見れば即ち山それによい水を見ては即ち水それによい別段無理に山即水水
 即佛など、小理窟をつけずとも手に任せて拈じ來るにそのまゝありのまゝ不
 是あることなく之を稱して解脱底の行履と云ふのである、こゝに至らねばとて
 も眞の禪的妙用を現はすことは出来ぬ

動を止めて止に歸すれば止更に彌よ動ず

さて前句には心地平穩ならば迷悟凡聖の妄境の自から盡くるの意を述べたが
 之に反して外界の動相を防ぎ止めやう心中の動搖を防ぎ止めて靜止の状態を
 現はさう杯と思ふと却て一層の動亂を重ねるものぞと云ふ旨を此二句で示さ
 れたのである、止とは靜の字と同じ義である、動止の二字は動靜と見るが宜い、動
 とは吾人の心が動搖して萬物に應じ爲めに種々の思慮分別に渉るをいふ、靜と

は動の反對で一切の心念を滅すること、前句に對照すれば空忍に住するのが靜で勿論有縁を逐ふのが動である。して此動と靜とは共にこれ至道の一面ではあるが其全體では無い。畢竟一心の影法師の様なものぢや、影法師であるから之を執すれば却て實體に違背する。執着なきに至らば動靜一如である。動を止めて靜に歸せんと欲すれば已に之れ兩邊に迷ふて居るのである。動の外に止を認め、止の外に動を認めるからぢや、故に止めんと思ふ目的物たる靜が却て動亂の本となる。元來至道の玄旨は一如平等にして二相に涉るは總て虛假不實である。之を例へば大虚空の時に晴れ時に曇る様な者で曇るも一時の假相晴れるも一時の假相ぢや、虚空其者に微塵の變化も無い。虚空は常に廓落として千古萬古に通じて不生不滅である。而して本より雲の出沒を妨げぬ。然るに凡夫は此理を知らず自ら妄計して動を認め、而して之を厭ひ嫌ふて頻りに止に歸せんとあせる處が止に歸せんとあせればあせる程、止も亦動につれて愈々動じて更らに止に歸する事は出來ぬ。之を水と波との喩を以て云は、大海に於ては時ありて怒濤天を拍て、日色晦冥と云ふ様な事もあり、或は春の海終日のたり、一截と云ふやうな

事もある。然れども水の本体に於ては更に増減も無く變化もない。波の起ると起らざるとによりて動靜の相異なりと雖もその異なるまゝが不變不易ぢや、變化常なき白浪滔天のまゝがソツクリ不變不易の平等海水である。又水天一碧明鏡の如きまゝが出沒變幻する波浪と同一體である。然るに愚かにも動く波は靜なる水にあらず、故に波を靜めて水となさんとして波を打ち波を拂へばそれだけ益々波の勢をますのみで、決して靜水に復し得らるゝものでない。心地の修養も亦た是くの如く妄念を靜め萬境を離れんとすれば益々萬境身に逼り、妄念内に亂れて愈至道の本体に遠かること千里萬里するのである。故に一切衆生が生死に輪廻して六道に流轉するのも皆な此の妄想妄見より起るのぢや、併し一度至道を觀破せば六道四生の往來のまゝが湛然として常に不動の本体を堅持して居る。此意を了じたならば善惡取捨に涉つて左顛右倒することは決してないのである。故に若し善惡取捨は自己の妄見より起るものなることを知らずして妄りに動念するは甚だ宜しからずといふので、頻りに其妄見を靜めやうとしても矢張妄念を以て妄念を止めんとするのであつて見ればますく動搖すること

になるのである。之を譬へて云は、影法師は自身の本體でないといふて妄りに
 之を避けやうとて馳せ逃ぐれば影法師も亦何處までも随つて馳せ走れば愈々
 走り止まれば又止まる。決して影法師の無くなることではないのである。御
 伽嘶に或る一人の子供が、月夜の晩に庭に下り、自分の影を認めて、これは不思議
 なものがある、お化けぢやないかしらと思ふて、半ば恐を抱いて見て居た。よと自
 分が手を上げると其通りにあげ、下せば又下す、足を上げ首を傾けば悉く皆な自
 分のする通りにする。果ては此畜生僕を馬鹿にして居やがる。これ斯ふしてやる
 どと棒を持って来て頻りに打つ、すると元々影法師であるから又自分のする通り
 に棒を持って打つ勢をなして居る。試に打つ事を止めれば影法師も亦止める。愈々
 己れを馬鹿にして居るなと、果ては氣も狂はしく亂打すると、先方も亦まけずに亂
 打する。子供は到々我慢が出来ず、これはとてもかなはんと思ふて一生懸命に逃
 げ出した。併し影法師も亦何處迄も踵いて走る。子供は走りに走つて、とある木の
 蔭に至ると、忽然として影なる怪物が消え失せて了つた。ア、宜かつた。これ漸
 く安心したと云ふので、一息ついて頓て家に歸へらうと思ふて歩き出し、其木蔭

を離れると又々件の怪物が現はれて身に從ふので、到々其子は九で狂氣のやう
 になりて家に馳せ歸つたと云ふことであるが、恐らくは世の中に此子供のやう
 なのが決して少くないのであらうと思はれる。斯くの如きはたゞ、無益に自
 分の身心を勞するのみであるから如何に勞しても何等の効果もない。故に楞嚴
 經の中に「動靜の二相了然として生せず」とあつて動も靜も畢竟共に自心現の影
 像にして二種各別の實體のあるべき筈のものではない。此道理を徹見し了れば、
 動の全體が直に是れ靜にして、靜の全體が即動である。自朝至暮、人生に在り人事
 の上に於て無量千差の三業作用を發する上が直に是れ非思量の妙處、身心脱落
 の王三昧にして、運水搬柴、看經禮拜の一舉一動より、苦樂好惡と七轉八倒する其
 まゝが直に是れ寂然不動の行履となり、皆な至道の妙用である。之を釋して無作
 の三昧とも云ふのである。かへすくも動靜の二相に擒はれず、波を見ては直に
 水の本體を知り、影を見ても直に自己なることを了し、動止色空畢竟不二不異の
 妙理を實參實究せられんことを御勸め申す次第である。

唯だ兩邊に滯らば寧ぞ一種を知らんや

兩邊とは前の動止を承けて一切對待の法を云ふたのである。乃ち迷悟の兩邊、凡聖の兩邊、生死涅槃煩惱菩提の兩邊、是非得失の兩邊、すべて二見相對を指して、兩邊とは云ふたのである。一種とは即ち兩邊の反對、洞然明白の妙道、本來無難の至道にして寂然無相の道體を指して云ふたのである。上來已に繰返しく説明に及びたる吾人本來の面目、人々具足の妙心を指したのである。乃ち此二句は上の二句に更に一段の説明を付けられたのであつて、前に云ふごとく動靜共に其實體あることなし、唯だこれ吾人迷妄の見より執する處のものである。それを知らずして、或は有縁を逐ひ、或は空忍に住し、動を認めて靜を希ひ、靜に執着して動を嫌ふ、これ皆な兩邊に滯り、對待の相に偏執するより起るものである。昔兼好法師は、行雲流水の身となり、昨日は東、今日は西、行衛定めず、只管風月を樂しむて到る處に感懐を漏して居られたが、嘗て信州木曾の御坂の邊に庵を結びて暫しが間住んで居られた時、國守が鷹狩りに人數多くを具し到つたので、庵の邊が騒し

かつた、ソコで法師は

こゝもまたうき世なりけりよそ乍ら

思ひしまゝの山里もがな

と詠じて又都へ歸つたと云ふが、心に動靜の二相があつては何處如何なる境地を撰んだとて到底心に契ふ筈はない、自分が自分で動靜の見を捨てなば、どこへ隠れたとてよそながら思ひしまゝの山里がありませうぞ、天桂禪師の歌に

坐禪せば四條五條の橋の上

ゆき來の人を其まゝにみて

と云ふのが、これは大燈國師の

坐禪せば四條五條の橋の上

ゆき來の人を深山木にみて

と咏んだのを見て、これではまだ不可ぬとて、深山木をそのまゝと直したのであると云ふ事であるが、自己の心の中に動靜の二相がなかつたならば、四條五條の雜沓せる橋の上で往き來の人に接し乍らも決してその心を亂すことなく益々

至道の妙用を發揮する様にせねばなりませぬ、されば迷を捨て、悟を求めると
が生死を憎んで涅槃を欣ぶとか云ふ如く、兩邊に滞つて居つては、寧ろ一種を知
らんやとてとも本來の面目を識得して、自由自在の無碍三昧に達することは不
可能である、故に須く止動歸止等の妄情に驅られず、直に一種を見得するやうに
努むる事が肝要である。

一種通せざれば兩處に功を失す

功を失すの功とは功動など、熟字する義ではない、功用の義で、即ちハタラキと
いふ意味である、こゝは前の文を結んで、下の句を起すの文であります、即ち前に
は有無動靜の二邊に滞つて居ては一種の本來面目を知ることが出来ぬと云ふ
ことを述べましたから、一種を知ることが出来なければ、その結果は何うなるか
と云ふ疑問は自然に起つて来るのでありませう、ゆゑにそれに解決を與へて一
種通せざれば兩處に功を失すと申されたのぢや、一種とは何か、これ則ち動靜違
順の相對的妄見に墮在せざる至道の實相を云ふのである、乃て此一種に通達す

ることが出来なければ、兩處共に功用を失却する、動に住し靜に止まる時は兩つ
等ら迷妄たるを免かれぬ、故に兩邊共に何等の功用をも現はすことが出来ぬ、我
々お互が僧堂に入つて坐禪して居る間は成程精神も落ち付いて暫くは動靜の
二相了然として散じ去りて有無の兩邊に涉ることもなからうが、いざ坐を立つ
て一步でも門外に出れば本の空阿彌精神忽ち動亂して曾て坐禪をせぬ先と何
等變はりはない、こんな事ではとても一種の通達は覺束ない、故に動の時は散亂
に涉り靜の時は昏沈に陥り、兩處共に功用を失して居るのである、昔鶻頭龜弗
と云ふものがある、池邊にありて道を究めて居りしに魚の躍るのが妨げとなつ
たので身を轉じて山林に入りしに鳥の啼ぶのが邪魔になつて心が落付かぬ、
乃て吾が修定を妨ぐる者は魚や鳥であるといふので非常に之を憎んだのであ
る、而し坐禪をしたその功德によりて次生には天に生ずることを得たが、頓て天
上の果報が盡きると今度は飛狸といふものに下生したと云ふ、飛狸とは川獺に
狸の生へたやうな動物で魚鳥共に之を食するものである、それな、これ偏へに外
界と絶縁して而して後寂靜を求めたとのみ思ひ、動中即靜の妙理あることを知

らざりによるのである。元來道なる者は平々坦々として萬人の共に往來する處
決して兩邊に滯るべき者にあらず。王陽明が諸生に示せる詩にも
人々有道透長安、坦々平々一直看
とあり又

長安有路極分明、何事幽人曠不行

とあるのも亦此の意を示したるものと見ることが出来る。又或僧が趙州に向て
如何なるか是れ道と問ふたのに對して、趙州は墻外底墻の外にあるわいと云は
れた僧が這箇の道を問ふにあらすと云はれたので、何の道を問ふやと問ひ返さ
れた僧が大道と問ふた時に、大道長安に透ると答へられたと云ふが、これは支那
の話であるから、長安に透ると答へたのであらふが、日本て云へば即ち大道東京
に透る、大道京都に透ると云ふべく、英國であるなら、大道ロンドンに通すと云ふ
べきである。大道は平々坦々たるもので、森羅萬象一として大道に漏るゝものは
無い、而して皆悉く眞如の都會に通達して居るのであるが、兎角人間は此大
道中に在り乍ら大道を踏み違つて邪見の岐路に入り、遂に大道と相距ること遠

ふして遠ふしと云ふ様になるといふは實に嘆げかしき次第である。今此處で兩
處に功を失すと云ふのは、邪見の岐路に迷ふの弊を示されたのである。兩處とは
上の動靜の兩邊のことであるが、その實は一切處一切事と云ふ程の意味に見る
がよい。暫く喩を以て之を云は、吾人が日常使用し居る處の水は最も大切な
もので、一日も無かるべからざる者なるが、さればとて河の中や海の中へ飛び込
むたならば大變忽ち溺れて死んで了ふのであらう。併し溺れて死ぬのを見て水
と云ふ者は甚だ危険である。水は人を殺すと聞いて恐ろしく思ふて之を一滴も
吞なかつたならば如何、其人は又渴して忽ちに死するのであらう。それと同じく
火も亦吾人の日常に缺くべからざる大切なものなるが、火の中に入れば忽ち
焼け死ぬ。又火事を起せば家屋も財寶も皆な消盡する。一番大切な者が一番恐ろ
しいのである。否な水火のみならず、萬事萬端凡て適度に之を用ゆれば功を奏す
るが、過不及があつては却て害になる。故に酒は吞むべく、吞むべからず。時に依
り用ひやうに由つては毒ともなれば藥ともなる。酒は百藥の長とも云ひ、又百毒
の長とも云ふ。此矛盾して居る事柄は双方共に眞理である。これと同じ道理で、動

静不二なる實體に到達せずして、其一方の動に滞つて有縁を逐ひ又静に傾いて空忍に住する時は、兩處共に自由の働きをなすことが出来ぬ。該にも一處透れば、千處萬處と云ふことがあるが、此動静不二唯一無相の道體に達しさへすれば、動にありて動に滞らず、止に在りて止に住することなく、承陽禪師の所謂

水鳥の行くもかへるもあとたえて

されどもみちは忘れざりけり

で行く處として自在無碍ならざるは無く、觸處無難の大道に非ざるはないのである。此境界に到達するにあらざれば、到底眞箇了事底の那人とは申されぬ

有を遣れば有に歸し空に従へば空に背く

遣とは遣除とも熟字して無理無體にトリサルこと、有とは差別の相即ち現象界空とは無差別の體である。

持つ人の相によりてたからとも

あだともなるは黄金なりけり

と皇后陛下の御詠み遊ばされたる如く至道の全體は元來無差別でありますから、たからともあだとも初めより定相はないのである。定相なきが故に因縁力によりては實ともあだともなるのである。若しも其性質が實であるなれば誰が持つてもあだとはならず、若し又初めよりあだときまつたものならば如何なる人の手に入りてもたからとなる氣づかひはない。然るに實とも仇とも定まつた性がないから、或時は實となり、或時は仇ともなる。一心よく萬象を造り、萬象各々苦樂淨穢の相を異にするは、丁度是の如きものである。今此至道は即ち一心の異名であるから、本より有にもあらず、空にもあらず、迷にもあらず、悟にもあらず、故に有ともなり、空ともなり、迷相をも現じ、悟相をも現す、現するまゝが空有の域を超越して居るから、これ真空にして妙有妙有にして真空とも云ふのである。而して此真と云ひ、妙と云ふは二にして而して一にして、而も二なる所以を詮表したものである。即ち有空の各一方に偏せざる妙體を真とも妙とも云ふのである。外道に於て云ふ處の空は單空といふて、何も無いカラになつたこと、即ち虛無落空の空であります。佛法て云ふ處の空は單空でも落空でも無い、森羅萬象ありの

まゝが空なのである。空と云ふ文字は同じ文字なれども、其意味は天地雲泥の相違があるのてありますから、凡て禪書を繕いても、徒らに文字に拘泥しては遂に其真意を了得することは出来ませぬ。天にありては日月星辰地にありては山川草木一切萬物有りのまゝがソツクリ空相であると云ふのである。尙ほ吾人の心性の上について云ふて見ても、心性とは畢竟何物ぞといへば、矢張これぞといふ實體はない。此點からいへば、空相であるが萬法唯識と云つて、一切の森羅萬象は皆な唯心の所現であるとして見れば、宇宙萬象は皆な心性の作用に依つて成立したるものである。此の一切萬物成立と云ふ點からいへば、心性は歴々分明て所謂妙有といはねばならぬ。併しながら其の一切萬物は果して實體ありやと尋ね究めてゆけば、山もとより山にあらず、水もとより水にあらず、法に定相なく物に自性なく一として其實體を認むべきはない。されば有のまゝが直に空である。是れ則ち真空妙有妙有真空の理と云ふのである。此理を徹底大悟して見れば、一切萬事の上にて於て取捨憎愛の二見に墮在することは無い。然るに佛教者は動もすれば此道理を合點せずして、有空の二邊を認め有は迷ひの本と聞けば、忽ち之を

遣除せんと欲するが故に、却て有の見に没入して有の爲めに無繩自縛せらるのぢや、之に反して空に従ふといふて空理にのみ走る時は、其體を執して其用を失ふのであるから、遂には其の體までも味まして行く様になる。即ち空の爲めに却て真空の理に背く様になるのである。元來至道の本體妙用を究むれば、有の有とすべきなく、空の空とすべきがない譯であるから、有空の一邊を認めて居る中は、何うしても外道凡夫の見解に陥入ることを免かれぬ。これを誡められたのが此本文であります。又此二句を有を遣れば有を没し、空に従へば空に背くと讀む説もある。此説に依れば、初めの有を遣れば有は相對の有で、次の有を没するの有は妙有の有と見るのである。又空に従へば、空は相對の空で、空に背くの空は真空である。即ち萬有諸法は迷情の對境なりとして之を遣除する時は、空色是色と云へる妙有を没却して、活動の源を杜き、枯木死灰の人となる。又單空の一方に従ひ去る時は、色即是空と云へる真空に背却して、平等絕對の理を失ひ、散亂妄動の漢となる。といふ意味である。何れに見ても、其歸する處は同一意であるから、敢て差支はなからうと思ふ。要するに妄見妄情によりて有を認め、空を認め、或は有は除

かんと欲し空に住せんと欲せば果然として取捨の念に驅られ遂に至道の本體
 眞空妙有の實相に達することは出来ぬ、空と有とは恰も表裏の如く互に相より
 相融すればこそ空たり有たるの大妙用を現するのである、畢竟有を離れて空な
 く空の外に有はない、有は空あるが故に有たり、空は有あるが故に空たるのであ
 る、之を喻へて云へば晝と夜との如きものであつて、夜は晝に對して夜たり、晝は
 夜に對して晝たるのであつて、若し何れか一方に偏すれば夜とも晝とも云ふこ
 とは出来ぬ、故に承陽大師は直に道ふ本來二物なしと、誰れか知らん徧界會て融
 さいることをと云はれてある、此道理を合點が出来れば森羅萬象有のまゝが空
 にして一切皆空のまゝが森羅萬象でありますから、吾々の一舉手一投足のその
 まゝが無量廣大なる佛の境界となるのである、前に云ふ處の止動歸止云云は今
 此處に仰せられたる御語と同じ意味になるのであつて、有を遣ると云ふのが動
 を止めて空に従ふと云ふのが止に歸すと云ふに相應して居るのである、何故に
 斯くの如く同じ事を手を換へ品をかへて、くどくどしく説かせられたのである
 かと云ふに、これ皆な吾人後學の者をして能く腹の底へしみ渡つてとつくりと

了解せしめんが爲めに、色々文字を換へて説かれたのであるから、古人の大慈大
 悲の旨を察し能く前後對照して見らるゝ様に願ひたい。

多言多慮轉た相應せず

さて前來述べ來つた處で見ると、容易に道の本體に到達することが難いやうで
 あるが、然らば如何にせば道を得べきかといふに決して泰山を挾んで北海を臨
 むるが如きものではない、前段に於ては眞空妙有に達すべきことを示されたが
 徹底眞空妙有に體達すれば、此時始めて身心脱落して、脱落身心となるのである、
 是に至りてこそ相應の分ありと云ふことが出来る、さて此處に至るの道は他な
 し、唯だ自己の閑妄想を裁断することを要とす、多言多慮といふは、閑妄想のこと
 である、至道の體は言語思慮の及ぶ處では無い、言語思慮は道に至るの階梯とな
 る場合もあるが、又道を失ふの賊となることも少なからぬ、眞參實究するには是非
 一度は妄想の窩窟を打破せねばならぬ、故に達磨大師も外諸縁を息め、内心備く
 ことなく心牆壁の如くにして、以て道に入るべしと云はれてある、雲門大師は若

し此事を論せば言句上に在らず若し言句上に在らば三乘十二分教豈に是れ言句ならざらんやと云はれてあるが徒らに言句に涉り多慮を廻らしそれに拘泥し去りては愈々ますます迷ひに迷ひを重ねるのみであつていつまでも大道と相應することはないのである。偈歌にも

思ひ出す様ぢや惚れやうがうすい

思ひ出さず忘れず

とありますが歌は単しく言葉は餘り露骨に過ぎて居るか知らぬが其意味は實によく實情を現はして居る熱するものはさめ易して口で彼れこれ説明したり心で何んだ彼んだと考へておる中は決して眞の妙味は解せられぬ吉原の名妓といはれた高尾が仙臺公に送つた手紙に

「……………忘れねばこそ思ひ出さず候」

と云ふ句があるそうだが全く其通りて吾人の心情は到底文字や言句で云ひ現せるものでも無い忘と不忘との境を超て居る況や眞空妙有の至道に於ておや

絶言絶慮處として通せざる無し

弁此二句は上の二句の反對で大道現前の要訣を示されたものである。諺にも言はぬは言ふにいや勝ると云ふ語がありますが智情意ともに其極處に至ると言慮を超絶して居るものです。絶言絶慮と云ふは妄想打破の境界である。妄想一度断すれば處として通せざるはなして眞の活言語活智見が現前して自己と大道とが函蓋相應するものである。併し絶言絶慮と云ふ文字に掬はれて断滅の見を起してはならぬ。絶言絶慮と云ふは前の多言多慮を裁断し盡したる消息といふので、ツマリ兀然端座安住不動の地を指すのである。強ちに無言無心の木石の如くになれと言ふのではない。故に承陽大師は言語道断は一切の言語是れなり心行處滅は一切の心行是れなりとも言はれてある。今茲に云ふ處の絶言絶慮とは一切の言慮を離れよとのみ云ふのではなく、言語文字の其儘が閑妄想に涉汚せざるの謂である。故に絶言絶慮とは決して言語慮知を捨てよと云ふに非ずして言語慮知がツツクリ大道に融合したる端的です。古人の語に「悟の前の善悪は

善惡俱に悟なり迷の前の善惡は善惡共に迷なりとあるが悟つた人の前には一切萬象一々至道の光明となり迷ふた人の前には言語動作が皆な妄想の窩窟となる故に吾人は先づ其精神を安らかに調へて一切の境界に對する繫縛を脱すること肝要である。繫縛を離るゝには無常觀に住するのが捷徑である。故に承陽大師は學道用心集に於て無常觀を示して「無常を觀するの時吾我の念生せず名利の念起らずと云ひ又縦ひ緊那迦陵讚嘆の音聲を聞くとも夕の風耳を拂ひ縦ひ毛墻西施微妙の容顏を見るとも朝の露眼を遮ぎるとも仰せられてある如く世間一切の相は凡て是れ無常にして一物の執すべき無しと確認して吾我名利の妄心を離るればそれが即ち眞實の菩提心である。大涅槃を得るの種子である。此無常觀は決して世間を厭ひ捨て、空忍に住するといふのではなくて、此觀念の力に依りて心を眞空の妙境に遊ばしむるのである。故に其究竟に至つては有常に對するの無常にあらずして絶對の無常である。今云ふ絶言絶慮といふも此絶對の境を指したのである。苟も心念の繫縛を離れてさへ了へば言説の相も心縁の相もそのまゝが不染汚無罣礙であるから一切の言語が即ち無舌人の解

語であり、一切の思量が其儘に非思量となるのであるから、事々物々上寝るも起きるも喫茶喫飯も、一として名利吾我の染汚を受くることなく、千處萬處總て至道に通達無碍にして、佛陀大覺の境界に相應するのである。

根に歸すれば旨を得照に隨へば宗を失す

根とは吾人の心源、一切萬物の根源を指したのである。照とは眼耳鼻舌身意の六根が色聲香味觸法の六境に對して種々の分別を生ずる事を云ふたのである。即ち心外に法を見て萬境を照して思惟計較して止まざるを照と云ふたのである。至道の本體を知らんと欲せば、須く其根源に歸して工夫することか肝要である。乃ち回光返照して自己の心地を究辨することである。されば旨を得るて旨とは玄旨即ち至道のことである。之に反して照に隨ふといふて徒らに有縁を逐ふて其根源を忘却せば宗を失すて却て至道の宗を失ふて遂に出頭に分は無いのである。喩へて云へば根は根源て樹木の根の様なもの、照は萬境て其枝葉の如きものである。其樹木を培養せんと思ふには先づ其根を調へることが大切である。

千枝萬葉と繁茂するものも皆な一の根源より出づ根本を涵養してこそ始めて枝葉も活々として來るのである枝葉は千態萬狀で枝々葉々一として同じからず彼の枝と此枝此の葉と彼の葉と各々差別して居る其差別せる葉や枝の一を取つて之が柿の木の全體である之が栗の木全體であると言ふたならば誰も笑らはざるに居るまい世間普通の學問でいふても皆な枝葉の一片兩片を取つて居るのであるから決して宇宙の真理自己の本性を識得することが出來ぬ昔鏡面王といへる國王があつて多くの盲人を集めて大象をなてさせさて象は如何なるものであるかと盲人に向ひて問はれた然るに其耳を捕へたものは象は箕の如きものであると云ひ其足を捕へたものは石臼の如しと云ひ尾を握つたものは箒の様であると云ひ而して其の腹に觸れたものは大鼓のやうなと云ひ背を撫た者は丘の如しと云ふたさうぢやこれ等は何れも自分の手に觸れた處だけて象を解釋したのであつて象の全體を見ることが出來なかつたのである象其ものは決して箕の様でもなく箒の様でも大鼓のやうでも無い併し象の全體を徹見してそれより一部分に就ていふたならば箒に似た部分もあらふし大鼓

に似た部分もあらふ吾々お互が至道の全體を了せずして徒らに差別の相に迷ふも亦是の如くである所謂照に從ふて耳目にふれたものをのみ目的として周遍法界の理を體せぬから遂に宗を失するのである世の中の人は何事に付けても多くは此類では無からうかと思はる管に枝葉の詮索にのみ涉りて其根源に著眼することを忘れては禮儀も虚禮となり莊飾も虚飾となり佛教の上からいふても一宗一派に偏執して佛教全體に通ずる大精神を知らぬやうては盲人象を摸するの誦りを免かれぬ心地觀經の中に我佛法の中には心を以て主と爲す一切の諸法心に由らざるはなしと説てあるが心は宇宙の大真理佛教の大精神ぢや故に宜しく至道の全體所謂大真理大精神を開悟せねばならぬ吾人各自の心源に立返つて工夫一番せば直に萬法を諦めて開悟を得るものである根に歸すれば旨を得ると云ふたはこゝである旨と云ひ宗と云ふのは宗旨と云ふ文字を分けて用いたまでの事であるから唯だ佛教の大精神といふことである然れば吾人各自の心源を忘却して目前萬境を逐ふて迷惑し去りては何時まで經つても開悟を得られよう筈のないことは自明の理である併し得ると云ふたからと

ても本より無いものを拾ふて得るといふのではなく、本來具有の本心自性を發現するに外ならぬ、何となれば、至道の本體なるものは、宇宙に充滿し吾れ人共に一絲毫をも缺かぬのであるから、決して外よりこれを得るのではない、故に若し外に向つて之を求めんとすれば却つて、宗を失すて其道を失ふことになるのである。

須臾も返照せば前空に勝却す

これは前の句に續いて工夫の必要を示されたのである、前句に照に隨へば宗を失すと云ふてある、照とは差別の相を緣する心念の作用である、故に其照に隨ふからいけぬ、さればとて心念の作用を離れよといふのではない、唯だ其照を返すのが禪門の工夫の骨目である、須臾とは中庸の中に道は須臾も離るべからず、離るべきは道に非すとあるが、須臾とは時間の極く短少なるを云ふのである、僧偈律には、二十念を一瞬となす、二十瞬を一彈指と云ふ、二十彈指を一羅預と云ひ、二十羅預を一須臾といふてある、兎に角、須臾とは、シバラクといふ義で、僅かの時間

を指して云ふたのである、照とは吾々の意識が前境を逐ふて、分別を恣にするのが照であるから、その照を引き戻して工夫を下すのが返照である、即ち花に對しては美しいと感じ、糸竹管絃の音を聞ては面白くと感ずる心を返して、かく思慮分別するものは何物であるかと、自己の本心に立ち返つて詮議して見るがよい、是れ則ち回光返照の退歩である、或は返照を返り照すとも見る、此時は照は觀照工夫の義となり、ます、前空とは夜塘水には前頭の頑空を指すのであるといふてある、されば目前の空と云ふ義ではなくて、前にあつた空に隨へば、の空即ち單空頑空の事、所謂色外の空である、これは前にも云ひたるが如く、色に對する偏空て、即ち對待の空であるから、真空妙有の空とは天地懸隔である、勝却の却の字は助字ぢや、勝とは過なりと註して、マサルとかスグイルとかいふ意味である、元來吾々の六識なるものが前境に對して妄りに分別するからして、爲めに無量の煩惱を生ずるに至るのぢや、然るに返照し去る時は、自づと本心に立返りて、自性清淨の妙心を體得することか出来るに依て、一切の煩惱は自づと消滅するのぢや、此時色空不二の妙境に安住するを以て、毫も對待の見は無、此時こそ真空の體

前空を現成するに依りて前頭の單空に勝ること萬々である、兎角に凡夫は六識を以て六境を分別して暫くも安心の分がない、而して此分別を離却して一切諸法は皆空であると信するも空の偏見に隨しては失張外道の見地である、故に一切諸法を分別し思量する底の物は果して何物ぞと工夫して直下に思量分別する根本の主人公を探究したならば、これが其根本であると云つて把握すべき實體はない、善なり惡なり是なり非なりと思惟して居る所のものは皆な是れ自己の妄分別より出生し來つたものである、此處に至れば已に其分別する所のものが畢竟無自性不可得なるが故に會て分別せられたる萬法其まゝが直下に空である、而して此空たるや妙有即真空差別即平等の空にして般若心經に所謂色即是空、空即是色の端的である、されば前の斷無の見、頑空の見とは天地も雷なりと相違であるから、勝脚と云ふたのである、故にたとひ僅の間たりとも返照と云ふことが至道顯現の要術であつて、修養上最も肝要でありまゝ、其返照は如何にせば出來るか、と云へば坐禪辨道が第一である、坐禪の結果萬法一心の理に歸するの時節に至れば、此身此儘が真空の妙理に契當するのである、その時こそは花

の散るは散るにまかせて諸法常住鳥鳴けば鳴くがまゝに實相の妙法で、吾人の一舉一動一進一退がソツグリ虚空の往來となる、これを鳥道とも玄路とも云ふのである。

前空の轉變は皆な妄現に由る

前空とは上に述べたる處の偏眞の空である、即ち色外に向つて求むる處であるから所謂枯木死灰的の空である、吾人は動もすれば色といへば差別の相を執し、空といへば萬物の効用を失却す、故に兩頭共に不是である、此の如きは皆な對待の妄見に依りて生じたるものなれば色といへば迷惑に墮し、空といへば佛徳を損害し、イッ迄たつても中道實相の功德を現はすことが出來ぬ、故に此等の空は儼かに眞理の半面を認めて居るのであるから、轉變を免かれぬ、ナゼと云に皆な妄現に由る、妄現の所現なるからである、元來諸法の本體を究むれば有にもあらざる空にもあらざるものである、有と思ふのも妄現、空と思ふのも妄現である、妄現とは妄想から現はれて來たことをいふ、已に妄想から現はれるのであるから

勿論正見で無い、縦ひ幾多の公案を透破し去るとも、妄想の活計たることを免れぬ正見でないから佛知見とは違ふして遠いぢや、若し佛知見を發開せざれば空有の邊を離れることは出来ぬ、空有の二途に彷徨して居る中は、何時までも至道の本體に達著することは六ヶしいのである。

眞を求むることを用ひざれ唯だ須く見を止むべし

眞とは眞實、マコト、所謂至道即ち眞理を指したのである、見とは妄想の見解を云ふ、即ち吾人の分別心である、天地の間にありとあらゆる一切諸法は皆なこれ自心現の法で本具の妙心によつて現はれ來た處のものであつて眞垣に句ふ白露を命の朝靨も霜を胃して千代の香を含める芳はしき黄菊白菊も元々たる頑石も洋々たる海水も觀來れば眞理の露現妙法の脱體現成にあらざるはない。

春は花夏ほととぎす秋は月

冬雪さへて冷しかりけり

とは承陽大師が本來の面目を詠ませられた御歌であります、實に月雪花をな

がめ面白き景色も皆な本來の面目、無相の實相を現はして居る此實相を看破し去らば眞理と云ふもこの外にはないのである、されば同大師は法華經と題して

峯のいろ溪の響もみなながら

釋迦牟尼佛の聲と姿と

とも詠ませられてある、我等日常頭々上見聞上に於て妄りに眞妄を隔て、迷悟を執し眞は取るべし妄は捨つべし、悟は求むべし迷は断すべしなど、取捨し憎愛すべきものは畢竟して無いのである、千態萬様の一切諸法が其まゝ、即ち實相の妙體であるからである、故に承陽大師は諸法實相の卷に實相は諸法なり諸法は如是相なり、如是性なり、如是身なり、如是心なり、如是世界なり、如是雲雨なり、如是行住坐臥なり、如是憂喜動靜なりと仰せられてあります、和泉式部の歌にも

法の華やまきばかりに限らめや

松竹さくら當意即妙

とあるごとく、事々物々皆な眞如一實相にあらざるはないのである、されば外に向つて別に此の何物をか求むべきや、元來別に求むべき眞理はないのです、之を

求めずとも真理は天地の間に周遍し吾人は常に此真理の中に生々化々して居るのであるが凡夫の悲しさ容易に之を確信し體認することが出来ないからいよく妄想分別を逞ふして真といへば真に執し妄と云へば妄に迷ひ遂には生死涅槃等の二相に着して騒ぎ廻はり煩惱菩提迷悟得失の影を捉へて嫌擇の見を起すから遂に眞智を開發すること能はず迷に迷を重ねて永く苦海の沈淪を勝することが出来ぬのであるこれ等は畢竟本來一如平等の法の上に於て二相分別の見を立てるからである一旦此の見を止めさへすれば求めずしても真理至道は我々の目の前に現前するのである喉へば水中に在り乍ら頻りに渴を呼ぶが如きものであります水は元來自分の前後左右に充滿して居るから渴したならば寸歩を移さず直に口を開いて呑めば飲まれるのであるのに水が欲しいと叫ぶと呼ぶのは何たる愚味ぞや故に眞を求むることを用ゐざれば唯だ須く見を息むべしと誡められたのである勿論此二句は丁寧に示されたので其實見を息めれば眞即ち現前すること暗去と明來と同時になるが如し故に眞を求むると云ふ様な事は自然ない筈である眞を求め様ともせず妄を除かふともせず眞妄

兩つながら脱落ちや一寸考へると妄想を除きて眞を求むると云ふのが修行の順序の如くなれども一たび至道に接觸すれば法界平等なるを以て元來求むべき眞なく立すべき見もあらふ筈がないのであるこれあるが如く思はるゝは皆な己れが妄見より生ずる開影像である故に分別の根元たる妄見を離れるのが禪觀の第一歩であるから永嘉大師は證道歌の中に絶學無爲の閑道人妄想を除かず眞を求めず無明の實性即佛性幻化の空身即法身と云ひ圓覺經には諸有の所見は皆な是れ邪見なり一切の見なき即ち正見なりと云ふてあるが萬法一如の妙體に到達し去れば當處に求むべき眞も息むべき妄も自ら廓然としてなくなる次第である

二見に住せず慎んで追尋すること勿れ

二見とは順逆得失是非等の如き二物對待の見解であつて之れが一切煩惱の淵源である故に吾人にして若し此二見の相對に隨在して眞を求め妄を除かんとして居る間は決して正知正見を開くことが出来ぬ故によく此處へ注意し

て二見に住することなく、慕然として二見を打破せねばならぬ。然るに吾人の多くは二見の中に滞つて、而も開悟の道を得んと欲し、徒らに工夫を費して追ひ廻はり尋ね歩いて居るから、至道に達着することが出来ぬのである。このことは前幾度か、繰り返して説明した通りぢや、眞によく二見を超脱してさへ了へば、これこそ眞個無爲の道人であつて、佛法了畢の人と云ふべきである。併し二見を超脱すと云へばとて、二見を嫌厭して無見の人となるのではない。眞如一實の妙理に融合し去れば、現象差別のまゝがソツク、ソツク、超絶脱落であるのである。若し二見を恐れ嫌ふに於ては、二見を離るゝといふのも亦二見たるを免れぬ。

纒かに是非有れば紛然として心を失す

是非とは即ち對待の相に對する執見ぢや、此文字は憎愛から出て居るので、此是非の二字の中に違順取捨憎愛嫌擇等總ての對待の妄見妄想を含んで居るのである。紛然とは物の亂れて錯然として入り混つたる状態、不整理不調和なることを云ふたものぢや、元來紛の字は紛紜など、熟字して糸の亂れたる状態である。凡そ

吾々本具の妙心は佛にありても増さず、衆生にありても減せず、普く法界に充滿し超然として是非善惡の相を絶す、法々位に住するまゝが平等一實の道である。之を其まゝに見得して分別の妄見を立せざれば、吾々が月用光中の運作轉動も皆な妙心の光明至道の妙用である。然るに吾々はその實相を了すること能はず、妄りに是非の念想を起すに依つて、それから夫れへと妄想の範圍は次第々々に推し擴められ、顛倒の見、邪曲の念、至らざる所なく、恰も麻絲の亂れたかの様になり、何が何やらサツ、ハツと譯が分らぬ様に迷ひ込んで了い、遂には本來圓滿に具足せる本心をも取り失ふてその本心あることすら知らぬ様になつたのである。密嚴經に「海水の風に撃たれて波の停まることなきが如く、境風吹き來れば識浪の生ずること海水の風に於けるが如し、地に差別なきも庶物の異なるが如く、識藏も又爾り、内心に境を現して還りて自ら縁するなり」とあり、また古歌にも

心から心にもを思はせて

迷ひ易きは心なりけり

とある如く、是非すべきなきに向つて是非し妄想すべきなきに向つて妄想する

は凡夫の常情であるから、遂に紛然として本心を失却するに至るのである。さき
 に「毫釐も差あれば天地懸かに隔るとありました」と句と對照して見るが宜い。喩へ
 ば、大海の澄み渡つて居る時には、森羅萬象影鮮かに相映じて、少しも味す所は
 ない。少しも風が加はつて、纔かに一小波を起すと、それに引きついで千波萬
 波が續々競ひ起つて、今まで鏡のやうに明淨であつた海原の景色、忽ち消え失せ
 て了ふ様なもので、吾人の心海も亦是の如く僅かなりとも是非の波が起れば、今
 まで明かであつた妙心の徳は消え失せて、三界六道競ひ現はれ、悲しい哉。本來明
 淨の面目を失却し去るのである。故に修行の第一歩としては、先づ是非分別の妄
 念を一掃することが必要である。善惡共に離れ、生佛共に眠絶せしむべき。ちや朝
 晩座敷の掃除をするにしても、悪いところの塵埃を拂ふ爲めの掃除であるから、
 塵埃を掃き出すは當然ぢやが、これと同時に必要な道具までも一度は室外に出
 さねば奇麗に掃除することは出来ぬものぢや。心地上の修行も之と同じく善惡
 共に一度は放下し去らねばならぬ。若しこれは是であるから留めて置く、これは
 非であるから拂ひ除かうと云ふ様に、纔でも是非の見解を起して、取捨に勞する

時は必ずや至道を隔つること千里萬里も香ならず、本心妙有の月は雲深く閉ざ
 れて、ドコ迄いつても之を證得して大安心を得ることは出来ぬ。

二は一に由りて有り、一も亦守ること莫れ

前には憎愛と云ひ順逆と云ひ、或は揀擇或は動止、又は得失だの是非だのと色々
 の語を用ひて説いたが、要するに相對的にして萬有諸法の相を執するの妄情を
 滅めた者である。此相對的萬有諸法は元來何に由りて生じたか、其根源畢竟如何
 と尋究して見れば、他なし、法界平等の一實眞理より現はれたのである。これを他
 語を假りて云へば、大道より天地を生じ、天地より萬物を生じ、遂に千態萬狀の相
 を見るに至つたのであるが、然らば其根源の大道とは何であるかと云ふに前に
 二種平懷なればとある。其の一種であつて、強いて名くれば、本有の妙心とも云ふ
 べきものである。此一種の本有妙心が、天真無作の妙用として、千種萬態の諸法と
 なること水の波を生ずるが如くであるから、波に差別の相ありと雖、そのまゝツ
 ックリ同一水性であるが如く、萬象相違なるも、其根源は二もなく亦三もなく只

だ一種である故に其異なりて居るが如く思はるゝ萬法の假相に迷ふてはならぬ善と云ひ悪と云ひ迷と云ひ悟と云ふも共に一時の假名にして天地人生の間には畢竟して絶対の善絶対の悪と執すべきものもなく善は悪に由つて其名を立し悪は善に對して假りに設けられたる名に外ならぬ故に道德とか知識とか云ふても亦た一時の假名に過ぎぬ古歌に

手を打てば下女は茶をくむ鳥はたつ

魚はよりくる猿澤の池

と云ふのがあるが手を打つ人に於ては別段に色々と區別せる心がある譯ではないにしても之をきく者の心は皆な格別ぢや茶屋の下女は茶の催促かと思ふて茶をくんで来る鳥は追はれたのであるかと思ひ恐れて逃げ出す魚は餌でもくれるかと思ふて寄つて来るこれ差別せる現象界の因縁生起の様子を詠むたのぢや而して其根源はボン／＼といふ一の手の響に過ぎぬ即ち根本の一には切捨憎愛の別は立たぬされど因縁生起して萬法と現はれるに及んで善惡となり邪正となり迷悟凡聖といろ／＼に分れて来るのである故に此一實相の端的

は善惡を超絶して更に名くべきは無いソコを趙州禪師は萬法歸一と云ひ承陽大師は一心一切法一切法一心なりと是心是物の卷に示されてあるのぢやかく萬法は凡て一實真如に由て生じた者であるとすれば一にして一に非ず異にして異に非ざるを以て其一も亦守ること莫れて一と云ふ名に執着してはならぬ何故かと云ふに一と云ふも萬法差別の現象に對して假りに名けたので本より絶待の一にして萬法の外に一なるものあるに非ず畢竟無自性の妙心であるからこれぞ一なりと把握すべきものはないのである多くの學者は萬法一に歸し一萬法を生ずと云ふの語を執して専ら其の一を珍重し遂に一の名に迷ふて一の實相を忘るゝに至る之を知見の上からすれば空見平等觀の偏に墮在す之を修行地の上にもつてゆけば厭世若くは自調解脱の死漢となるコゝが實に六ヶしい處ぢや。

一心生ぜざれば萬法咎無し

二は一によりて生ずるのであるが其一も亦守つてはならぬとは前句の垂誡ぢ

や、ツマツ、二と一との隔歴を断じ、妄分別を超越した處を一心不生といふのである。併し故らに一心を鎮定して而して後不生に至るものと思ふてはならぬ、一心は元來不生なのである。此一心の本面目を現前したるのが不生の境界ぢや、此時こそは萬法皆なして取捨憎愛の起るべき筈はない、萬法はこれ唯一心の所現にして一心の外に諸法なしと云ふことは今更云ふまでもなく、佛家の常套語である。然るに其一心が本來不生であれば萬法も亦素より不生である、不生といふても空見に墮ちてはならぬ、萬有諸法は一心の光明片々ぢや、

そめいだす人はなけれどおのづから

やなぎはみどり花は紅

而して其儘が善惡を超越迷悟を遠離して居ることを徹見せねばならぬ、柳の縁なるは天然に縁にして花の紅なるは自然に紅なのである、其紅と云ひ縁といふも敢えて柳の方から我は縁なりと申し出た譯でもなければ花の方から我は紅なりと名乗つた筈のものでなく、皆人間の思想を以て手前勝手につけた符牒に過ぎぬ、即ち紅と云ひ縁と云ふも本來絶對無差の一心から生じた現象、差心の妙

徳妙用ぢや、されば一心と萬法と一に非ず二にあらず、差別とも極めることが出来ず平等とも断ずること能はず、萬法其まゝの中道實相ぢや、盡天盡地佛法ならざるはなく、真如ならざるは無い、一切の善惡ともなる、迷悟は悉く分別の影像ぢや、彼の柳下惠は佻を嘗めて以て老を養ふべしとなし、その兄弟なる盜跖は之を以て盜賊を働くの道具にせんとて工夫したと云ふ、佻其物にありては善惡は無いが之を用ゆる人に依つて一は藥となり一は害となる、一心不生の眞面目現前せば萬法齊しく至道の露現である、悲しい哉、凡夫は妄分別の爲めに碍えられて至道の中に在り乍ら至道に辜負して居る、一大事因縁といふは至道の自覺なることを知らねばならぬ、

答無れば法無く生ぜざれば心ならず

この二句は上の意を承けて更に一段の説明を加へたのである、即ち一心生ぜざれば萬法本來答のあるべき筈がない、答なしとすれば萬法そのまゝ唯一の至道である、換言すれば萬法即佛法である、法界一佛法とすれば佛法以外に別に萬法

は無い、これを無法といふ、一心といふ名は萬法に對して假りに名けたのであるから、即ち相對の名にして絶待の上からいへば心といふ名も無く相も無い是を不生といふ、已に不生であれば本より是れが心であるなど、云ふて把握すべきは無いから心即不心である、換言すれば一心は萬法に依つて一心である、萬法は一心に依つて萬法である、斯の如く兩々相對した上に出來た假名であるから萬法そのまゝが無法であると、同時に一心のそのまゝが無心である、此理が徹底すれば自己ならざる萬法なく萬法の一々が自己の光明の片々ぢや、コ、の處を

聞くまゝにまた心なき身にすれば

おのれなりけり軒の玉水

と承陽大師は言はれてある、古の龍山和尚が、兩個の泥牛闘つて海に入り直に如今に到つて消息なしと云はれたのも亦此意に外ならぬ、萬法と吾との對待の見がなければ萬法と一心も共にありのまゝがありつぶれとなつて了ふ、此ありつぶれとなつた境界に達すれば萬法の一々が解脱無礙の妙徳を現はし、一心の念不生の妙理に證契するのであります、されば吾々は先づ以て一切の諸法は盡

く是れ解脱の法身佛吾人の前念後念は總に是れ般若の智光なることを認識するが宜い。

能は境に隨つて滅し境は能を逐ふて沈す

こゝは前の「各なければ法無く生ぜざれば心ならず」との二句を承けて説明の歩を進めたのである、能とは能照の智で心のこと、境とは所照の法で外境界たる萬有諸法をいふ、前にある一心は能て萬法は境である、滅すといひ沈すと云ふは何れも消滅するの意味である、能と境とは如何なる關係を有するやといふに能境畢竟不離である、能あればこそ境あり、境あればこそ能あり、共に相由て相離れぬ故に能と境と單獨では成り立たぬ、萬法と云へば何にか一心の外にあるやうに考へらるゝが、それは間違つた見知である、前回にも已に辯せしが如く一切の諸法は心外に在りて我を欺くもの、我を迷はすものと心得て居たのは誤りて、正知見を以て見れば諸法は實にそのまゝが佛身佛行を行して居るのである、故に釋尊は成道の曉に有情非情同時成道と仰せられた、有情も非情も天地法界を擧げて

本來成佛の姿である。然るに凡夫は妄情の計度に依て、一心に我を執し萬法に實を認むる所から能の境のと相分かれて遂に妄想世界を建立するのである。故に一心即空寂なりと明らむれば能と境との分界はつかぬ。能即境境即能であるから能を離れて境なく境の外に能は無い。已に能境の別か起らねば自然に能境兩つ乍ら泯滅して法界一佛法の理が現はるゝのである。併し泯滅すと云ふても今まであつたものを無くして了ふことではない。能境ありと執するのが元來妄想妄見であるから其妄想妄見の分別を解脱すればそのまゝ平等一味ぢや、此理を諦觀する時は如何に艶麗へ難き色を見ても如何程微妙比するに物なき絲竹の音聲を聞くも、其れが爲めに我が精神を染汚される様な事がなくなる。聲色其まゝが無差別平等の功德相である。彼の赤い電氣や白い電氣があつても、もとはと云へば同一電氣の作用に外ならぬと同じく能も境も一心の影像で別物は無いのである。故に境滅すれば能滅し能滅すれば境滅す能境不二であるから、其一が滅して他の一のみ存して居ると云ふことはないものである。乃て能が滅すれば境も隨て滅し境がなくなれば能も亦それを逐ふて沈没してなくなつて了ふ

ぞと仰せられたのである。

境は能に由つて境たり能は境つて能たり

龍の二句は能境一枚で同時に泯滅して真空に歸するの旨を明されたのぢや、ツマリ向上門、掃蕩門の教である。今此の二句は真空より妙有を現することを云はれたので則ち向下門、建立門の教である。併し真空も妙有と一體の兩面たるに過ぎないのであるからして前句に示せる沈滅の理が已に了解りさへすれば、此句に於ける建立門頭の説も勢ひ明らかになる。能境と云ふことは佛教に於て普通に用ゆる言葉で能とは自己である自己が能く物を見たり能く聲を聞いたりして萬法を緣するに依りて能と稱す。故に之を心とも云ふ。境とは自己の相手乃ち開れる聲見られる色等の外境を總稱したるものぢや。故にこれを所とも云ふ。ソコデ或は能境或は心境或は能所など云ふが意味は同じぢや。此の二は元より相對的の法であるから決して獨立すべきものではない。境には善惡苦樂美醜等千態萬狀なるも畢竟こちらの分別心に依つて別れるのであるから若し能緣の心

が無ければ善悪も苦樂も美醜も有るべき筈が無い故に境は能に依つて始めて境たる事が出来る所謂一心即萬法であるのちや又境を離れたならば善悪苦樂を分別すべき能は無い色なければ眼識は立たぬ聲が無ければ耳識は無い左すれば境の外に能なく法の外に心はない此の意を境は能に由つて境たり能は境に由つて能たりと云ふたのである要するに能境の二は各獨立して成立する者ではない能境元來二にして一にして二相由つて現成し相共に沈滅するものである吾々御互が知識情欲のあるのはツマリ六根が六境に對しての作用であるから六根の二々を捨てしへば六境の二々も亦残らぬ地獄極樂と云ふ境界もこち山に能分別の心がなかつたなら何に依つて生ずることを得んやちや故に若し六根の能作用を全妄すれば同時に能境の二相の認むべきはないである前句に云ふ處の能境沈滅とは回互の端的と云ふたので此句に於て能境の現成を云ふてあるのは不回互の端的を云ふたのであるされば能と境とは回互にして不回互不回互にして回互の妙を有して居る且つ夫れ能境ともに互に能たり境たるものであつて一を能とし他を境とするは只だ是れ立場の相違によりて

起るのである此方て能とするものは彼にありては境彼の能とするものは此方て見れば境となる雪月花鳥は成程吾人より見れば境であるが雪月花鳥の方から云へば吾人が却て其の境となるのである故に萬有諸法の全體が盡く是れ能なり境なりぢや乃ち能境即ち一枚にして喩へば一紙の表裏の如きものであると云ふことを忘れてはならぬ

兩段を知らんと欲せば元是れ一空

兩段とは前の能境を指して一切差別の諸法を總攝した語ぢや吾人は差別の諸法に對して其實相を究尋すること能はず徒らに其假相に貪着して種々の煩惱を起し種々の罪業を重ねるのちや是れ畢竟萬有諸法の實相を了知せぬからである然らば其實相如何と諦視するに元と之れ一空て本來無一物ぢや一空と云ふたからとて空と云ふ一物があるのではない差別即平等の本性を示されたのである凡そ凡夫の迷妄なるものは皆な兩段即ち差別の假相に貪着する所から起るのである兩段の實相を知つて了へば本來一佛性一乘法ぢや然らば空とは

何ぞやといふに、或人は空の三儀を説いたが當らずと雖も、遠からざるの説ぢや、其の一は圓融の義で能は境に由てあり、境は能に由つてある、互に圓融無碍なるが故に能も能にあらす境も境に非ず、能境共に平等一如である、第二に不染汚の義で一切の法は元來解脱の妙相ぢや、山の高き海の深きそのまゝが大解脱ぢや、善悪苦樂の相に執着して繫縛さるゝは繫縛さるゝもの、各々である、法には本より各はない、第三は無罣礙の義と云ふて能の外に境なく、境の外に能なければ能が境を碍へることなく、境が能に障りをなすこともない、畢竟兩者共に圓通無碍である、至道は本來圓滿融通して無欠無餘なるを以て染汚せらるべきはない、不染汚であるから善悪苦樂の相は立たぬ、萬法唯一心一至道である、されば至る處大道にして些の障碍もない、障碍がないから一切衆生は法爾として大道の中に在りて、自由に活動し自在に進退して居るのである、故に至道といふと雖も決して他にあるのではない、乃ち人々の具有せる本心の全體大用である、斯くの如く圓滿にして欠くことなく、不染汚にして障碍なき空であるから、或時は能となり又或時は境となりて、千態萬狀無礙自在である、而して能境共に不染汚なるを以

て能は必ずしも能に非ず、境は必ずしも境にあらず、そのまゝ遍法界の獨尊佛ぢや、之れを稱して天地一枚の境界とも云ふのである、故に能の實相を知り境の本體を知らんと欲せば、能も境も元これ一空なりと徹證し去るべきである。

一空は兩に同じ、齊しく萬象を含む

先きに兩段元來一空なることを示されたが、其一空といふ語に取りついで斷無の遍空なりと邪思惟するものがあつてはならぬので、茲に折り返して一空の説明である、即ち一空とは前に已に述べた加く差別即平等の理體取りも直さず諸法眞實の相にして斷無の空では無い、空體は始終一貫して不變不易ではあるが、空なるが故に無碍であつて因縁に依つて生起する一切諸法の變幻起滅を妨げぬ、換言すれば空なるが故に諸の色を現じて受用不盡である、コ、を一空は兩に同じと示されたのである、同じといふは一如の義ぢや、一と二とが一如であるのぢや、之を悟れば即ち聖之に迷へば即ち凡、凡と聖とは同じからすと雖も、其の不同のまゝがこれ一空平等ぢや、故に此の空中に一切萬法は自づと含攝せられて

あるのである。これが所謂一心即萬法萬法即一心である。此道理は何人と雖も疑
 を入るべき餘地はない。眞理は斯くの如くして一點の疑ふべき處は無いのであ
 るが、凡夫の悲しさには中々此不疑に至ることが六ヶしいのぢや疑ふべき者の
 なき處に向つて自ら疑心暗鬼を生じて此理に迷ふのである。されば古人も天地
 と我と同根萬物と我と一體にして微塵はがりも別の物なし、溪の聲も風の音も
 主人公の聲なり、松の青さも雪の白さも主人公の色なり、我が手を擧げ足を動か
 し、色を見聲を聞くものと全く別ならずといふてある。要するに兩段と一空とは
 水と波との如くにして體と用との關係に外ならぬ。故に一空は即ち兩段である
 一空の中に齊しく萬象を含んで居ることは、さながら鏡中に影像の幻出するが如
 く影像そのまゝが一面の古鏡である。

精粗を見ず寧ろ偏黨有らんや

精とはクワシと訓じ、粗はアラシと訓す故に精とは些の雜り氣もなく恰も米を
 つき上げてすつかり殻を棄て粕を去つて青白米になりしが如きをいふ法華に

唯だ此の一事のみ實にして餘の二は則ち眞に非すとある通り一切の迷妄を棄
 却した眞實の妙法を精といふ。此銘では前の一空と同一に見ても宜い。粗は粗略
 粗雜など、熟字して苦樂迷悟の雜然たる諸法の相に名く故に前句の兩の字に
 當る。或は之を眞法と假法平等と差別と見ても差支は無い。尙ほ一段下つて言へ
 ば順逆とか善惡とは優劣とか云ふ程の氣とも見られる。此精と云ひ粗と云ふも
 前に述べたる通り畢竟體用の關係であつて、體用一如なることを了すれば體と
 いひ用といふも同一物の兩方面に過ぎぬのであるから、若し體と用とを二物と
 して見たならば獨り本體の味きのみならず、其の妙用をも失却するに至るもの
 ぢや。故に精粗を隔て、見るのは一種の妄見であることは今更云ふを要せぬ。次
 第である見ぬと云ふのも根本より論ずれば己に第二第三で元來精だの粗だの
 といふことは見やうとしても見らるべき者ではないからである。次に寧ろ偏黨
 あらんやといふは、偏とはカクヨルこと、黨とはクミスルことと何れも一方に偏
 するの義である。然るに佛教の基礎は中道であるから偏黨はない。佛教に厭世主
 義に似たる教のあるのは、人生に執着して居る凡夫の迷執を拂はんが爲めの垂

教に過ぎぬ然らば樂天主義かといふに苦惱を超越し盡せば快樂といふ名も立てられぬ譬である吾々お互は兎角人生の假相に執着して迷執を離れ難いものであるから此迷想を拂ひ除かしめんとするには勢ひ厭世的に類似する教訓を下す必要がある譬へば酒の爲めに身を損ふものに向つては極力酒の害を説いて止めさせねばならぬ酒其物には固より百毒の長たると共に樂となるべき効用もあるであらう之を要するに教化の方便手段であつて事止むことを得ざる垂手である元來方便とか手段とかは決して直ちに目的其物であるとは言はれぬ全然目的とせぬ場合もある併し其目的を達する爲めには不得止種々の方便手段を用ひねばならぬ然るにいつの間にか肝心の目的は忘れられて唯だ其手段方法にのみ捕はれて了ふからヤレ佛敎は厭世敎であるとか解脱主義であるとかいふて彼れ此て妄評を試むる者もあるのぢやが是等は誤れるも亦甚だしと云ふべきではないか斯くの如く人は稍もすると有と云へば有に執し空と云へば空に執して有も空も共に方便の言詮であるといふことを知らぬ所から精を認め粗を認めて偏黨の心を生ずるのであるけれども毎度云ふ如く萬法は唯

心の所現にして唯心は萬法に異ならざるを以て有空の執見を泯する時は有空共に實相ぢや迷悟も生佛も菩提も煩惱も生死も涅槃も皆な同一實相となつて現はれる此時は熱れが貴く熱れが賤しいと云ふ區別も立たぬ又何れが善何れが悪と云ふ差別のあるべきものでもない盡十方世界一枚の佛法ぢや是を大死一番大活現成ともいふ然るに涅槃を愛し生死を厭ひ此を捨て彼を取り妄りに一方に偏黨して嫌擇を立てるから至道の中に在り乍ら至道に辜負するのぢや昔徳川家康が近從の人々に向つて世の中に一番甘い物は何であるか云つて見よと云はれた時に大勢の者が思ひくにヤレ牡丹餅が甘いか酒が甘いかヤレお汁粉赤飯うどん蕎麥各々其好む處に従つて御答へに及んだ最後に家康の側近く使へて女丈夫と呼ばれたお梶の局と云ふのが妾の考では世に一番甘いと思ふものは鹽であらうと存じますと答へたので一座の面々は呆れたやうな面持ちにてお梶の方を眺めて居たが家康公がそれはまた如何なる譯であるかと問ふとされば御座います大凡如何に甘いものでもその本はといへば皆な鹽加減一つに在ることかと思はれます例へば如何に結好な御料理を製ら

へるにしましても若し鹽加減によらざれば決して甘い味は無からう様に心得ますと答へたので一座の物は勿論家康公も成程と計り感心されたがさて次に「それならば世の中に一番不味ものは何にか」と問はれた時又一同は各自の最も不味と思ふものを取りくに申し上げたが最後に櫛の局は「矢張り鹽であるうかと思ひますと申上げた乃て一同は聊か不思議に思ふた先には一番甘いものが鹽だと云ふたのに今度は一番不味ものが同じく鹽であるとは訝しな答へだと思ふた家康公が其理由はとの問に對して前に申上げしが如く如何に好味いものでも味の本は鹽の加減一つにあるのでありまして一寸でも其加減を間違ますれば不味くて食られるものではありませんさればこそ世の中に一番甘いものは鹽でありますが一歩不味いものも鹽でありますと答へたので一同は其伶俐なのに感じ家康公も深く心に契ふて賞讃せられたと云ふことであるが敢て鹽のみではない天地萬象は元來至道の妙相であるから道理に順ひ法性に從ふ時は盡く中道の妙法である眞善美の樞府である然るに一寸でも之に對する比の加減を損すると牛頭馬頭劍樹刀山といふ恐ろしき國土となるされば

萬法其物には決して罪は無罪の本はこちらの心にあるのぢや心の向けやう一つて善にも入り邪にも移るのであつて法性の眞理には素より精粗偏黨のあるものではない故に永覺は盡十方世界總て是れ一個の無量光の佛身なり盡十方世界總て是れ一個の蓮華の寶土ならんといふてある。

大道は體寬く難無く易なし

大道とは至道の事て至と云ひ大と云ふも皆な是れ道の廣大無邊なるを形容した語であるさて道の事は最初至道無難の處に於て詳しく説明せし如く道は須臾も離る可らず離るべきは道にあらずて吾々お互に片時も離るとの出来ない乃ち必ず之に依らねばならぬ處の者は道である佛も踏めば衆生もふむ迷者も行けば悟者も通ふと云ふのが道である而して其道の本體は之を豎に眺むれば三際に窮め横に見れば十方に亘りて到る處として通達せざることなしされば此道を形容して大と云ふたのぢや此處に大と稱するも決して比較的大小の意味ではない大小の局量を超したる無上の意味である故に之に達するに難易

のあるべき筈のものではない天地に充滿し、法界に備倫して居る道なるが故に心佛衆生の差別なく、貴賤貧富の論なく、履踐せずと云ふことなく往來せずと云ふことなし、一切衆生は此道中に於て活動しつゝあるのである故に其體は甚だ寛て處として圓通せざるなく、物として攝めざるはない寛とはユルヤカで寛大にて一切事一切法を包含するの意である、さてかゝる道は全體如何なる者なるかと云へば我等お互が本來具有の妙心の事にして、大道とは妙心の異名に過ぎぬされば今更、外に向つて求むるに及ばぬ筈であるのに世人の多くは此大道を辿るを忘れて自ら求めて岐路に迷ふて居る、古歌にも

牛馬はみな牛馬と云はるれど

人こそ人と云はれかねぬ

とある如く、牛馬は日々牛馬のなすべき事をなし、其道を行ふて誤らざるが故に牛馬と稱せらるゝのである、人にして人と云はれ得る人は誠に少ない故に

人多き人の中にも人ぞなき

人となれ人となれ人

との嘆息も聞くのである、何故かく多くの人は大道を踏み誤るかと云ふに直に其根源を究むることをせず、大道は自己本有の妙心なることを忘れて目前に現はれて居る大道の作用の小部分に拘泥して、あれかこれかと迷ふて居るからである、花の紅なるも大道の一部分なれば月の皎々たるも大道の一部分である、花の咲くのも大道なれば花の散るのも大道鳥の轉るのも獸の走るのも皆なこれ同一の大道であるのに、兎角妄見より分別を立て、花紅を執して之に迷ひ、月光に着して之に耽るといふ様に、同一大道の中に憎愛分別するによりて一向大道の全體を認むることが出来ぬ、ツマリ大道其ものには難易は元より無いのであるが、之をありと認むるは只だ其人にあるのである。

小見は狐疑す轉た急なれば轉た遅し

大道は元來縦横自在にして處として通せざるなきも、凡夫は之を踏み迷ふて岐路に彷徨するは何故なるかと云ふに、大道の全體を見ず僅かに其一部分のみを見て大道なりと妄想して分別するからであるといふ事は、前句に於て説明せし

處である、今小見とは即一部分の見解の事、恰も針の孔から天を望むと云ふ様に極めて見識の小さくして至道の全體を其儘に見ることの出来ぬものを云ふ狐疑とは疑惑のことである、何故に疑と云ふ字の上に狐と云ふ字を付けたかと云ふに狐は非常に疑ひ深い動物で若し獵師に追はれたる場合に他の動物の様に一目散に逃げる様なことはせず、後をふりかへり／＼見て逃げると云ふことである、而山和尚の著書の中に信州の諏訪湖に冬季結氷すると狐は氷に耳をつけて之を窺ひ其下に水の流動が全然息んだのを認めて始めて氷の上を渡つて行くと云ふ、それ其地方の人々は狐の渡つた跡を見て最早大丈夫だと云ふので、それから人間が渡り初めると云ふことである、これは餘談であるが全く狐は疑ひ深い動物である、兎角小見の人は元來平々坦々たる廣闊の大道に向つて自ら自己を疑ひ大道を疑ひあれかこれかと心外の法に妄想分別し爲めに葛直に大道に趣向して行かぬから急げば急ぐほど益々大道とは遠ざかり行くのである、葛直に進むと云ふは徒らに外に向つて驅せ廻らずに直に自己に立返つて徹證することである、然るに凡夫は自己の脚跟下即大道なることに氣が付かず、妄

りに外に向つて妄想分別を起し、或は萬境の相に狂亂し、或は萬境を怨敵の如くに思ひ之を厭ふて自らは枯木死灰の如く、是の如きは何れも佛祖の正定に住するものにあらず共に是れ一種の心病であるのである、如何に無心無念の境に至らんと欲してもそれは恰もながえを北にして越に向はんと思はんが如く又圓孔に方木をいれんとするが如くにして急ぐ程却つて遅くなり工夫すればする程却て大道と遠ざかり行くのである、故に學道の士須く狐疑し猶豫すること、を放下して直下に人々固有の本心に立ち返つて葛直に前進せよ、承陽大師は「おほよそ諸佛の境界は不可思議なり、心識のおよぶべきにあらず、いはんや不信劣智のしることをえんや、たゞ正信の大機のみよくいることをうるなり、不信の人はたとひをしふともうくべきことかたしと仰せられ、又人まさに正信修行すれば利鈍をわかす、ひとしく得道するなり」とも仰せられてある、大凡大道を見得せんと欲せば智慧分別の妄解量を離れて正信修行を怠らざる様にするのが必要である、曾て越後の國頸城郡の邊に一人の老婆があつた、ある日の事、近所の寺に行き和尚さんに向つて追善の供養にもなり御祈禱の効能もある萬病圓的の御

經を教へて戴きたいと願ふた和尚さんもこれには聊か閉口したが、マサカに教へてやれぬと云ふのも可愛そうであるし長い御經では婆さんとても覚えられまいとあれかこれかと思索した結果金剛經にある「應無處住而生其心」の一句を教へて遣つた婆さんは喜んで幾度か繰返し「漸くに記憶し頓て寺を辭して我家を指して道をいそぎながらも頻りに「應無處住而生其心」を口を切らずに復習して歸つて來たが道に小川があつてそれをまたがねばならぬ婆さんまたぐ拍子に「ドッ、コイ、シヨ」と云つたので、「ヒヨイ」と折角覺えた御經を忘れて了つた。サア大變漸く覺えて來たものを此處迄來て忘れては何もならぬ色々考へて見たが容易に思ひ浮ばぬ何でも一番上に「オ」とあつた様だ左様々々一番上「オ」で終ひの方に「二五」とか云ふことがあつたが頻りに考へたが漸くにして思ひ出したのはそれ「王の袖二尺五寸であつた」或は大麥小麥二升五合であるとも云ふと「其婆さんは御經を王の袖二尺五寸と自分極めに極めて了ひ、家へ歸るや御寺へ行つて和尚さんから有り難い經文で如何なる病氣でも之を讀めば必定癒ると云ふ御經を習ふて來たと言ひ廻つたので近所の人々も初の

中は誰一人として信用する者は無かつたが物は試してあると云ふので一人の病人が婆さんに祈禱して貰つて見ると不思議にも全快したので忽ち近郷近在の大評判となり流行るわく、來るは、昨日も五人今日も十人と次第に病人が集つて來る又夫れが如何した譯か王の袖二尺五寸の祈禱によつて不思議に癒る婆さん愈々得意になつて熱心に祈禱をして居つた處がある日の事一人の雲水の僧が來て婆さんの祈禱を聞き變なことを云ふ者哉と思つて婆さんに尋ねて見ると近所の寺の和尚さんから教られて來たのだと云ふので件の雲水は婆さんに向つてそれは婆さん違つて居る御經にあるのは「應無處住而生其心」と云ふのだと教へた是に於て婆さん聊か疑を起して迷ひ始めた自分には慥かに王の袖二尺五寸であつたと思ふのだが併し「應無處住而生其心」が本當であるとするれば之は祈禱を更へねばなるまいと云ふので今度は改めて眞實の御經である應無處住を以て祈禱に應じた處が如何した譯か今迄あれ程よくきゝめのあつた祈禱がサツパリさかなくなつて了つた乃て婆さんはハテ之は不思議では矢張り最初の王の袖二尺五寸がよいのであるかしらんと思ふて王の袖……

てやつて見たが矢張り効能がない、到々婆さんの祈禱はさかなくなつて了つたと云ふことである、此れは眞實であつた話か何うかは知らぬが兎に角味つて見れば面白い話である、初めに婆さんは餘念他念を交ゆることなく必ずそれと専心に信仰してかゝつたからよしや御經の文句とは間違つて居つたにしても著しき効験があつたのであるが、一度雲水の僧にそれは間違ひだと聞いたので茲に狐疑を生じたのである、些少たりとも疑の念が起れば最早精神の基礎が動搖して經文と一致することは出来ぬからぢや、故に眞信仰を得るには要するに少見狐疑といふことが第一の妨である、又何時ぞやの新聞に宮城縣下のある處に於て徵兵検査を行つた時、壯丁が悉く赤禪を纏めて居たので検査官も不思議に思ふて、其理由を取り調べ見たるに、そは徵兵を遁れんとする禁厭であつた、何う云ふ譯か知らぬが其地方にては赤禪をかけて西南の役に戦死せる者の墓に詣ると徵兵にのがれると云ふ不思議極まる一種の迷信が流行して居つたと云ふことであるが、實に小見の輩はかくも淺間しきことを敢てするものである。

之を執すれば度を失し必ず邪路に入る

之とは學人の智見解會を指し、執とは執着と熟字して堅く守つて放さぬこと、度とは法度、分度、即度等と熟字するも、茲ては大道の中心點と云ふ程の意味である、さて元來大道とは各自固有の本性なれば自己以外に別に存在する者にあらず、而して其大道は宇宙に徧滿し萬事に流通するが故に森羅萬象一々皆な大道の露現ならざるなし、去れば其一部分を取り來たりて道の全體ありとして執すべきにあらざる、然るを凡夫は徒に自己の妄見妄解を以て正當の見解とし、益々其見解を死守するのが執着である、かくの如きは通常凡庸の漢の心病にして云ふ迄もなく大道を離れて邪路に落入つた者である、又設ひ啓地の知通を得たりとす、るも其解會を鼻にかけ、又悟道に豊かなる者と雖も、其悟を固執して見智に誇る様では最早一隅を守つて轉路を缺くの漢にして同じく佛祖の大道を離れて邪路に入つたのである、元來佛祖の大道には我慢我見を入ることを許すべきではない、然るに凡夫は自己一人の妄見邪路を以て最上無上の眞理と定め之を執す

るは我見にあらずして何ぞや我慢にあらずして何ぞや此我慢此我見と云ふ邪路に踏込むが故に佛教には知見に見を立つるは是れ無明の本なりとありて如何に甚深微妙の妙理を悟ることあるも其悟れる理に執着して忘ること能はず徒らに知見の窟中に投じて之を離るゝ事能はずんば又邪路に落ち入つたものである世には往々臨濟禪界に參得して隻手の聲や一則の公案でも通過すれば早や已に一角の悟を開きて知識にてもなりたるかの如く心得其悟を慎重し鼻にかけ而して更に進之を放下する底の活作用あることを知らぬ徒があるかゝる高昂我慢の徒は自ら參禪行脚の進趣を途絶し向上更に向上の在ることを忘れ反て一種の邪路に落ち入つたものである實に痛嘆に堪えざる處である天下參禪の士は宜しく活眼を開きて此理を達觀せられよ花にあこがれては花の散るをなげき月に執しては月の缺くるを悲しむは人情の常なれども古人も「花は愛着に散ると云へるが如く咲く花は咲くまゝにして散る花は散るまゝにして諸法常住の相なることを見破せねばならぬ咲くを喜び散るを悲んで花の奴隸となることあらば果然として凡夫の妄執である此妄執さへ捨つれば承陽

大師の御詠にある所謂

いつもたゞ我が故郷の花なれば

色もかはらずすぎし春かな

て四季を通して美しき菩提の花を眺むることが出来る随聞記の初めに續高僧傳にある話として次の様な話が載せてある或る禪師の會下に一人の僧あり金像の佛と亦佛舍利とをあげ用ひて衆寮等にあつても常に焼香禮拜して恭敬供養して居た乃て或る時禪師が汝は左様に頻りに佛舍利を珍重して居るが後に至りなば却て汝の爲めに宜しくないと諭されたけれども其僧は何うしてもきかぬ禪師がそれは必ず天魔波旬のなす處であるから早く棄てよと云はれたが却つて其僧は憤然として怒り席を蹴て出て行かうとした依つて禪師は之を哀れみ尙ほ其後に言ひかけて汝は夫れ程迄に思ふなら箱の中をあけて見るがよいと言はれたので其僧立腹まぎれに箱を開いて見るとこはそも如何に佛舍利では無く毒蛇が蟠つて居つたと云ふ之れ實に執着の恐るべきことを誠められたのである又禪家の問答中に「一子出家すれば九族天に生ずと何

に依つてか目蓮の母地獄に随すとの間に對して一子出家するが故にと云ふ答があるが實に面白い、一人出家すれば自分一人のみならず九族までも天に生ずる程の大功德大利益あると云ふに關らず、目蓮尊者の母は一子目蓮が出家したから其功德にて九族天に生すべきを反て地獄に随したとは誠に解らぬ話である、これは畢竟何故でありましやう、目蓮尊者の母は目蓮が出家してからと云ふものは何につけかにつけ目蓮がくと思ひ出し好き着物を見ては之を目蓮に着せたい、甘味いものを食べてはあゝこれを目蓮に食べさせたい、目蓮は今出家の身となつて、甘味いものも思ふ様には食はれぬであらう、身は墨染の衣にやつしてはこんなよい着物は着られぬであらうと

ひとの親の心はやみにあらねども

子を思ふ故に迷ひぬるかな

と、子故に迷ふ親の情あけてもくれてもたゞ目蓮くくと執着した、そのみならず目蓮の母は他人に對しては非常の慳貪であつた爲めに哀れや母は惡道に墮したのぢや、ツマリ執着の爲めに功德海中にあつて功德を失脚したのぢや併し

目蓮出家の功德は決して消滅はせぬ後に目蓮の爲めに上天の妙果を感じたが一應は執着心の爲めに隨落することを免かれなんだ故に之を執すれば度を失し、必ず邪路に入るとは誠に好き誠である。

之を放てば自然なり體去住無し

前句に於ては執着すれば邪路に陥ると説いたのであるが、今此處にては其反對に自己舊來の妄見妄解を抛擲し一切の己見を全然放下して從來の煩惱障も所知障も總て透脱し去れば自ら寂滅離相なる大道の本體が如然として當處に現成するのぢやと述べられたのである、幾度かくりかへす事であるが自分の境界は迷ひの衆生で淺間しき者であると思ふのは、固よりの妄想顛倒で恰も演若達多が自身の頭を亡くしたと云ふて室羅筏城中を騒ぎ廻りし如きものである、さればとて我は悟れり、已に大悟徹底せりと悟道に執着して其悟を鼻先にぶらさげて増上慢に陥るが如きは頭上に頭を安ずるの類であつて決して身心脱落、脱落身心の了事底の境界と稱することは出來ぬ、承陽大師は放てば手にみてり

一多のきはならんやと仰せられてあるが道の本體は無相にして一として取るべきものはない取るべきなきを執着するは誤りである故に之に執着するとなぐ徹底無念無作の本源に契當し日用光中其本源をして無我的妙用を發して行住坐臥する之れが即ち自然の靈機にして之を出身脱體の行履といふのである。花咲けば花咲くまゝ、花の散らば花の散るまゝ、風吹くも雨降るも其れが爲めに何等心を動かさるゝ事なく釋迦來るも韶曲の念なく達磨來るも屈托の心なし、煩惱あるも其儘の解脱なるが故に敢えて之を除かんとせす菩提も亦た自己の家珍なるが故に別に之を欣はんともせす萬境の上にて一點執着する處なく萬法の如然たるに任すこれ即ち自然である天桂禪師の所謂

坐禪せば四條五條の橋の上

ゆき來の人を其まゝに見て

と云ふに到つて始めて至道の本體に一致し本具の妙心に契合したと云ひ得るのである故に體に去住なして至道の本體は元より去るの來り住るといふ兩邊に亘るべきは無い偏法界の大道なるを以て招けども來るに非ず追へども去

るにあらず古に亘り今に亘り自然のまゝに靈妙である佛になりても増さず衆生になりても減らず凡夫も聖者も寸分違はざるが至道にして而して自己本具の妙心である然るを之を遠く他に求めて逐ひ廻したり之を捕へて頻りに珍重するが如きは兩頭共に影像を把握して實體を昧却したので實に笑止千萬の事である。

性に任すれば道に合し逍遙として惱を絶す

性に任するとは性はモチマイ即ち天真の性分をいふ任とはマカスと讀む即ち吾々が有想無想の諸見を放下して人々圓具の妙性のまゝに打ち任し行くことであるかくの如く天真の本性に任して毫も人我が妄見を挟まざる時は自然に大道に契合して煩惱妄想の跡を絶して逍遙自在である逍遙とは無爲自得の形を云ひ自由自在にして障けるものなきことである然かし圓具の妙性と云ふも決して其處に何等か固まつた一物ありて存すると邪思惟する輩もあらんが是れは邪見ぢや古來より支那にありては性の説は幾多の學者によりて研究され

て性は善なりと稱するもの否な悪なりと稱するもの又善にも非ず悪にもあらずとか善悪相混すと云ふ如き種々の説を立つるものありたれども今云ふ處の性とは決して左様なる者を指して云ふにあらず善惡迷悟を超越して善惡迷悟に墮することなく天真獨露の者である見よ長者は長法身短者は短法身鶴は長く鴨は短かし鶴の長きを善とやせん鴨の短きを惡とやせん之に向つて善惡差別を附せんとするものあらば妄見邪解である去れば此處に云ふ處の性は善にもあらず惡にもあらず又善惡相混するにもあらずることは云ふ迄もなく一念回光返照して妄分別を離れ天真獨露のまゝにし去りて更に一毫の妄分別を立せざる時は何等心中に惱亂の起ることはない然るに此理に徹底せざる者は自分自ら其の本性の大光明を昧却して自ら道に背くのであるから決して他に魔障のあるに非ず盜人を捉へて見れば我子なりぢやたゞ一念回光返照して此分別見解は自己の仕業なることを悟り一切の妄情を打ちすて見れば

雲はれて後の光と思ふなよ

もとより空にあり明の月

て大道坦然として脚下に圓通し人々本有の眞如の明月は皎々として赫々波つて居るのである此處に到れば一點妄想煩惱の浮雲の障ゆるなく行住坐臥怡も魚の水中を行くが如く鳥の空裡を飛ぶが如くにして何等罣礙する所なく自由自在にして眞個大安樂の境と成り得たのである。

繫念は眞に乖く昏沈は不好なり

繫念とは外境の諸縁を攀ち自他の相を追ふて妄りに散亂すること昏沈とは其反對て昏はクラシ沈はシヅムと訓じて精神朦朧として活氣力を喪失すること散亂も昏沈も共に一種の心病である大凡禪定を修行して大道を識得せんと欲するものは先づ第一に散亂昏沈の病を除かざる可らずされば徳山も毫釐も繫念すれば三塗の業因なりと云はれて居る僅かにても聖凡迷悟の相を執して法界平等の理に昧く爲めに迷を嫌ひ悟を求め凡夫地を惡み聖域を愛念すれば又其處に取捨揀擇の妄見起りて苦惱絶ゆることなく反て天真の妙體に乖くに至る又之と反對に外萬縁を息め内妄念妄慮を除去したりと云つて恰も頑然たる

枯木死灰の如く無心空亡の坑に落ち入つて、ボンヤリしてしまつても是れ又正定に非ざるを以ての故に不好と云はれたのぢや、夫れ故に宜しく昏沈散亂二種の病弊を透脱して究竟堅固の大正定に安住せざる可らず此時初めて道に合し、真に契ふ事を得るのである。因に此二句は繫念と昏沈とを二にして繫念は真に背き昏沈は亦真正の禪でないから不好である。宜しからずと見る説と繫念と昏沈とを一緒にして繫念は真に乖くから不好である。昏沈は不好であるからこれ又真に乖くと釋する説とがある。何れも同じことである。次の句に就て考へますと畢竟此二句は互換の文にして繫念も昏沈も共に真に乖くから不好で不好なるが故に真に乖くと見るが可ならん。

不好なれば神を勞す何ぞ疎親を用ん

此の二句は前の文を承けて後を起すのである。疎親とは疎はウ、ト、ン、ズ、ル、親は、ン、タ、シ、ム、こととて、遠順憎愛取捨など、同じ意義である。さて前段に於ては繫念昏沈は共に天真に乖いて不好であると申しました。が不好なれば徒に心神を勞する

のみて心の安隱なることが出来ぬ。不好なれば何故に心神を勞するかと云ふに、開悟の道を得んとして徒に工夫を費ひやし、求むべきなきに向つて求めんとし、逐ふべきなきに向つて逐ひ廻りて居るのであるから千萬劫を経るとも大道に逢着するの時は無い之を例ふれば水と波との如く長しへに變らぬ水を忘れて、打ちよする現象の大波小波を逐ひ廻つた處が何れの時か水の本体を認得することを得んや、自己の影法師を恐れて逃げ廻つた處が何れの日か影を離るゝ事を出來得べき影は何時まで經るとも逐へばとて打てばとて離れ去ることはない。そよりは退歩返照して見よ、直に影は實體ある者にあらず、影は自分がある故に現はれ來たれるものなることを了解するに至らん。一度此處に警地の智地を得る時は自づと今迄影を恐れたり逃げ廻りたることの愚なりしを知るに至らん。然るに天真に乖き心神を勞するから之れより親疎等の差別の見を起すのである。されば繫念は親疎の因にして親疎は繫念の果に外ならぬ。元來迷悟凡聖を絶したる真如一實の大道に於て何を親しみ何を疎んずべき畢竟して親疎すべき者なきを自分勝手に妄分別を逞ふし、華なき空に華を認めて親疎を分ちて勞

して功なき餘計な心配をするのであるかゝる心配は徹底放下し去るがよい。

一乗に趣かんと欲せば六塵を惡むこと勿れ

昔ある山寺に三人の僧があつて互に相談して一週間無言の行をやることになつたさて五日間は何事もなく過ぎて六日目の夜に至つた明日一日で愈々満願と云ふので皆な一生懸命にやつて居たが時しも道場の中央にありし燈明の消えかゝつたので、其中の一番年若の僧が消えては大變と思ふてかゝり燈明が消えそうだと誰れかある油を注さぬかと聲を出した次の僧之を聞きかねて此處は無言の道場で御座る燈明が消えるの消えぬのとそんな事に言葉は發しては無言の行は破れ申すぞと怒鳴つたすると上座の老僧は苦々しきことに思ひ「サテモ頼み甲斐なき者共哉折角の無言の行を由なき事の爲めに皆な破りめされた黙つて居るのは皆一人てござると申して三人ともに行が破れたと云ふ話があるが今此二句を説明するに就き最も適當なる譬喩であると思ふさて趣の字はオモムキイタルの意で趣向の義ぢや乗とは運載の義にして如來の妙法は恰も

船舶又は車馬に物を載せて甲所より乙所へ運ぶが如く一切衆生をして煩惱妄想の此岸より大覺涅槃の彼岸に到達せしむるものなるを以て乗と云ふたのである物を運ぶに船舶もあり車馬もあり又汽車の如きものもあるが如く其教法には人々の根機に應じて三乗二乗一乗等の差別も階級もある今此等の事を一々に説明せんには頗る長き時間を要するを以て今は略することとする兎に角此等法門の中最も勝れたる乗物即ち至極の教法は何れなるかと云ふに法華經にも唯有一乘法無二亦無三とありて一乗の教法が最尊無上の法門である二乗三乗の如きは一乘に至るの方便的教法であるから無論完全なるものとはいはれぬ其最尊無上なりと云ふ一乗の教法とは何を妄りに外に向つて求めまいぞ一乗の法は自己の本心本性即ちこれぢや古歌にも

よもすがら佛の道をもとむれば
わが心にぞ尋ね入りける

とある如く自己の本心を離れて別に佛法があるのではない唯だ自己本來の面目が諸佛所證の一乘法じや、一代の洒落僧として天下に其名を知られたる一休

禪師の歌にも

本来の面目坊の立姿

一目見しより戀となりけり

と云ふのがあるが此本来の面目坊が即ち一乘法である多くの學者は此れに接近せんが爲めに煩悶し懊惱して所謂戀の病氣に掛つて居るのであるが心外無法と徹見せば戀慕ふといふも愚な事である本来の面目は誰にも臂鐵砲を喰はしはせぬ寧ろ迎ひに來てくれかしと待つて居るのである然るに方角違ひ見當違をして尋ね廻つて居るのだから千生萬劫を経るとも探ね當る事は出來ない乃て三祖大師は此等の徒を感み給ひて若しそれ一乘に趣かんと思ふならば六塵を惡むなと示されたのである抑も一乘の法とは各自本具の妙心の異名なるが故に各自が自己の妙心の眞面目を識得したる時が即ち一乘法に廻して運轉自在の主人公となつたのである吾人若し一乘法の主人公たらんと欲せば唯だ六塵を惡む事なからんことを要するのぢや六塵とは吾々の眼耳鼻舌身意の六根に對する色聲香味觸法の六境をいふ此六境は一切煩惱の根源となつて各自

の妙心を汚し本来の面目を埋没することあるを以て塵と云ふ而し本心を汚すとは申すもの六塵其物が我れを汚し我が面目を埋没するにあらずして畢竟自己の妄念が之に對して取捨憎愛するによりて汚されたり埋没されたりするのである自己と六塵の境とは決して二物あるにあらず六塵を除いて別に自己も無く自己を離れて別に六塵の境もない六塵の境界か直に是れ吾人本来の面目なり又諸佛の妙心である又一乘法と云ふと雖も六塵の諸法を除き去りて外に尊き一物あるにあらず六塵即一乘の妙法である其妙法が吾々の妄想分別の爲めに六塵といふ名かつくのである

惡しきとてたゞ一すじに捨つるなよ

しぶ柿を見よ甘ぼしとなる

と古人も歌はれたるが如く佛陀の覺體といふても六塵の澁柿が修行力によりて變じて甘ぼしとなつた迄の事で皆なこれ自己本心の柿の露現ぢや六塵の澁柿が無かつたなら甘柿の妙法も亦出ては來ぬ筈である即ち澁柿を取り除きて別に甘ぼしはないのである故に本心の露現たる一乘の妙法が尊貴なるものと

なれば同じく本心の全體たる六塵も亦尊貴なるものといはざる可らず然るに
 一乘法は尊貴なれども六塵は妙心を汚すが故に厭はしいとの凡夫の妄見より
 して茲に取捨の見起り憎愛の念萌さして六塵を憎みて之を捨て之を避けんと
 て益々六塵の爲めに捕へられ一乘を愛し之を求めんとするよりして愈一乘に
 遠かり行くのである此は六塵即一乘一乘即六塵なるの道理を知らざるにある
 也若し此道理を深く識得すれば憎むべき一塵もなく取るべき一法なしたとひ
 毛嬙西施の如き微妙の容顔を見或は管絃絲竹の妙調を聞き其妙色其妙聲が吾
 人の目に入り耳に入るとも六塵即妙法の理に契當せば恰も夕の風耳を拂て朝
 の露眼を遮るが如くにして何等吾人の本心を妨くる事はなき筈である然るに
 之を見聞する當人が妄りに美なりと思惟し妙なりと分別するに依て忽ちに魂
 恍惚として其本心を奪はるゝに至るのである若し夫れ最初より我れに染心な
 ければ彼方より強て此方を迷はすが如きことはないのである今日青年が墮落
 する原因の主たる者の一ツは茶屋や藝娼妓であると云ふので之等の魔窟を全
 廢するがよいと云ふ説をなす人がある是れも無論一理はあるが併しツマリ末

の問題にして根本の問題ではなひ彼等とても此方に染汚心なければ強制的に
 迷はしたり墮落したりする權力はない故に青年の徳性を進むるに就て最も
 大切なのは青年其物の心の修養である六塵と云ふも畢竟するに此方につけた
 名に過ぎぬ此方の心一て或は六塵ともなれば又六淨ともなるのである曾て親
 鸞上人が越後の國を巡錫の折柿崎の地を御通行なされたが五月雨の雨しげく降
 り日も已に暮れたれば扇屋と云ふ家に至りて一夜の宿を願はれたが其家の妻
 女は斷然謝絶して如何に頼まれても頑としてきゝ入れぬ上人も詮方なく其軒
 先を假りの宿として寝ねられた夜更けて後降りしきる雨は風に吹かれて上人
 の身を濡ほし眠ることがならぬ上人は静かに念佛を唱へて居られた弟子等は
 御氣の毒に思ひ涙を流していたわりしに上人は予は今夜は特にあり難く思ふ
 ぞよ雨風に打たれし爲めいと佛の御難行の事が思ひやられると申されて
 喜ばれた主人は起き出て、此様子を見て大に感し早速に家の中へ上人を導き
 入れて御泊め申されたのみならず發心して上人の弟子となつた時に上人取り
 敢えず、

柿崎にしぶく宿をかりければ

あるじの心熱柿とぞなる

と咏まれたと云ふ話があるが、實に此家の者が先には佛をも僧をも敬ふことを知らず上人の願さえ堅く断はりし程につれなかりしも忽ちにして自ら上人の手を取つて内に引き入れて御弟子にまでなつた。此前心と後心とは天地の相違なれど元來別物ではないのである。去れば古人も家賊防ぎ難き時如何の問に答へて識得すれば冤をなさすと云ふて居る徹底六塵の根源即至道の全體なることを識得する時は六塵の捨つ可きなく、一乗の取るべきはない何をか惡み何をか愛せん一心即萬法萬法即一心の道理をよく究めて一乗に越かんとするには六塵を憎み嫌ふてはならぬ。此處の處は最初の至道無難唯嫌棟擇と同じ意味を唯だ文字を異にし言葉を換えて懇ろに示されたのであるから對照して見られたら一層よく了解することが出来るであらふ。

六塵惡まざれば還て正覺に同じ

正覺とは佛陀の境界を云ふ前段に於て一乗に越かうとするには六塵を惡むなと示されたが、六塵を惡まねば何うなるかといふの御説明である。即ち六塵を惡まねば其儘直に佛陀の境界と同一ぢや自己と佛と少しも異なつた處はないのぢや、前にも申上たる如く元來六塵と云へば吾々の妙心を害するもの、如く考へて之を捨てんと思ふかなれども、そは吾人が取捨憎愛等の分別の妄見を以て棟擇に渡るが故に無棟擇の大道と遠く隔りて惡魔とも害毒ともなるのであるが、一度六塵に對する取捨の見憎愛の念を脱落して其蹤跡を留めず全く凡聖迷悟親疎の見を亡しさへすれば其時こそは塵々刹々無盡の法相一として法身盧舍那佛か悟られたる三藐三菩提ならざるなきのみならず、又其大道其物の全體の露現全用の現成ならざるなく、妙因妙果ならざるはない。又大道とは妙心の異名なるを以て蓋天蓋地自己妙心の露現と見ることが出来る。去れば此理を徹見して六塵を嫌ふことなく惡むことなければ我を佛との間に些の隔りなく、六塵の全體が一々之れ佛陀の大光明となる。故に六塵惡まざれば還つて正覺に同じと仰せられたのであります。

智者は無爲なり愚者は自縛す

此處に云ふ智者とは通常世間に謂ふ處の學は内外の諸典に博く涉りて識らざる處なく、理は古今を通じて究めざるなく、辯說縱橫無碍自在といふ様な世間的學者を云ふのではない、即ち自己本具の心性は靈々照々として一點迷の雲のたひようなく、本來成佛にして心佛衆生是三無差別なることを了得し更に心外に向つて一法をも求むることなき底の閑道人を智者と云ふ、一度かくの如きの正智慧か現成する時に於ては二六時中、木魚響けば齊堂鐘鳴れば法堂任運騰々に行履し去りて、進歩退歩何等心に掛る物なく、暑を避くるに一扇子あり寒を禦ぐに一袈裟あり、朝には廊に入つて食を乞ひ暮には還つて草菴に眠る、かくの如く少欲知足時々上に大道を履踐し、物々上に正覺を開發し吾我の見名利の念は毫も心頭に生起することが無い、故に心は常に大道の眞只中を往來して名勢利欲の邪路は全く杜絶し了る、さればたとひ絲竹管絃、綾羅錦綉の聲色裡に入入するとも夫等の爲めに一塵心を汚さるゝことなく、又亂さるゝ事なく、一點外に向て

求むるの邪心もなければ又求むる自己といふものも忘却して居る、唯た聲色堆中任運逍遙手に任せて取り足に任せて踏むまゝの諸法實相ぢや、日常の間に於て如何なる事をなすともなすがまゝにして何等の束縛なく何等の障礙なく百無爲百無作である、一々至道中の活三昧である、是を智者は無爲なりといふ、次に愚人と云ふのは此亦通常世間に於て云ふ處の眼に一丁字を知らず、胸に一事を記憶せずして、加ふるに其言語は野鄙にして其行は頑鈍なる者を云ふのでは無い、即ち自己本來成佛なることを了知せずして、自己を以て自己に迷ひ徒らに外相を追ふて其影法師に迷ひ名譽利達などに擒えられて、更に他くことを知らざるの類を愚者といふ、又自己心性の靈々照々たるものある事を忘れ漫に心外に向つて法を求め妄念を以て作佛と圖り、從晝至夜身心の休することなく若し夫れ一知半解にても得る處あれば忽ち高昂我慢の鼻を高くして擔板漢の人となり自己を欺き他を謾るに至る、かゝる者をこそ愚人とは云ふのである、これ無繩自縛として、誰も繩を以て縛る者も無いのに、有りもせぬ繩で自ら自己を縛し我れと我身を苦しめ悶いて居るのである、天桂禪師の歌に、

ほとけとは誰が結びけん白絲の

賤のおだまきくりかへしみよ

とあるのもこの道理を示されたものである。無始以來誰も我を縛する者なきに
愚なる者は自ら己れを縛して自ら妄想分別の窠窟を造り永劫に解脱する事を
得ざるが爲めに益々心外に向つて煩悶を重ねて居るのである。自ら縛つたもの
ならば自ら解くの外はない。併し繩なき繩でありとすれば解くにも及ばぬ。徹底
縛する者なしとすれば、之を改めて解いてもらふ譯にもゆかぬ。唯だ能く我は縛
ばられては居らぬといふことを確信するのが近道ぢや。此確信が出来さへすれ
ば忽ちに繩は解けて佛となり智者となつて自由自在の境界を獲得するのであ
る。往昔佛在世の時婆羅門に一人の娘があつた。此娘は常に物を疑ふ心が深かつ
たので、或時其父は大に怒りて娘を殺さんとし佛の所に至つて如何なる者を殺
したなら罪なくして安穩に且つ心に憂なき事を得るのでありましようか。又如
何なる者を殺したなら佛の稱讃を受くることでありましようか。問ふた佛は
婆羅門に向つて、瞋りの心と恨みの心とを殺せ、然らば安穩にして心に憂なく又

我が稱讃を得るのであらうと告げられたと云ふ話が雜阿含經の中にあるが全
く其通りて諸法の實相を觀すれば、何處にも瞋るべき物も恨むべき物もなきに
或は瞋り或は恨み、怨憎纏綿して遂に其束縛を解き得ず獨りて苦しみ悶いて居
るのが愚者といふものぢや。故に吾々は一時も早く此纏縛を解いて智者の列に
入るが肝要である。

法に異法なし妄に自ら愛着す

前句に於ては正智の現すると現せさるるとによりて、智者と愚人との差異あるこ
とを説き示されたが、此段に於ては諸法の根源を尋ねれば元來一法にして差別
の相なき事を示されたのである。佛は一法とは即ち無相了に差別の法相有るこ
と無しと仰せられてある。大凡一切諸法は種々の相種々の形ありて一として同
しき物はない。又釋尊の教法も五千餘卷の經文、八萬四千の法門といふて重々に
差別して居る。併しそは只外形の上の相にして少かに表面より見たる見解に過
ぎぬ。若し夫れ活眼を開いて其内面を達觀すれば、千差萬別の法が其まゝ唯一

乗の法である故に釋尊も四十九年の間横説堅説と人により機に應じて説示遊ばされたれども全く應病與藥の慈悲方便に過ぎぬ去れば最後には四十九年一字不説と申されてある。

又道生法師は青々翠竹盡是眞如鬱々黄花無非般若と云ひ山河大地人畜家屋禽獸草木と千差萬別して居るまゝにして少しも異なる處は無異なる處がないからして同じといふ名も付けられぬ諸法は畢竟同異の相を離れたる無相不可思議の法である而るに凡夫は此無相の道理を明かに解悟すること能はざるが故に我れと自ら妄想分別を起して同異の塊を幻出し或は佛に愛着し或は凡夫を憎み或は涅槃に偏し或は生死を厭ひ夫れから夫れへと顛倒の邪見や妄想の邪念を増すのみである感むべきの至りてはないか學人たる者は宜しく萬法の根源を究めて其一法にして無差別なるを以て本來愛着し又は嫌忌すべき物にあらざることを徹證すべきである。

心を將て心を用ゆ豈に大錯に非ずや

錯とはアヤマリと云ふ字であるから大錯とは大變な間違ひと云ふ程の意味であるさて前來申しました通り參禪辨道するものにして參學の要訣を知らざる時はたゞ妄に諸法を愛着し若くは嫌忌したりする計りてはなく自己元來圓滿具足の佛體なることを知らずして自己の外に向つて佛を求め祖を尋ね涅槃を願ひ淨土を望んで居る是れ心を以て心を見め眼を以て眼を見め馬に騎つて馬を見むるが如きものぢや故に何時迄探し廻しても遂に求め得られやう筈が無い千萬年を経るとも至道に達着するの時節はないのである是れ豈に大錯の甚しきものではありませんか第一かゝる計較卜度の心意を以て此一大事を修行せんとするは喩へば汚泥の中に於て垢つきたる衣物を洗ふ様なもので却つて汚れを添ふるのみで永久に清淨無垢たることは出来ない昔釋尊が靈山會上に於て拈華瞬目せられたる時八萬の大衆の中迦葉尊者一人のみ破顔微笑し佛心に證契せられたので釋尊の大法は迦葉に附囑せられたと云ふが今此處に於て三祖の示されたる眞理より見る時は世尊の拈華瞬目を迦葉の破顔微笑との間に能傳所傳ありと思はゞッマリ將錯就錯たることを免れぬ然れども此將錯就錯

は釋尊と迦葉との間に於ける以心傳心底の將錯就錯である吾々も徹底其將錯就錯たる事を識得し去ればそれが佛法流通の關鍵であるから此大錯を免かるのである兎角常人は皆此大錯に陥り易いのであるから吾々は先づ以て妄情妄見に擒へらるゝ事なく法元來異法なき事を諦むるが肝要である之に就て面白い話があるそれは昔或る山の中で鏡を知らぬ者があつた一日市へ出てこれを見やゝ死んだお爺サンか此處に居つたかと飛び立つばかりに喜んで早速それを買つて家へ歸つた何ぞ知らん其鏡には自分の顔が寫つたので自分の父親によく似て居たので父親と思ひ込んだのであつたけれどもそんな事とは知らぬから家に歸るや妻に向つて今日は市でお父さんに逢ふたからお金を出して買ふて來たと話すと妻も大に喜びソレはマア宜いことをしましたお父さんが死なれてからは寂しくて仕様がありませんでしたがそれでもよく市に居りましたねと云ふと左様さホソに氣の毒に狭い古道具屋の隅に居られたが私を見る嬉しがつてニコニコして居られたと云ふと妻はマア話は後にして早く私にも逢はして下さいと云ふからソレ此中に居るのだと云ふて鏡を渡すと妻

は一目見るや忽ち柳眉を逆立てマア御前さんは能くも妾を欺ましてお父サンとは眞赤な嘘コンナ立派な年増を連れて來て一體妾を何うするつもりなのかコンナ隠し女があらふとは今の今まで知らなかつたエー口惜しいと鏡を捨て突然夫にシガミ付く夫は何を馬鹿を云ふドレ見せよコンナに立派なお爺さんぢやないかと云へど妻は中々承知しないイヤ馬鹿な事を丸鬚にまで結んで居る……と果ては夫婦は大立廻りと云ふ始末其處へ丁度一人の尼僧が來合せてヤレ〜御前方は何をこんな喧嘩して居るのかと云たので實はコレ〜然々と話をすれば尼僧はドレそれでは何方が眞實か愚僧が見て上げよう其お父さんとか年増の姉さんとやらは一體全體何處に居るのぢやと云ふたので早速鏡を取り出して實は此中に居りますと尼僧に渡せば尼僧受取りて見ればこそ如何に中には殊勝らしい立派な尼僧が居るのでコレ〜お前方が餘りに喧嘩をして居るのでお父さんも呆れて最う立派に頭を丸めて出家の姿になつて居られると云はれたと云ふ此は實に馬鹿氣な話で元來鏡は胡來れば胡現じ漢來れば漢現じて一點味ます處なく前に來れる物を何でも其まゝに寫すの

であるが、それを知らざるが故に寫つた影法師に擒はれて遂には大立廻りを演ずるに至るのである。元來鏡は父でも年増でも亦尼僧でもないが見る人によりて父とも見え、年増とも見え、亦尼僧とも見えるのである。是れ皆な自心現の影像ぢや、斯くの如く道の本體は恰も鏡の如きもので見る人によりて如何様にも見ゆるのであるが、其實何れも假相であつて鏡の實體ではない、故に心を以て心を用ゆるは實に大錯たる事を免かれぬのである。

迷へば寂亂を生じ悟れば好惡無し

寂亂とは寂は寂靜亂は動亂と熟字してツマリ動靜の意である。好惡とは好はヨシとかコノムと云ふ意惡はアジ、とかニクムとか云ふ意である。本來一切萬法は常住寂靜にして平等の一法なるを以て動靜とか好惡とかの待對を離れたるものである。然るに凡夫は迷に墮んで居るに依て動とか靜とか美とか惡とか云ふ妄狂の幼華が紛然として心外無法の空裏に生起するそれが爲めに益々顛倒妄見を逞ふして動を厭ひ靜を希ひ美を好み惡を嫌ふと云ふことになる。かくの

如くなれば前にも動を息めて止に歸すれば止更に愈々動すとある通り遂に實諦を得ずして迷に迷を重ね六道輪廻止む時なく何時までたつても廓然無聖本來無物の域に到達することは出来ぬ。然るに一朝豁然として諸法無自性の理を了得すれば更に動靜好惡の認むべきはないのである。之を喻へば眼病によりて空中に華を認むるが如きものである。元來空中には認むべき一物もないのであるが、眼に病があるとか又は眼膜を通過する血液に激變を來すによりてチラチラと美しき花の如きものを見るのである。かくの如く一切の諸法は一として定相の認むべき無い元來無自性にして其實體はないのであるが、迷と云ふ病氣にかかり又は散亂塵動なる心眼を以て眺めるときは千種萬差の種々の幻相を認めるのである。此は畢竟病氣にかゝれる結果であるから、此迷妄と云ふ心の病をサラリと對治して萬法本來迷語なく是非なきことを眞實に識得すれば、何物をか好とし何物をか惡とすべき元來好惡すべき一物も向ふにはないのである。好惡と云ふも要するに自己の一心より現はれたる閑影像に過ぎぬ、されば此道理を悟了すれば遂に好惡は無いぞと示されたのである。昔播州書寫山の性空上人

は何とぞして生身の普賢菩薩を一度禮拜せんものとの心願を起し、日夜に其事のみを心に掛けて忘るゝ暇なき有様であつた、一夜の事轉經につかれ脇息に倚り睡るともなき轉寢の夢に何人とも知れず耳元にて「若し生身の普賢菩薩を見奉らんと思はば、神崎長者の宅の遊女を見よ」と告げしかと思へば夢は忽ち覺めた、上人は奇異の思をなし、兎に角行きて見んものと神崎に至り、長者の家に就て見れば、丁度遊宴亂舞の真中であつて、遊女は横座に居て鼓を拍て拍子を取つて居たが其詞に

周防むろつみの中なるみたら井に

かせふかねどもさゝら波たつ

と歌ふをき、上人はさてはこれが生身の普賢菩薩なるかと思ふて信仰恭敬し、兩眼を閉づれば今迄の遊女忽ちにして誠の普賢菩薩の姿を現じ、六牙の白象に乗つて眉間には白毫光を放ち、寄り集へる多くの男女は皆善神菩薩と見え、あたるの者は鏝絡天蓋と變じた、是に於て上人は愈々奇異の思をなし、耳傾けて歌ふと開けば微妙の音聲にて

實相與漏の大海に、五欲六塵の風は吹かねども、隨緣眞如の浪の立たぬ日ぞなき

と云ふのであつた、乃て上人益々感涙に咽び、ふと眼を開けば又もとの遊女の姿にて周防むろつみの……と歌ふて居る、さてはと思ふて眼を閉づれば、矢張り普賢菩薩の相にて實相無論の大海に……と歌ふて居る、斯くの如く幾度となく觀想の間に菩薩を敬禮して歸られたと云ふことであるが、誠に面白い物語ではないか、實に諸法實相の體にはもとより寂亂の相は無いのであるけれども、迷ぶが故に好悪を生ずるのである、故によく、此理を究め盡して諸法の相に心を動かさるゝ事なく、萬法共に唯心の所現なりと觀じて、本來迷悟得失有無凡聖菩提煩惱生死涅槃榮佛衆生の差別なきことも證得するが肝要である、故に承陽大師は「しるべし一切諸法悉皆解脱なり、諸法の空なるに非らず、諸法の諸法ならざるに非ず、悉皆解脱する諸法なり」と云ひ、又一塵を擧ぐれば大地收まり、一花開けば世界起り、一念透脱すれば八萬四千の塵勞頓に除き、一回機に當れば八萬四千の法門成就すと仰せられてある。

一切の二邊は妄に自ら斟酌す

斟酌とは斟も酌も何れもクムと訓する字で、物事を斟み分け酌取りて思慮分別することを云ふのである。二邊の邊の字はカタホトリとかキハとか訓するからツマリ二邊とは兩端の意味である。さて一切の兩邊と云ふのであるから、凡て迷とか悟とか有とか無とか是とか非とかの對待に涉る處の物を指したのぢや、此等の法は妄に自ら斟酌すて畢竟吾人の妄情妄見より徒に我他彼此と分別思慮するによりて幻起するのである。度々申上ぐるが如く全體十界の諸法は元來一味平等にして毫も異なることなく、從つて善惡正邪凡聖迷悟と二邊に涉るべきものではない。然るに凡夫は兎角妄見よりして種々に分別思慮して二邊の迷雲の爲めに心月を蔽はれ寛宏なる眞如の大道を歩きながら夫れを知ることか出来ぬ。去れば一度妄想分別の迷雲を拂ひ去れば、大道其物には何等汚點なきを以て所謂心佛及衆生是三無差別て佛と衆生と相異なることなく山河大地草木國土の其まゝが眞如一實の大道なることを識得するを得るのである。

夢幻空華何ぞ把捉に勞せん

夢幻とは夢はユメ、幻はマボロシと訓じ、元來實體なきものである。空華とは吾々が眼病等にかゝつた時に空中華の如き物を認むることがある。即ちそれを空華と云ふのぢや、是れも亦夢幻と同じく實體なきものである。把捉とは把も捉も共にトルと訓じて執着の意味である。今此二句は前段の句を承けて説示せられたので、前句にては一切の二邊は自分の妄想斟酌から生起するので元來二邊の認むべき實體なしと申されました。併し現在一切萬境が歷々として目前に現はれて居るては無いかといふ疑問が起つて來る。成程目前に現在すと雖も、それは恰も夢幻空華の如きものにてありのまゝが確實に執着すべき處の一法一物なき事を分り易く示されたのである。一切の諸法は實相無漏の上より見來れば夢幻又は空華の如くにして一として實有のものはない。已に無きものとすれば把捉し様もない。然るを凡夫は是を知らずして東西に狂奔し南北に亂走して自己の妄情を以て計度分別して彼は淨土ぢやと云ふては之を把らんと欲し此は悟ぢや

と云つてはそれを捉へて見たりする所より亦復迷執に陥るるのである。丁度夢中に金の千萬兩も拾つたと見ても覺めて見れば半錢も得なかつたと同じく、凡情を以てあれかこれかと騒ぎ立て見ても本來の面目より見來れば一物もないのぢや、昔酒好きの男があつて夢に澤山の酒を貰ふていざ呑まうと思ふたか待て折角の上酒此まゝ冷にて呑むもモツタイ無しと之を暖めて居ると其中にふと夢が覺めてしまつた夢であるから覺て見れば素より酒の存在する筈はないて、其男がア、惜いことをした、斯んな事ならイツソ冷て呑めばよかつたにと云つて口惜しがつたと云ふ話があるが覺めた眼を以て見れば一切諸法は有無を離れて把捉すべき一物一法もない筈のものぢや、されば華嚴經には「世間種々の法一切皆幻の如し若し能く是の如く知らば其の心動くことなし」と説き、又心地觀經には「水中本來月なし淨水を縁と爲して本月を見る、諸法は縁より生じて皆是れ假なり、凡愚妄りに計りて以て我と爲す」と説き、又た解深密經には「諸法は衆生が相ありと執計せるが故に有り、然れどもこれ假の名にして實は無きなり、次に諸法は因縁に因りて成りたるものなれば假りにあるものにして實は無

きなり、次に諸法の本性は見る可らず、聞く可らず、生もなく滅もなきものなり」と説いてある、斯くの如く諸法は一として把捉すべき者はないのである、故に何を把捉に勞せんと縦ひ把捉せんとするも元來實體なき物なるが故に強て之を把捉せんとするは徒らに無駄骨折りをするに外ならぬのである、金剛經には「一切有爲の法は夢幻泡影の如く、露の如く亦電の如し、應に是の如くの觀をなすべし」と説き、永嘉大師は證道歌には「四大を敢て把捉すること莫れ、寂滅性中隨て飲啄せよ」と云はれてあるのも要するに此意味に外ならぬ。

得失是非、一時に放却せよ

此二句は別段に説明する程の事は無い、解り切つた語である、元來佛眼を以て徧く一切諸法の性相を觀察する時には即ち涅槃經にも「三界一切の法は本際解脱」と説かれてある如く、素より一法の得べきなく一法の失ふべきなく是もなく非もなく、迷悟凡聖生死涅槃一切の對待を離れたるものである、然れば法の本體より見破し來れば一物一法として放下すべき物も無いのである、然らば此何をか

放却すべき凡夫は此本際解脱の道理を知らず相對の妄情よりして得れば喜び失へば悲しみ是非迷悟取捨揀擇の異見紛然として生起し來るのである故に此二見を一時に片付けて速に之を放却せよとの御示してあるさり乍ら一步を進めて見ると一時に放却せよと云はれても本來放却すべき物體も無いのである況や得失是非などは始より無一物ぢやされば放却すべき一物なきに強いて之を放却せねばならぬと思ふて之に屈托せば既に第二第三に落在して是亦大錯たるを免かれぬ何故なれば得失是非一時に放却せよとは説明上の御指南で正眼より見來れば得失是非其儘が直きに至道の全體全有盡く是れ正法眼藏涅槃妙心ぢや故に強いて放下せんとすれば果然として放下せらるゝ物と放下する人との二見に渡りて早く已に是非の窟裡に落在せるものであるよく注意して假りに説明上用ひられたる文字に捕へられて邪路に落入らぬ様にせねばならぬ然らば全體如何にせば可ならんかと云ふに唯々人々實參實究して元より放却すべき一物だもなしと云ふ極處に妙契するより外はない。

眼若し眠らざれば諸夢自ら除く

此の段は譬喩を以て諸法の實相觀を示されたものである一體此二句は次の二句を説く爲めの前提であるから次の句と對照して見れば一層よく明かになるのであるさて吾人が昏睡した時には或は恐るべき或は驚くべき或は喜ぶべき或は悲しむべき千種萬般の夢を見ることがある何故に夢を見るかと云へば云ふ迄もなく眠るからである昔より眠らずに夢を見たとき云ふ事をきかぬ眠ると云ふ一事よりして千種萬般の夢は現はれるのである前に申しました酒呑の話に酒を暖めて居る中に夢がさめたのでこんな事なら冷て呑めばよかつたと云ふたと同じやうに夢中に現はれたる千般の事柄は夢中にこそ實際の如く思はれるが夢は元來意識の作用に依つて一時的に現はれる假相であるから畢竟は空なるものである去れば一旦夢が覺めれば夢中に現はれたる無量の事柄は忽然として一時に消え失せて了ふ云ふ迄もなく夢は眠りより生ずる若し夢を見まいと思ふならば眠らずにさえ居れば宜い眠りさへしなれば夢を見ること

は決してない夢を見ない人ならば別に夢を除く必要はない除かすとも自然と除かれてあるのである。されば證道歌にも夢裡明々として六趣あり覺めて後空をとして大千もなしとあるごとく夢中の迷眼を以て見るから山なり河なり草木なり是非得失一時に現前し來るのである。一切衆生が六道に輪廻し生死海中に出沒して種々の苦樂悲觀の境に逢ふのも皆夢である。凡夫といふも聖人と云ふも迷と云ふも悟と云ふも畢竟するに夢である。兎角夢を見て居る中は如何に空なりと云はれても中々合點のゆくものではない故に先づ夢を見ぬ様にすることが肝要である。而してそは眼の眠らざるに如くはない眠らねば自然に諸夢は除かれて居る。

心若し異ならざれば萬法一如なり

前段に於ては諸夢を除くは眠らざるに依るといふ喩を以て至道現前の機要を示されたが今此一段は其喩に合せて萬法一如の理を示されたのである。前句と引き合せて見るが宜い。さて如と云ふ語に付ては教相家は種々の緻密なる

説明を施して居るが畢竟するに自己心性の空寂湛然なるの義である。元來諸佛も衆生も隔て無き唯一圓具の妙心には何等相異なる點はないのである。千法も萬法も亦同一如にして空寂湛然たるものであつて本より些の差別はないのである。此道理を徹證せる人は曾て眠らず曾て迷はず又曾て悟らざる本來覆藏なき正覺の人である。之に反して凡とか聖とか迷とか是とか非とか云ふ二邊對待の異見に取付いて眼前の萬境に對して千差萬別の相を執する者は境を逐ひ法に轉せられて法々皆な如々たるの妙徳を發揮する事が出來ぬ。是れを無明の長夜に昏睡して未だ覺めざる所の凡夫と云ふのである。法は元來諸佛衆生の異りはないからして千差萬別の法ありて我を苦しめ我を惑はすを認むるは自心に一異の妄見があるからである。故に超然として一切の異見を除却し去れば萬法はもとの姿を其まゝにして本來一如である。三界唯一心心外無別法と云ふたのも此道理に外ならぬのである。

一如體玄なり元爾として縁を忘す

玄とは前に玄旨とあるのと同じ様に、幽玄微妙にして文字言句の上に説き盡すこと能はざるを云ふ、兀爾とは不動の義である、前句に於ては心若し異ならざれば萬法一如なりと説き、此句に於ては其一如の大道の本體は如何なるものなるかを設示せられるのである、さて一如の本體は幽玄微妙にして不可思議不可商量のものである、佛眼を以て見れども見ることを得ず、魔外も窺ふこと能はざる處のものである、而して此妙旨玄理を自ら其心に默契する時は宇宙の大道と自己と一體妙融するを以て夫れからは何事をなすとも恰も雲の任運にして軸を出づるが如く、又一切萬境に對して見聞覺知する上が無爲無作にして自然に至道に一致する縁すら我と縁せらる境との二相が立たぬ、即ち一切時一切處事々物々上が自由自在にして何等の凝滯する處がない、之を稱して兀爾として縁を忘すと云はれたのである、良寛禪師の句に

吹く程は風がもてくる落葉かな

とある如く、只風吹かば風の吹くに任せ、花咲かば其咲くにまかせて、毫末も其れに向つて妄分別邪思惟を起さぬ見聞覺知の上に於て微塵も心を奪はれ、智を味

まして染汚墨碍せらるゝ事なく、大山の恰も兀然として高く雲外に聳え、八風吹けども動せざる底の境界に至るのが、即ち縁を忘したのである、其縁を忘した處が一如の大道に到達したのである、或人が念佛行者は阿彌陀佛をも伴にしては不可ぬ、何事をするにも念佛を唱へるといふは、マダ佛様をお伴にするのぢや故に念佛を唱へつゝ一切の事業をなす様にせよと云はれたとかあるが、實に味ふべき言であると思ふ。

萬法齊しく觀すれば歸復自然なり

信心銘全篇を分ちて大段二段として見る事が出来る、初めより前句の「一如體玄、兀爾忘縁」と云ふ迄が一段で、これは破邪門の教とも見るべきである、今此萬法齊觀から以下は顯正門の教であります、即ち三祖大師の眞意の存する處は、愈此れより窺れることが出来るのである、萬法とは天地間に存する一切諸法を云ふたので、天に有りては日月星辰、地にありては山川草木、人畜魚介に至るまであらゆる現象界の總てを網羅して餘す處はない、教相家は或は之を七十五法と説き

又は百法と立て、説明してあるが要するに萬法とは有形無形に通じて一切の諸法を總稱したものぢや、萬と云ふは大數を示した語である。故に萬法は差別界であるから其中には山あり川あり草木ありて其形相より論すれば千差萬別一として同じきものはないが併し之を其本體如何と見る時は萬法は盡く是れ唯心の所現である。齊觀とは不偏不黨なる平等觀をいふ。乃ち差別法相の一隅に執せず萬法を總括して其根本を觀照することである。此根本理體を諦かに觀察了却すれば所謂一法界に歸するを以て我他彼此是非得失の稜角は全く泯絶して動靜有無迷悟等の跡はソツクソツク融消し去りて常住寂滅の本源に歸着する事を得るのである。此を萬法齊しく觀すれば復歸自然なりと云はれたのである。之を喩ふれば方圓長短の種々の形に現はれ居る水塊も、一朝太陽の赫々たる光に照されて融解して了へば共に元の平等一相の本水に歸して千差の形は全く泯絶して了ふが如きである。此の理を天地同根萬物一體とも古人は云はれた。今此處にソツプと水瓶と花瓶と花瓶とがありますが、之を形の上より眺むれば成程ソツプはソツプ、水瓶は水瓶、花瓶は花瓶で似ても似つかぬ違つた品物であるが、若し之を

其根本に立ち戻つて其本性を究めて見る時には元之れ同一の土に依つて造られたる物である。諸法の體相も亦かくの如く萬法を現象界の上から眺むれば千差萬別なれども、其根源を究盡すれば萬法そのまゝ一心に歸源せざるは無い。而して其歸復は修行の力や佛の神通に依つて始めて歸復するのでは無く、本來歸復して居るのであるから自然と云ふたのぢや。

其所以を又泥す方比すべからず

泥とはホロブ又ツクル等と訓する字なれども、今迄此處にあつた家が焼けて無なつたとか、又は昨日迄生へて居た木が枯れたり切つたりしてしまつた爲めに今日は無くなつたとか云ふ意味とは違ふ。前句の歸復の意を泥すと云ふたのである。所以とは因縁と云ふ語と同じ義である。方比とはクラハルと云ふことと比較對待の意である。さて萬法の歸復する状態如何と云ふに、一切萬法の現前する因縁由來は畢竟無自性不可得なるが故に自ら泯滅して更らに其朕迹の見るべきなきに至るものぢや。既に朕迹なき一如の當體は法界平等にして我侘彼此の

と對待比較すべき物は無いのである般若經の中には一百の喩をもて般若眞空の理を示し其他の經中にも種々の喩をもて解脱の相を明かし又は菩提心の状態を示されてあるが如何に多くの譬喩言辭を以てしても到底眞理の全面目を言ひ顯はすことは出来るものではない故に南嶽は説示一物即不中と云ひ寒山は物の比倫に堪ゆるなしと云はれてある斯くの如く萬法の由來因縁は自然に泯滅して始終本來の境畔もつけられぬから方比せんとするも方比すべき物がないのである豆を煮るに其豆殻を焚く豆は釜中にありて泣き豆殻に向ひ我と汝とはもとこれ同根の性ではないか然るに何ぞ斯くの如く無情なることの甚だしきやと云ふたと云ふ譬もあるが豆を煮るに之を焚く豆殻と釜中にありて煮らるゝ豆とは實に之れ同一根今は分れて而も仇敵の如き始末であるのは因縁作用の致す所ぢやが其因縁あるものは果して何物ぞと究辨すれば其儘の眞空ぢや世間の人事上に就て見ても互に敵となり味方となつて憎愛の相を現するも其根元にさかのぼりて尋ねれば畢竟無自性にして決定した敵も無ければ味方もあるにあらず即ち法には元來異法なきものぢや故に吾人の一心にし

て若し異見を生ずることなければ一切萬法も亦實に一如空寂にして彼此の方比すべきはないのである。

動を止むれば動なく、止を動すれば止なし

動は動亂止は靜止の義じや此二字は動靜又は迷悟と見てもよいのであるさて度々云ふことであるが動靜の二相は畢竟自心の迷悟より起りし影法師であつて決して實體のあるものではない動は止に對して起り止は動を認むるより生じたるものぢや動も止も共に相對差別の假法あるを以て動が何處迄も動なるにあらず止も亦飽まで止なるにあらず動止は畢竟一體にして不二である故に動の外に止なく止の外に動はないのである喩へば毎度言ふ所の水と波との如く動を止めて止に飯するは波消して靜澄湛然なる水平に復し更に一波の動搖なきが如く止を動するは水平動搖して波浪を幻出するが如し此時平澄湛然たる水相は見られませぬ斯く動止によりて其形相は異なるも水波本より別なきを以て水の外に波なく波を離れて水なく水波そのまゝ一體不二である熟々世

間の有様を見渡せば、貧富の差、貴賤の別、上下の隔、各々異なるものなれども若し之を人間と云ふ立脚地より眺むれば、皆なこれ同一人間にして何等の異なる處はない、同一人間にして果報各々其相を異にす、其想異なるまゝ、か何一人間じや

吹く時は音さわがしき山風も
吹かざる時はいづち行くらん

て、妄想煩惱は波浪の涌くが如く八萬四千無量恒沙の相を現すれども其根本より觀じ來れば盡く是れ靈假にして實體の存するものはないのである、昔し正眼國師の元へ一人の信徒が來たつて私にドウモ短氣で困るから此短氣を直して戴きたいと乞ふた之れで國師は左様か全體其短氣は何時からの事であるかと問はれた、すると彼はハハ生來の私の持前で御座りますと答へたから然らば直して進せやうからさア今コゝて其短氣を起して御覽せよと云はれた、信徒は暫く考へてイヤ只今は起さうと思ふてもありませんと云ふ國師は生來の持前ならば今起されぬ事はない筈ぢや、起されぬとすれば元來短氣などいふ塊り物は無いのぢや、唯だ習慣に依りて縁に對して幻の如くに發するのであるや、依て深

く短氣の無自性なることを返照せよと云はれたので其信徒も短氣の自性本來不可得なることを了じ、それより以後は短氣を起さぬやうになつたと云ふことである、實に短氣な人は一寸のことにてムツとして如何なる亂暴でもやり兼ねないが、氣が静まつて後全體何處からアンナ短氣が起つたのであるや、短氣といふはそも如何なる物であるやと、工夫せば之を探し求むと雖も遂に得られないものではない、たゞに短氣といふやうなもののみではない、吾人の妄見妄想より起り來る處の法は皆盡く本來不可得のものである、されば此動靜一如の理を徹證すれば自から無作の三昧に入り、天真の道德も任運に發揮するものである。

兩既に成らず一何ぞ爾ること有らん

此處に於ては前句の御示しより更に一步を進めて其根源を開示せられるのである、兩とは前句に云ふ處の動止の二相を指したのである、敢て動止にのみには限らぬ迷悟凡聖有無得失等凡て二見對待の諸法が兩と云ふ中に含蓄されて居る、爾とは成るの意味である、動止の二相はツマリ吾人妄念上の影法師に過ぎざ

るを以て元より實體の認むべきなきことは既に述べた通りである元より實體無しとすれば兩の差別相は其儘空寂にして成立しては居らぬのである其兩の差別が成立せぬとすれば一如平等の理體といふものも如何にして成立すべきや元來一といふは單立して居るものではない兩があるからそれによりて一の數が立ち兩も亦一に對して成る一を離れて兩の成立なく兩を離れて一の成立はない夕には露となり朝には霜となるも本と是れ同性ぢや同性にして暫くも兩相を現せしものなれば太陽東天に上れば露も霜も兩ながら忽ち消え失せて同一の本性に歸して了ふと同じ事である兩といふ差別の相が已に不可得とすれば一と云ふ平等の體別にある譯のものでは無い元々一と云ふも兩と云ふも共に對待の上に成立つた語たるに過ぎぬ絶待界の上からは一とか兩とかいふ假名字は用不着ぢや故に一といふべからず兩ともいふべからず此不一不異中道實相の處が即ち究竟究極の大信の根據である心經に顛倒夢想を遠離して究竟涅槃すと仰せられてあるは即ち此處の道理である究竟涅槃とは不一不異の端的を指して仰せられたものに外ならぬ豈に只に動靜の二相のみならんや一

切二見對待の法は皆な同一ぢや悟と云ふのは迷に對する假名迷と云ふは悟に對する幻名である故に覺悟の時には通身是れ悟ぢや迷界は天地法界の中に一部分は立せられぬ又迷の時には萬法皆な迷想に攝せられて悟界は斷滅ぢや彼此互に相對して迷悟一時の假名を成すのである其の他是非善惡等に就ても亦復かくの如く其實體は一として執すべきはないこれありと見るは之を見る者の上のみ存する一時の閃影像に過ぎぬ法其物の自體には元よりかゝる影像はないのである希くは參禪の諸士かゝる關名目に眩惑せられず妄りに影法師を逐ふて自ら煩悶するが如きことなく直に諸法の本源に透徹して一如平等赤裸々の境界に立ち返られん事を切望する次第である

究竟窮極軌則を存せず

究竟窮極は四字共にキハハリとかツクルとかに訓じて諸法の根源を究盡せしをいふ上來種々と説き去り説き來りて前句に於ては兩既に成らず一何を礙る

こと有らんと云ふまで説き盡された此れ以上には何とも説き及ぼすべき術なき所謂理盡き詞窮まつた處を究竟窮極と云ふたのである前には不一不異の理を示されたが茲に至つては不一不異といふ名も付けられぬ最早云ふべき言葉はない權教とか實教とか大乘小乗とか向上向下などの軌矩を論談し十信十住十行十回向十地等覺妙覺など、階級の法則を安排するとも出来ぬ故に規則を存せずと云ふたのである軌則とは軌も則も共にハリと云ふ字で物のさまりを定むること乃ち法則ぢや佛教も聖賢の道も皆な國家民人の爲めに設けられたる法則である併し此法則を死守して居る中はマダ道に徹底は出来ぬ吾人にして眞實大道を究盡する時は順行逆行自在無礙所謂法を忘れて法に合といふてなければならぬ此れが不存軌則の境界である所謂心の欲する所に従つて大道に圓通するのである。

花もみぢ冬の白雪見しことも

思へば口惜し色にめてけり

と詠じ遊ばされたるが如く本來不二の理を悟りて究竟の極處に至れば前

に釋迦なく後に彌勒なく自己即全法界にして生佛不二の域に遊戯することを得るのである思へば口惜しい昔眺めし花紅葉も冬の雪も經論も淨業も皆なこれ夢幻空華を逐ふたのであつた併しかく云へばとて彼永嘉大師の云はれし大悟豈に小節に拘はらんやなどと云ふ語を楯に取りて酒は禪家の般若湯であるなどと云ふて飲めや唄への大亂痴氣を演じ一休禪師にあらねども。

女をば法のみくらと云ふぞげに

釋迦も達磨もひよいくと生む

など、無暗に珍重したり妻妾を帯びて維摩を氣取り豪然として佛を罵り祖を呵したりするが如きは是れ天魔の眷屬にして大なる邪見である如何に生佛不二、迷悟一如と云へばとて味噌も糞も一緒にされては大變であるさればよく、道心の涵養と大道の全體大用とに注意してかゝる惡病に陥らぬやうにせねばならぬ此の妙處を體得して佛法を扶起し去らば三千の威儀八萬の細行一法たりとも之を捨つべきなく皆な吾人の手脚となりて着衣喫飯運水搬柴一舉手一投足が皆なこれ直に佛作佛行となるのである。

契心平等なれば所作俱に息む

契心とは契はカナウと訓じ符節を合するの義大道がソツクリ自心に契合するを云ふ即ち吾人が各自に自己本来具足せる妙心を證得し此身心が大道に契合すれば心と佛と衆生とは三無差別の眞理が頭々物々の上に現前するに至るか法界一如なる事を得れば一切の萬法は悉く是れ佛法一切の所作悉く是れ佛身ならざるなきに至る此地に達せしを所作俱に息むと云ふたのである所作とはナシワザと云ふこととてツマリ妄想憶度の異名と見れば宜い自己の心性が平等の大法に契合する時は一切の所作が毫も我執妄想に涉らぬことになるから所作の全體が無爲無作である更に説明すれば十二時中に所有所作が曾つて悟を欣び且迷を厭ひ又は作佛を他に求むるが如き妄念は全く息みて所作の爲めに染汚さるゝことなし所作か直に無爲絶學の妙行となることをいふたのである清涼國師は此所作俱息の意を空花の梵行を修し水月の道場に座して鏡裡の魔軍を降伏し夢中の佛事を成就すと仰せられてあるさてかく平等一如と云ふ

と雖も本より味増も蕪も一緒なりとする悪平等ではない承陽大師の所謂高處は高平低所は低平の平等である山て高きを崩して海の低を埋め鴨の脛の短に足すに鶴の足の長きを以てして平等にせよと云ふのではないかくの如きは悪平等にして外道の見であるかゝる邪見に落入つてはならぬ故に法華經に法々に位に住して世間相常住と説き摩訶衍論には各々別々にして皆悉く等しき量なるが故に平等と云ふとあり承陽大師は向上すれば父祖となり向下すれば兒孫となると仰せられてあるのも共に是れ契心平等の端的を示されたのである。

狐疑淨盡して正信調直なり

狐疑とは前の小見狐疑の處に於て説明した通りぢや正法を聞くと雖も兎角疑を抱いては信せぬ者が多い或は自己を疑ひ或は諸佛を疑ひ或は因果を疑ふ所より正信心を發せぬぢや淨盡とは淨はキヨラッ盡はツキルと訓じて空盡の義である次に正信とは一切の邪思惟を除きたる正しき眞信仰を云ふ正しき眞信仰とは如何といふに佛陀と自己と平等にして高下あることなく自己本来是れ

佛なることを徹底決定し、確信して、未だ曾て心外に向つて佛を求め祖を求むることなき是を正信と云ふ。調直とは三昧の譯語、調和質直の意であつて、正信の堅固にして不動なるを云ふのである。さて吾々は元來朝々佛を抱いて起き、夜々佛と共に眠り、運轉轉片時たりとも佛を離るゝことなく、行住坐臥の一々は其儘佛作たり、佛行たらざるはないのである。然るに悲い哉、妄想の爲めに蔽はれて自ら之を知らず、徒らに他に向つて佛を望み祖を求めて居るといふは迷妄の甚だしきものである。見よや、日は朝々東天に昇り、月は夜々西海に没す。松は直く棘は曲り、火は熱し、風は動搖、水は濕ひ、地は堅固、眼は色耳は音聲、鼻は香舌は甘酢、是れ皆な天真の大道、佛性の顯現ぢや、然るに此道理を聞くと雖も、尙且つ識得することの出來ぬのは何故であるかと云ふに、これ皆な狐疑心の爲めに妨げられて居るからの事である。故に此狐疑心が淨盡して、サ、ラ、リと亡くなつて了ひさへすれば、正信調直なりて、忽然として堅固不動の正信を獲得することが出来るのであります。三世の諸佛、歷代の祖師の横説縦説も、只此の一事を開示せんが爲めに、して八萬四千の法門あるとも、毫も異なる處はないのである。然るに人々之を知る

こと能はず、自己元來佛なることを信することを得ざるが故に、徒に古人の言句に纏縛され、虚しく文義を詮索して、迷の上に更に迷を重ね、執着の上に更に執着を加へ、愈々益々妄想顛倒する様は、恰も渴して鹽水を飲むが如く、飲めば益々渴を増すばかりである。故に先づ、須く狐疑の妄情を全然と截斷し、盡して了はなければならぬ。狐疑空盡の時には、殊更に願ひ求めずとも、正信調直は自然に體得することが出る。堅固不動となるのである。併しかく云へばとて、若し其人ならば、元來法に異法なきを以て、狐疑すべき物柄もない。善なのである。故に此語に轉せられて、猥りに正信調直を得んことに、腐心し、狐疑心を捨てんとして、第二の妄情を恣にしては、百劫を経るとも、解脱の分は無いぞ。

一切留らず記憶すべき無し

天桂禪師の歌に

まよやれすめはこそあれ難波江に

あしと云ふともよしと云ふとも

と又或人の詠まれたる歌に

物の名は處によりて變りけり

難波のあしは伊勢の濱萩

と云ふがありますが、實に其通りぢや、狐疑を淨盡して妄想分別の迹を止めず常に正信三昧に安住すれば、最早見聞覺知の諸境に於て一物の眼を遮ぎるなく、胸中廓落として諸聖を慕はず、己靈をも重せざるが故に身心共に自ら清風明月の如く半點の緊留なくして、あしと云ふともよしと云ふとも更に心頭を束縛することは無い諸法皆空なりと照見し去れば處によりて難波のあしは伊勢の濱萩と云ふ様に、一のもの分れて名を異にして凡聖迷悟と分れても其まゝ一實相なることを知るが故に更に吾が心を迷はすことはない、此境界に達すれば心意識の運轉頓に息み、念想觀の測量亦忽ちに滅し、恰も墻壁瓦礫の如く、身心脱落底の人となるが故に、日用光中七轉八倒すと云へども、轉倒の其のまゝ、無爲無作の行履となるから、箇の何物をや記取し、箇の何物をか憶念せん、記憶すべき一物もなく、憶念すべき停滯物もないのである。世儒佐藤一齊すら尙ほ且つ、眞孝は孝を忘る

念々これ孝、眞忠は忠を忘る念々これ忠と云ふて居る、苟も參禪に志すの士は、此位の處まで進まねば參禪した甲斐はないのである、然るに往々にして禪者と稱する中に狐疑心を捨つること能はず常に其の束縛を受けて一生を疑團の中に葬つて了ふものがある、實に嘆はしい事の至りである、深川に或る禪僧があつた、此僧常に「我は禪僧であるから、臨終の時には是非とも禪僧らしく正身端坐して息を引き取りたい、坐化と云ふて坐禪したまゝ死にたい」と人にも語り又自らも心掛けて居つた、さて愈々病の床に就き、最早臨終の時も近づいた様なので、いざ坐禪して死なうと云ふので、床の上にして貫ひ頻りに足を組まうとすれども、永らくの病に身體もいたく衰弱し、殊に病苦の烈き爲めに如何に悶いても結跏が出来ぬ、乃て大勢の人を呼び、禱に坐禪をさせよとの事、弟子共結がりて坐禪をさせ様とするが中々に足が組めぬ、其中に斷末魔の苦しみ、然かも坐禪して死にたいと云ふ我見我執の妄念があるから息を引き取れることも出来ぬ、斯くして七轉八倒して苦悶の處へ來合せたのが高橋泥舟であつた、泥舟此有様を見て、卒死にかゝつて居る病人を捕へて何をするのかと問ふと、弟子の一人が實はこ

れ〜と告げたので、何を今更恐にもつかぬ事を云ふて苦しんで居るのか坐禪して死のうとして癩我慢を起す様では、禪者でもなければ佛弟子でもない見よ釋迦牟尼如来は沙羅双樹の間に於て樂々と横臥して涅槃に入せられたてはなにか眞の佛弟子眞の禪者は實に佛の如く安らかに臥して臨終すべきである、ツマラヌ事を執して迷ふては不可ぬぞと云ふて喝と大喝一聲した此禪僧は居士の一喝に狐疑忽然として晴れ、忽ちに安然として横臥し、いと安樂に終りを遂けたと云ふ話があるが、實に笑止千萬な禪僧である、其心情には感心な處もあるが矢張一種の記憶に欺かれたので寧ろ感むべき者である、兎角正信心の根源を究むることなく只其枝葉にのみ涉り形相の上のみに迷ふて眞實相を識得せざれば蓋し此僧の二の舞を演ずることを免かれぬ。

虚明自照心力を勞せず

虚とはムナシと訓し、空虚など熟字して、全體廓然として中に一物の遮る無きをいふ、明とは明白のこととて、明鏡の胡來れば胡現じ、漢來れば漢現じて、物に應じて

偏頗なく境に對して欺かず、光明赫々として一點昧ますことなきを云ふ、吾人の念頭に於て、毫髪も有無得失迷悟の閑影像を留めず、一點の瑕駁なきと恰も明鏡の光明體の外他物なく、物至れば照鑑不昧なるが如くなれば、別に心力を勞するとはないのである、然るに凡夫は虚明自照の心鏡に妄りに顛倒の邪分別を寫し、自ら之に迷ふてドコ迄も逐ひ廻り、徒に心力を勞費し、迷より迷に移り、繩なき繩に縛られて居るとは、慙れはかない事である、故に宜しく虚明自照の理を究め、猥りに自己の妄識に依りて分別することなく、心意識の迷轉に轉せられず、念想觀の測量に誤まられず、只法性のまゝに隨順して、運作し轉動すれば、外物の爲めに染汚せらるることなく、心力を勞することはないのである、昔し非常に物事を氣を掛ける男があつて、事々物々に就て縁起がよいとか悪いとか云ふて自ら心力を費して居つた、處が其友人に意地の悪い者があつて頻りに彼に戯談を云ふて其心配するのを見て、樂しみにして居つた、或時氣に掛ける男と其友と途中で逢つた、其前に何か氣にかゝることを言はれたと見えて、其意趣返しのつもりで、ヤ、此貧乏神何處へ行く、と云ふと、其友人は、ナン、之れから貴様の處へ行くのだと

答へたので、氣にかける男は非常に心配し出して、これは困つたことになつた。縁起でもない今でさへ困つて居る處へ此上貧乏神に舞込まれては堪まるものではない、と一人て心配しながら家へ歸つて其事を妻に話をすると、それは當前ですよ、どうせ御前さんは彼の人にはかなはないのだ、此方て右と云へば左左と云へば右と出る、悪口上手の彼の人に貧乏神など、悪口云ふてかゝるのが間違つてますよ、彼んな人には何ても賞めて置くに限りませんと云ふたので、成る程それもそうである、今度は一つ賞めて遣らうと思ふて居ると又一日途中で逢つたからイヤ、福の神何處へ行くよと云ふと、其男今度は「ナニニ今貴様の家から出て来たのだ」と云ふたので、コレは大變先達は貧乏神に這入り込まれ、今度は福の神に出で行かれては、とても立つ瀬がないと云ふので、大聲擧げて泣き出したと云ふ話があるが、こんな話にも笑ひごとでは無い、へたにするると立派な人にもこんな事があるものぢやに依つて、御互は能々自分にも用心して人に笑はれぬ様にせねばならぬ。

非思量の處識情測り難し

非思量の非の字は普通に云ふ處の除却の意味ではない、眞に是れ脱落の本面目殊絶の當體不恁麼の現成である、されば非思量の處には無棟樑の大道の事に於て、潜行密用更に心力を勞することなき底の隱密の田地を云ふのである、全體此は法華經の是の法は思量分別の能く知る處に非すとある處より出て居るのである、承陽大師は此の處を身心脱落、脱落身心と仰せられ、又坐禪儀には「箇の不思議底を思量せよ、不思議底如何が思量せん、非思量是れ即ち坐禪の要術なり」と御示し下されてあります、此は決して枯木死灰の如くに頑然として禪定を死修する二乗等の定を云ふのではない、思量のまゝ思量に束縛さるゝ事がなき本地風光、天真の行持であつて、寶鏡三昧にはゆる木人方に歌ひ、石女起つて舞ふが如くにして、其間の消息は不可思議不可商量である、されば識情測り難して中々凡識凡情の妄分別を以て測度することは出来ぬ、佛の「是法は思量分別の能く解する所に非ず」と仰せられてあるのは、此處であります、又初祖達磨大師が二祖

惠可大師に向つて汝但外諸縁を息め内心に喘くことなく心牆壁の如くにして以て道に入るべしと云はれたので二祖は種々に研究を試みたけれども容易に大師の許しを受くることが出来ぬ参禪幾年の結果或時大師の處に至り弟子此回こそは始て諸縁を息め内心を調ましたと申しますと大師が諸縁を息めよと云ふことに依りて諸縁を斷滅しはせぬかと曰はるゝと二祖惠可は決して然らずと答へた大師は然らば如何に諸縁を息めしぞと問ひ返されたので二祖は「明々了々常住不斷に知識して居るか併し此妙處は言語の及ぶ處では御坐いませんと答へた時に大師は始めて二祖に印可を與へられたと云ふことである。

眞如法界他無く自無し

眞如と云ふ事に就ては教相家の説に依れば種々なる注釋があつて唯識論には眞は眞實無虚妄の義如は如常無變易の義なりと云ひ大乘止觀には如何か是れ心を名けて眞如とするやとの間に答へて一切の諸法は此心に依て有るのであつて心を以て體とするものであるから諸法に望むれば諸法は悉く虚妄である。

諸法は實有にあらざれども只虚妄の因縁に依て然も生滅の相あり此心は不生不滅不増不減故に眞となし諸佛衆生同じく此一淨心を以て體となし凡聖の諸法は自ら差別の異りあれども此眞心は無異無差無相である故に如と名けたのであると云ひ又不變眞如隨縁眞如などの解釋もあるが要するに眞如とは吾人妙心の異名即ち宇宙に編滿せる大眞理を假りに名けたに外ならぬ換言すれば一實の大道のことである次に法界とは又妙樂とも云ひ所詮外なきが故に法界と名け聖法を生ずるが故に法界と名く等と申してあるが是れ亦要するに法界平等界は差別の義であるから平等即差別差別即平等の理を現はす爲めに法界と云ふたまでの事ぢや又之を教想家に就て尋ねれば法界の法は軌持軌則の義又は任持自性の義なり界は事理の二に約して事に約すれば分界の義理に約すれば性界の義にして前者は事に従つて分別し後者は性なるが故に變易なし此性と分とを交結して理事無礙法界となる一々の事法界互に融通無盡なれば事々無礙法界となるなど説き其他四法界十法界重々無盡法界など分立しまするが今はそふゆゑ細かい説明に渉る程の必要もなければ略します兎に角諸

法の存在せる世界は因果あり界畔分齊あれども其儘平等不二なりとの意味にて法界と云ふたのである。上來種々と説き明かしましたが歸する所眞如法界とは一心の總名ぢや、一切諸法は唯心の所現にして、一心の外に萬物なく、萬法即一心、一心即萬法、一心の自と萬法の他と別立する理由がない、此處を稱して眞如法界、他なく自無しと示されたのである。番に自他の差別か無いばかりでなく、一切の諸法は此眞如より現はれ出でたる者なるか故に、之を喩ふれば眞如法界は鐵の如きもので、自他差別の物象は鉄鎌鍋釜小刀の如きものである。鐵は實體にして鉄鎌鍋釜等は一時的の假相假名である。去れば實體なる鐵の上より眺むれば、たゞこれ唯一の眞如法界にして、各々別々の假相假名などはあり乍らありつづれてあるが然るに悲しい哉吾人は多く鉄鎌等の假相に惑ひ假名に執着して一實平等の眞理を知らざるが故に、自他の區別に妄分別を立て限りも無く愛取嫌捨の念を起して種々の悪業を造り出すのである。鹽官の齋安國師が一座主に向て「華嚴經に幾種の法界ありや」と問ふた時、座主は得意になりて略して説けば四種あり、廣く説けば重々無盡ありと答へた。すると齋安國師は、すかさず這箇は是れ

第幾種ぞといふて拂子を豎起され處か座主はグツとつかへて遂に一語をも發することか出來なかつた。乃て國師は思ふて知り處りて解するは日下の孤燈果然として照を失すと云はれたとの事であるが實に口には四法界とか重々無盡法界とかと喋々論究しても、只其名相や言句にのみ拘泥して居ては、イザといふ時には何の役にもならぬ。古人も書を讀みて悉く書を信せば書なきに如かずと云はれたる如く、たとひ百千萬卷の經論を讀破するとも文字に束縛さるゝ時は一句も解することを得ざらむ宜しく文字言句の束縛を脱して直に眞旨を識得すべきである。

急に相應せんと要せば唯不二と言ふ

佛道修行の大目的は本來人々具有する自己の佛智見に相應するのみの事である。此佛智見に相應するには果して如何にすべきかといふに、其方法手段等に就ては機類に應じて諸種の法門を施設せられてあります。要するに之を大別して頓漸の二教に分つことが出来る。即ち頓とは頓教で、一超直入如來地と云ふて

別に三祇百劫といふが如き緻密なる修行功勳を用ひず、慈直に佛知見を開發するの法である。漸教とは漸々修學悉當成佛で、恰も楷梯段を上るが如く、淺より深と次第に修行して遂に佛果を證得するを云ふ。而して我禪門は云ふ迄もなく頓教である。漸々修學といふ様な迂遠な路を廻らす慈直に佛知見に相應するのであるから、何ぞ五十二位の階級とか大小權實とかいふ多岐に渉るを要せんやちや、乃ち直下に不二の妙理を究むべきである。不二とは即ち無差別の大道をいふのである。華嚴經には諸法の中に於て二解を生ぜざれば、一切の佛法疾く現前するを得とあり、又無明住地の煩惱即ち是れ諸佛の不動地とも云ふてある。然るに凡夫は、迷悟凡聖淨穢の對待の妄見に住して修行するが故に、只煩惱妄想の歧路に迷ひ入るのみで、恰も轅を北にして越に向ふか如く、行けば行くほど却て大道とは遠く隔たりを來すのである。若しかくの如くなれば、千萬年を経るとも大道と相應するの時は無いのである。故に端的に從來の對待妄見を打破して、活機輪を轉じて不二の法門に證入らねばならぬ。不二の法門に入れば、自然に他なく、自なく、我と大道と一枚、心佛衆生の三無差別の大道が現前するのである。元來我禪

門の本來の知見より觀じ來れば既に相應すべき那一物といふものもなく、縦ひ不二と云ふと雖も早や第二第三である。況や自己以外に別に相應すべき一物を認めて、猥りに相應せんとすれば、大道と相違あること天地懸隔に至るのである。

不二なれば皆な同じ包含せざること無し

此の二句は上句を承けて不二の妙理を注脚したるものである。大道と相應して不二と成りたる時には、自他平等にして森羅萬象皆な同一法身である。是を佛の眞法身といふ。蓋し佛の眞法身は尙ほ虚空の如きである。虚空物なしと雖、よく一切の萬象森羅を包含して寸毫も殘す處はない。而も此包含には能包含所包含の相なく一心萬法を生じ、萬法一心に皈して能所兩ながら泯滅である。同じと云ふは如同の義で融合一致の意を云ふたものぢや、而して此融合たるや本來の妙理にして佛天人の所作にあらず、吾人が七尺單前兀坐一番の時自づと此融合體に皈し去るを以て妄想の除くべきも無く、眞如の求むべきも無きに至るのじや。

十方の智者皆な此宗に入る

智者とは前の「智者無爲の處に於て説明せし如く世間に云ふ博學や多識の意味ではなく自己本來成佛なることを識得して自己の本性を顯現せる者に名けたる。三世十方の諸佛歷代の祖師賢聖は皆此智者である。さて萬有諸法を包含する。此不二の法門といへる宗旨の中には三世の諸佛も十方の賢聖も歷代の祖師も皆な悉く誣入せられたるを以て各々自受用三昧に安住し無量の佛事巨測の神變も行せられたのである。淨名經に「滅定を起たすして諸の威儀を現すとあるは此の事である。宗とは流派の出づる所を宗と爲すと云ふ。又百川海に朝宗すとも云ふて、本源として最も尊とよべきものを云ふ。今此處に於ては心宗の宗で、ツマリ自己の妙心を云ふたのである。自己本來の妙心は千佛も萬祖も盡く攝入して餘すことなし。たゞに諸佛諸祖のみではない。天地間の一切萬象は皆な此宗に入らざるは無い。勿論不二法門は維摩經に於て文殊菩薩等が頻りに問答商量せし處なれば入り難きか如く見ゆるも元と是れ自己の一心に外ならぬので不二

を離れて外に諸法はないのであるから三世の諸佛十方の祖師も始めより入るべきもなく又出づるの理もないのである。然るに凡夫は自己迷妄の見地よりして出入の二邊に涉りて却て自分の宗旨に反くに至るのである。故に入るといふは當體一如の意と參するが宜い。

宗は促延に非ず一年萬年

前句を承けてさて此宗とは吾人各自が具有する一實妙心の事にて本より虛玄無着にして形相の上に大小なく時間の上に始終なく無形無相無始無終である。故に促延に非ずと云ふ。促延とは促はツ、延はハ、バ、スと訓して伸縮といふに同じ。伸縮なきと促延に非ずと云ふたのである。一念とは一刹那の間に起る心の發作をいふ。一刹那とは時間の最短なるを云ふたので、俱舍論には一彈指に六十五刹那ありと説いてある。以て如何に短時間なるか。想像される。其一刹那を百二十倍して一恒刹那と云ひ更に之を六十倍して一臘縛尙ほ之を三十倍して一牟呼利多、一牟呼利多を更に三十倍して一晝夜を云ふてあるから今此順に

よりて計算して見ると一晝夜の六百四十八萬分の一が一刹那、今の時間に直すと〇一三三秒時となると云ふ此等の計算は兎に角時間の最短を云ふたのを見ればよい、而して萬年とは萬は數學上の萬ではなく、大數を現はして多きを示したまで、無量劫といふも同じ、乃ち時間の最も長きを云ふたのである、要するに一念萬年とは時間の上に就て最短と最長とを現はしたに過ぎぬ、さて此吾人一實妙幻なる宗は之を促めて一念となすとも短にあらす、一念即無量劫である之を延べて萬年となすともまた長にあらす、萬年即一念である、畢竟して此心宗は無始無終なるを以て數量に墮せざるものある事を徹見せば一念即萬年萬年即一念にして一といひ萬といふも共に常住佛性の上の一時の假設に過ぎぬ、經に六十小劫猶ほ食頃の如しと云ひ又彼の久遠を觀するに猶ほ今日の如しなど云ふてあるを見ても以て此間の消息を伺ふことか出来る。

在と不在となく十方目前

前二句に於ては時間的に豎に三際を窮むることを述べたるが此の處に於いて

は空間的に横に十方に通ずることを説かれるのである、在とは當處を云ひ不在とは他方を云ふ、抑も此の法界不二の大道促延に亘らざる心宗は四維にふさがり十方に通じ塵沙界に徧滿して、自界他方皆なこれの心宗の露現であるから固より遠近の沙汰すべき限りではない、故に在の當處と不在の他方と現と不現とを論ずる迄もない、法界一心宗とすれば内外表裡の別なきを以て十方が直に目前目前が直に十方にして此間毫髮の隔歴する處はないのである、近代の學問の上にも於ても時間は無限なると共に空間の無限なる事を確認して居る、遠近とか古今とか云ふも、それは人為的の分別に過ぎぬ、假りに分別して見れば古今東西の上には天地の差を生じ、雲泥の相遠を現して居るも、これは無限絶對なる大虚空の上に僅かに一點を畫した様なものぢや、實體の上には決してかゝる差異のあるべきものではない、佛教では過去現在未來の三世を説くが、よし三世と云ふも一時の假名にして其實性は不可得で、無限の時間の上にはそんな區畫は立てられるものではない、過去と云ひ未來と稱するは、現在の一時を中心として假りに命名したことである、而してその現在も元來不可得で決して定相の認むべき